令和３年度

FD・SD 実施報告書

宮　城　大　学

目　次

令和３年度 FD・SD　・・・　1
（カリキュラムセンター副センター長　齊藤　奈緒）

第１部　マクロレベルＦＤ・ＳＤ　・・・　3

全学ＦＤ・ＳＤ
第１部
講演：「遠隔授業による教育の質保証について考える～ニューノーマルにおける大学運営に向けて～」
第２部
パネルディスカッション：「宮城大学における遠隔授業の取組と教育の質保証に向けた課題」
１．開催概要　・・・　4
２．講演記録、資料集　・・・　6
３．アンケート結果　・・・５３

第２部　ミドルレベルＦＤ・ＳＤ

１．看護学群　・・・５８
２．事業構想学群　・・・７０
３．食産業学群　・・・７２
４．基盤教育群　・・・７４
５．看護学研究科　・・・７６
６．事業構想学研究科　・・・８０
７．食産業学研究科　・・・８４
８．アドミッションセンター・高大連携室　・・・８８
９．カリキュラムセンター　・・・９２
10．キャリア・インターンシップセンター　・・・９４

第３部　ミクロレベルＦＤ・ＳＤ

１．看護学類　・・・９８
２．地域創生学類　・・１００
３．食資源開発学類　・・１０２
４．フードマネジメント学類　・・１０４
５．事務局　・・１０８
６．事務局学務課　・・１１０

令和 3 年度 FD・SD
（2021 年度）

看護学群教授
兼カリキュラムセンター
副センター長　　齊藤　奈緒

宮城大学では，平成 29 年度から大学運営・教育活動の充実につながる FD（Faculty Development）・SD（Staff Development）活動を推進し，実施規模レベルには，全教職員を対象にカリキュラムセンターが企画実施するマクロレベル（200 名規模），基盤教育群及び 3 学群，3 研究科，各センターが企画実施するミドルレベル（20〜50 名規模），有志が企画実施するミクロレベル（10 数名以下の規模）があります。カリキュラムセンターは，実施規模に応じて，計画立案・申請による予算補助・実施・まとめのプロセスを支援しています。そして，各レベルでの FD・SD の評価検証と次年度の企画改善に向けた検討資料として報告書をまとめ，全学教職員に情報共有して全学的な教育の質改善を目指しています。

新型コロナウィルス感染症の流行禍で開始した本年度（令和 3 年）は，with-コロナ/after-コロナというニューノーマルな教育・研究の質向上に向けて，昨年度から各部局で抱えている課題に向き合い、令和 4 年度カリキュラム改編に向けた教育の質保証への示唆を得る企画が立案されました。また，より専門的な知識・スキルを獲得できる質の高い FD・SD を目指し，昨年度のオンライン FD・SD のノウハウを活かして，著名な外部講師招聘の実現や，オンラインと対面のハイブリット形式等を取り入れた FD・SD が 19 件実施されました。8 月に実施した全学 FD・SD には 178 名（88.7%）の参加があり，教職員にとって参加しやすい環境やプログラムが工夫され，参加者の満足度も良好であったことが報告されています。

カリキュラムセンターでは，各階層レベルで教育・研究の質向上を目指した教職員の教育・研究力の育成及び自己研鑽のための企画，実施支援を継続いたします。特に次年度は，全教職員が参加しやすい環境・方法を整えること，また，新カリキュラム開始に伴い，本学が目指すニューノーマルな高度専門教育に向けて教職協働，教育研究連動を促進するよう，各レベルの FD・SD が効果的に連動する体制整備に取り組みたいと考えております。

マクロレベル:カリキュラムセンターが企画実施するFD・SD
宮城大学3学群の全教員と全職員 200名の規模

令和3年8月4日実施
遠隔授業による教育の質保証について考える
〜ニューノーマルにおける大学運営に向けて〜

ミドルレベル:各学群・センターで企画実施するFD・SD
20〜50名の規模

令和3年6月〜令和4年1月　各学群・センターからの実施報告　10件

ミクロレベル:各科目・小委員会等で企画実施するFD・SD
10名程度の規模

令和3年6月〜令和4年2月　各科目・小委員会からの実施報告　6件

図：令和 3 年度　FD（Faculty Development）・SD（Staff Development）活動概要

第１部

マクロレベルＦＤ・ＳＤ

第１部　マクロレベルＦＤ・ＳＤ

全学 FD・SD
第１部　講演：
「遠隔授業による教育の質保証について考える～ニューノーマルにおける大学運営に向けて～」
第２部　パネルディスカッション：
「宮城大学における遠隔授業の取組と教育の質保証に向けた課題」

１．開催概要　・・・　4

２．講演記録・資料集　・・・　6

３．全体ディスカッション・質疑応答

３．アンケート結果　・・・５３

令和３年度　宮城大学全学ＦＤ・ＳＤ

日時：令和３年８月４日（水）１２：５０～１６：００
場所：Zoom によるオンライン実施

次第

１．開会挨拶
２．【第１部】
　講演「遠隔授業による教育の質保証について考える～ニューノーマルにおける大学運営に向けて～」
　講師：鈴木 克明 氏（熊本大学 教授システム学研究センター　教授）
３．【第２部】
　パネルディスカッション
　　「宮城大学における遠隔授業の取組と教育の質保証に向けた課題」
４．閉会挨拶

Ⅰ．開催概要・報告

【概要】

新型コロナウイルスと共に始まった令和 2 年度から本年度も遠隔授業が継続されている地域もある。本学においても、遠隔授業に関する学生と教員へのアンケート調査を実施し、学修・教育上の課題を確認しながら教育の質の保証に取組み、運営してきた。本年度の授業形式を検討する際には、「対面授業と比較して遠隔授業の方が効果的であるか」が問われた。しかし、「効果的」であるとする視点・基準・解釈は、個々の教員によって、また、科目の性質によって相違がある現状もある。また、遠隔授業による学生への影響は多様で複合的であり、学習支援や環境調整上の課題もある。

今後、コロナ禍の代替方法としての遠隔授業ではなく、対面授業と比較した教育の質を確認しながら、IT 技術を活かした教育方法や、遠隔授業の効果的な導入も求められている。さらに、遠隔授業によって、これまでに得られなかった学習履歴データが多く集積されている。今後、新たにこれらの学習・教育データを活用しながら学修評価を行い、教育の質を評価・保証していく必要があると言われている。また、遠隔授業に対応する学習環境や学習支援上の整備も必要である。したがって、本年度の全学 FD・SD では、改めて、遠隔授業による学修・教育上の利点と課題についてふり返り、宮城大学での今後の遠隔授業のあり方や、遠隔授業による教育の質の保証について検討する機会としたい。

【実施報告】

令和３年８月４日，宮城大学大和キャンパス大会議室を本部として，Zoom によるオンラインにて全学 FD（ファカルティ・ディベロップメント）・SD（スタッフ・ディベロップメント）を実施し，役員・教職員合計 178 人が参加した。

川上伸昭学長の開会挨拶の後，第１部では，熊本大学 教授システム学研究センター教授の鈴木克明氏をお招きし,「遠隔授業による教育の質保証について考える～ニューノーマルにおける大学運営に向けて～」をテーマに御講演を賜り，アフターコロナ，ニューノーマルな中での大学教育をどう進めていけばよいか，遠隔授業だけではなく，対面授業も含めて与えられた環境と方法の中でそれらをいかに有効に利用し，その価値としての教育効果を高めていくかという観点でお話をいただいた。

第２部では,「宮城大学における遠隔授業の取組と教育の質保証に向けた課題」をテーマに、各学群事務局で実践してきた内容についてパネリストの方々にお話しいただき，コメンテーターの鈴木先生を交えて意見交換を行った。

講演の後，質疑応答では，参加者とパネリストでディスカッションを行う場を設け，参加した教職員が理解を深めながら，これからの宮城大学が取り組むべき課題について共有した。最後に，カリキュラムセンター長の蒔苗耕司教授の挨拶をもって，閉会した。

【第1部】講演：「遠隔授業による教育の質保証について考える
～ニューノーマルにおける大学運営に向けて～」
熊本大学　教授システム学研究センター　教授　鈴木　克明　氏

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました，鈴木でございます。経歴にも出てきたように，私は東北地方が長く，今熊本の暑さに辟易としているところで，最近東北もとても暑く，大変な日々をお過ごしと思います。顧みると僕はアメリカに留学して帰ってきてから最初は東北学院大学の教養学部をつくったときのメンバーで，岩手県立大学もつくったときのメンバーでもあり，新しい教育を次々つくっていき，熊本大学においても創設のときからインターネット型の大学院に関わっているという人です。落ち着きのない人でして，まさか九州に来るとは思っていなかったのですが，東北の日本酒をこよなく愛する私といたしましては，20年住んだ東北地方が懐かしいなという思いを今でも持っております。

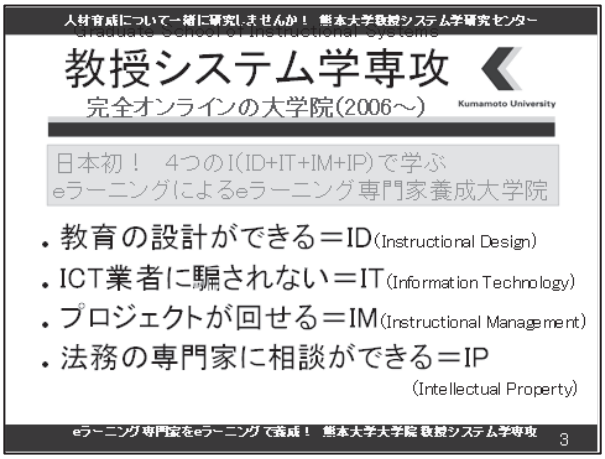
宮城大学は創設のときから存じ上げていて，フードサイエンスや3年ぐらい前には，ラーニングコモンズを大々的にされ，看護学群では珍しいPC必携もされたということを学長から伺って，どんどん進歩されているなという印象を持ちました。

今日は60分お時間をいただいたので，「遠隔授業による教育の質保証について考える～ニューノーマルにおける大学運営に向けて～」ということでお話しします。

私は，今年の3月まで日本教育工学会の第8代の会長を務めており，現在は監事を務めているのですが，世の中には教育工学という学問があるということがコロナ禍で知名度が上がった感じは持っているのですが，教育を工学的に研究しているという分野で，3,000人ぐらいの会員がいます。皆さんがぜひ教育をよくしたいということであれば，この日本教育工学会の会員になることを検討していただきたいと思います。教育をどうやってするかということを学問的に実践的に研究し，交流している学会でございます。

その他いろいろさせていただいていますが，日本医療教授システム学会は，13年ほど前につくった学会で，僕も最初から関わらせていただいていて，医療系で教育の悩みを抱えている人たちを集め，医療人の教育の改善に向けて，教育工学の知見を医療の領域に適用し，優秀な医療者を育てる仕組みの構築にむけて進めておりますので，この学会の構成員の半分は看護系の人ということもあり，看護学の先生にはぜひこの学会のことも知ってもらいたいと思います。

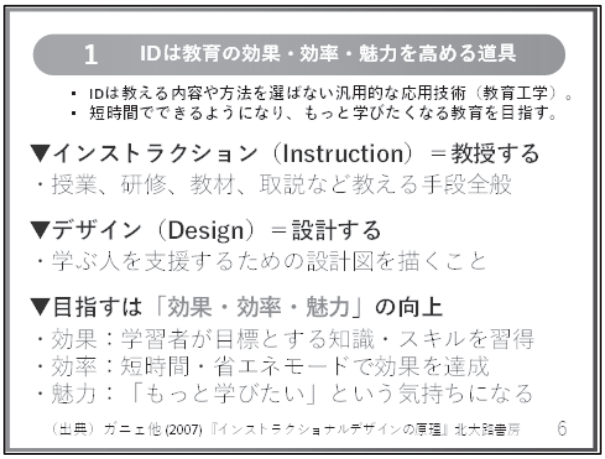
そこで，本職の大学院は2006年につくり，「日本初！4つのIで学ぶeラーニングによるeラーニングの専門家養成の大学院」として完全オンラインでやってきました。16期生をこの春迎え，僕の専門が教育の設計Instructional Designができる人，そしてICT業者に騙されない程度のITの常識を持っている人，「それ高いよ」などが言える人を養成しています。「そんなにかかるの。もっとすぐできないの。」ということを注文できる,プロジェクトが回せる程度のマネジメントのスキルを身に付けることができます。また，僕がアメリカで通っていた大学院の名前をそのままつけて，「教授システム学専攻」という名前で始めました。



熊本にeラーニング専門家になりたいという人はあまりいないので，熊本大学が打って出るためにはオンラインの方がよいのではと考え，学長直下のプロジェクトで始まり，新しいものをつくりました。スタッフも教員も熊本におりますが，熊本に学生はおりません。関東が半分ほどを占め，北は北海道，海外を含めてあらゆるところに住んでいます。オンラインだけで修士と博士を取得でき，eラーニングの専門家になって教育の設計ができる人を育てるということをここ15年やってきました。これについてもぜひお見知りおきいただきたいと思います。特に若い人たちで教育についてもっと深く知りたい，遠隔教育，eラーニングについて詳しく知りたいという人は，ぜひ本学の門を叩いてもらいたいと思います。大学の職員や大学の先生，それからメーカーさんや，いろいろな職種の中堅どころの人たちが集まってきている大学院でございまして，僕が医療系で活動してきたこともあり，今本専攻の学生の半分くらいは医療系の人たちで，専門学校の先生や病院の教育担当のナース，あるいは医師や理学療法士など様々いらっしゃいます。大学に限らず，いろんなところでとにかく教育の問題というのはすごくシリアスで，特に病院は大変です。看護師の離職率が高いという問題をどのように克服するか，いきなり教育担当になれと言われて，教育のいろはもわからずうちの門を叩いて来るわけでございます。このFD活動が何年か前から義務化されましたが，大学の教員も無免許ですし，教育についての素人集団でございますので，そういう意味では病院のナースと似たようなものかなと思います。そこ

で，熊本大学は「教え方を教えます！」とキャッチフレーズを掲げてやっています。

Instructional Designとは，教育の効果・効率・魅力を高める汎用的な応用技術を目指している工学という学問でして，Instructionというのは授業，研修，教材，取扱説明書，それらをデザインするということです。何をデザインするかというと，台本を書くわけではなく，学ぶ人をいかに支援するかという設計図を描くというのを仕事としていています。

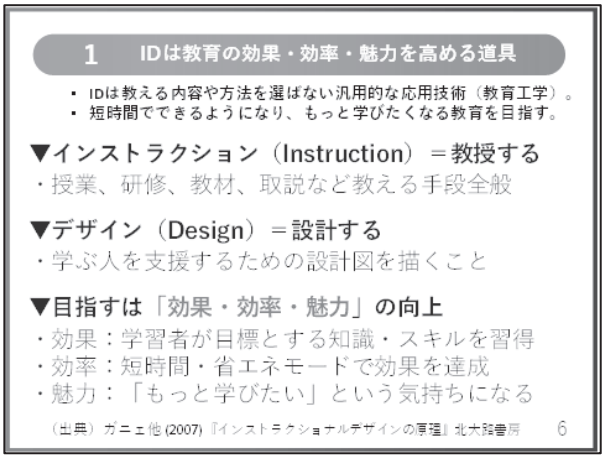


目指すは効果が高くて効率がよくて魅力的な教育です。

効果というのは，もちろんシラバスに書いてある目標をみんなが達成して，みんなが単位を取れるということ，それをいかに短時間に省エネモードで達成するかというのが効率であり，工学的な考え方です。教育っていうと，何か一生懸命やるのが教育だという印象がありますが，それでは続きませんので，どうやって効率を上げていくかが重要だという視点に立っています。

魅力なのですが，もっと学びたいという気持ちになって終わってもらうということです。これがうまくいくと，次が楽です。もっと学びたいと思って来ますから。少しアドバイスすると勉強できる，そういう人が育つのを理想にして，さあ次のステップはどうしようかという研究をしています。60年，70年ぐらいの伝統を持っているものです。

そこで，これは私の関わってきた代表的な設計マニュアルシリーズというのですが，幅広いということを見ていただくために，最初につくったのがこの「教材設計マニュアル」で，「独学を支援するために」という副題をつけましたが，教材をちゃんと作ればその教材を見ながら独学ができるのではという発想です。

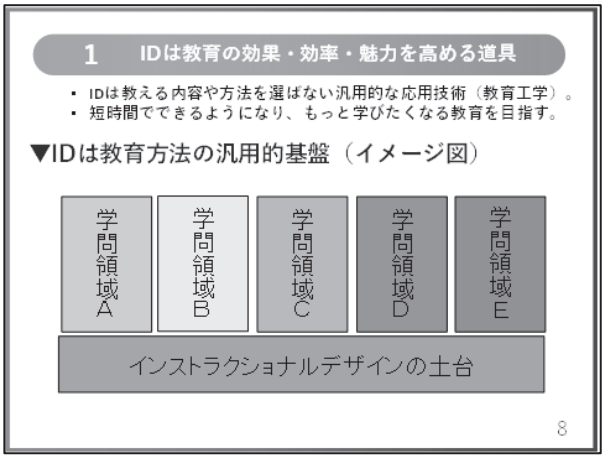


2冊目に書いたのが小学校・中学校の先生を主たる対象にした「授業設計マニュアル」ということで，これは東北学院大学の稲垣先生と一緒に作りました。

3冊目が「研修設計マニュアル」ということで，「人材育成のためのインストラクショナルデザイン」という副題をつけましたが，企業や大学の教職員も含めて，研修はたくさんあるわけですが，それをどういうふうに設計するのかということです。「教えないで学べる研修」と帯に書いていますが，教えるということをやり過ぎると学ぶ機会が

なくなるので，それをどういうふうに教えないで学べる研修にしていくかというのが重要な発想なのではないかということです。

最後に書いたのが「学習設計マニュアル」ということで，これは副題が「「おとな」になるためのインストラクショナルデザイン」としたのですが，これは科研の研究成果を大学1年生に，要するに学び方を学ぶというコンセプトでインストラクショナルデザインのこれまでの知見を教えることはできないかという発想で，はこだて未来大学の美馬先生と一緒に作った本です。この本の対象は1年生です。スタディースキルあるいは大学入門のようなコースです。コンセプトは，これを1回やらせておくと，あとは教えるのが楽になるということです。大学生になったのだからちゃんと自分で勉強しろよって言っただけじゃ，どうやってやるかわからないですよね。ではこの本を見て学び方を学びましょうということができるように，テキストを作りました。

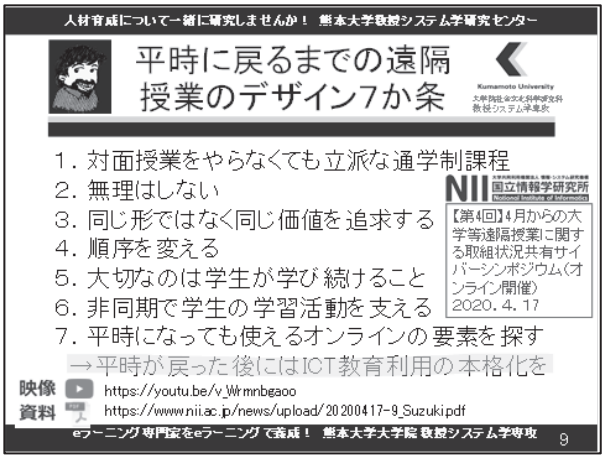


インストラクショナルデザイン，教育工学の土台というのは，様々な学問を教えるときに基盤となる共通な応用技術というふうに捉えていまして，例えば貴学でも事業構想学群や看護学群，食産業学群があり，それぞれ個々の教え方というのが当然あるわけです。その基盤となる共通的な知見は何なのか，教育方法の共通的な技術は何なのかを考えると，インストラクショナルデザインを学ぶのがいいのではという考え方です。教育工学はもともと何を教えるかに関わることをずっとやっていますから，様々な学問領域の基盤をつくろうという発想です。

日本教育工学会では，約10年FD活動にも取り組んできていまして，その成果をまとめたのがこの「大学授業改善とインストラクショナルデザイン」という日本教育工学会が監修したものです。これはFDセミナーの舞台裏を含めて全て赤裸々に本にしてしまったというものです。ですから，本を学んでもセミナーを受けてもどっちでも勉強できますよという状態になっていますので，ぜひこれもお見知りおきをいただきたいと思います。

以上，長々と私の自己紹介でした。こういう人だということをまず知っていただければと思います。

日本教育工学会の会長を務めていたとき，国立情報学研究所のセミナーの第4回で「平時に戻るまでの遠隔授業のデザイン7か条」と題してお話しました。これは大変多くの方に視聴いただいて，いまだにウェブサイトに載っていますので，もしご興味があれば，これは8分間のスライドなのですが，ご覧いただければと思います。



そこで申し上げたのは，有事だということです。何の前触れもなく，何の準備もなくコロナ禍での教育が強いられました。とにかく僕がここで伝えたかったのは，無理をするなということだったのですが，宮城大学の場合はPC必携にしていたというのが非常にタイミングがよかったと思います。そうでないところはまずどうやってつなぐのかというところから入って，えらい大変な苦労をされてきました。ところが、本専攻の場合は何も困ってなかったのです。それはそうです，もともとオンラインだけでやっていたわけですから，コロナ禍になろうが何になろうが，熊本地震のときも幸い電気とインターネットの回線は切れなかったので，変わらず授業をやっていました。熊本大学そのものはゴールデンウィーク明けまでは春学期が開始できなかったのですが，本専攻は今回のコロナ禍でも何の問題もなくやっていたので，体験談がありませんでした。コロナ禍は日本だけじゃないので，いろんなところを調べて，専門家が発しているメッセージを要約すると，無理するなということでした。そこで，2番に「無理はしない」ということを掲げました。

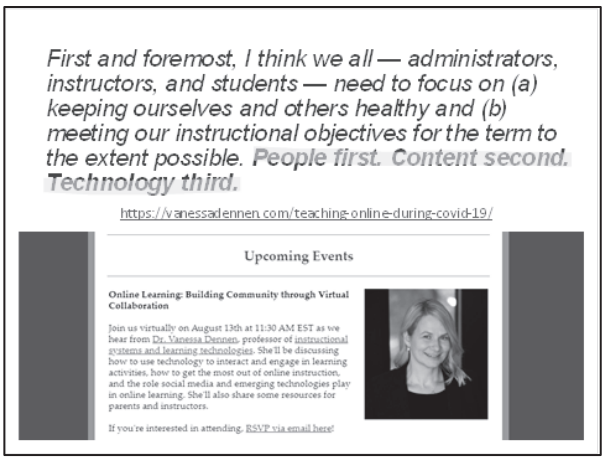
ちなみに，1番の「対面授業をやらなくても立派な通学制課程」というのは，私どもがずっと15年間やっていたものでございます。これはなぜか通学制課程として文科省から認可を受けているわけで，いわゆる皆さんこのコロナ禍で学んだことの一つかもしれませんが，高度のメディア利用というのは対面相当だということになっていまして，だからうちはスクーリングもやっていません。通学制ですからスクーリングがなくて，オンラインの授業が対面相当という，高度なメディア利用ということで展開してきました。

あとは，「同じ形ではなく同じ価値を追求する」ということです。簡単なものからやる，「順序を変える」，「大切なのは学生が学び続けること」であって，「教員が教え続けることじゃない」ということや，「非同期の重要性」，今は無理しなくても平時になったときにこの要素は残してもいいのではということが1つでも見つかれば御の字ですよということをいうことをお話ししたわけです。

さて，今平時が戻りつつある段階に来ていて，ICTの教育利用を本格化するためにはどうしたらいいかというようなことを考える，少し落ち着いた状態になったのではない

かというふうに思います。

このときに調べたことの一つで，僕が留学していたフロリダ州立大学のデレン教授が言っていたことを紹介します。「People first Contents second Technology third」まずとにかく健康を保ち，生活の基盤を維持するというのが大事なのでPeople firstだということです。要するに有事なのだから，普通の教育を続けられると思うなということです。



次のContents secondというのは何かというと，「meeting our Instructional objectives for the term to the extent possible」，「for the term」というのは学期です。学期に設定されている「Instructional objectives」，目標です。学習目標が「to the extent possible」だから，可能な限りそれに近づくようにしましょうねという，それがContents secondです。つまり，やり方はどうでもよく，一人一人の学生がちゃんと目標に到達することが重要だということです。その上で，「People first Contents second」の上でテクノロジーのつなげ方というのを考えるということです。

こういう順番を忘れると，何かつなげたからハッピーみたいになってしまいます。授業が成立したからハッピー。そうではないということなのです。授業のやり方は変えても，ちゃんと一人一人がシラバスに書いてある学習目標に到達できれば，それがいい授業なのです。当たり前の話ですが，それを忘れないようにしないと，有事の混乱に紛れて何か違うことが優先されてしまうのではないかという警鐘を鳴らしていたのです。

このデレン教授だけではなく，いろいろな人が無理するな，すぐにまともなオンライン教育ができると思うな，それからとにかく全部やろうとするなと言っていました。大学の先生は真面目な人が多いので，あまり真面目にやり過ぎると健康を害するよというような話です。有事なのだからこそ落ち着いて，できるだけのことをやるということに専念するという姿勢が強調されていました。

Educauseというアメリカを中心とした高等教育機関が集まっている研究会で，アフターコロナの大学のニューノーマルに残したい5つの要素について記事が出ていたので，それを紹介します。まず，1番目は「意味生成のための協働的テクノロジー」です。これはGoogle Docs，ディスカッションボードやホワイトボード，様々なテクノロジーが使われましたが，結局は上意下達で一方通行のような広義な配信ということではなく，意味を生成するためのコラボレーションです。学生同士のグループワークを活性化するということを残したいのだということです。そのためにGoogle Docs， Wordのような書類をみんなで書き込んで行うものやホワイトボードのようなテクノロジーを使ってみんなで書き込んで行うなど，ディスカッションボードでもホワイトボードでも何でも良いと思います。何のために使うのかと言いますと，グループワークのために使います。そこで何か考えをまとめたり，新しいものを生み出したりということのために使うのが最適です。これはぜひ残したいということが挙げられました。

eラーニング専門家をeラーニングで養成！　熊本大学大学院 教授システム学専攻

アフターコロナの大学のニューノーマルに残したい5つの要素（Educause 2021）

https://er.educause.edu/articles/2021/3/improvel-student-engagement-in-higher-education-post-normal#id12

要素	望まれる効果等
1，意味生成のための協働的テクノロジー	GoogleDocs、ディスカッションボード、ホワイトボード等
2. 学習とテクノロジーの学生エキスパート	学部学生が活躍・貢献できる場面を増やす。教員の指南役も。
3. インフォーマルコミュニケーションのためのバックチャンネル	テキストメッセージの交換を日常的に行っている世代に親和性が高く心理的抵抗が低い
4. 協働学習のためのブレークアウトルーム	知識の確認、ケースの解釈、省察や質問等のグループ作業
5. 学習空間拡張のための録画提供	学生の再視聴と教員の授業分析を可能にする

2番目は「学習とテクノロジーの学生エキスパート」です。これは学部学生が活躍・貢献できる場面を増やしてはどうかということです。学生の方がデジタルネイティブですし，彼らは生まれたときからICTに囲まれて生きてきたわけなので，むしろ教員よりもよくできるのです。正式な場面をつくらなくても，このコロナ禍でアメリカでは特に学生がボランタリーで困っている学生を助けるなど，テクノロジーについては，もちろん学生によっては苦手な人もいますから，そういう苦手な学生を得意な学生がサポートするというようなことがどんどん自発的にできたのだということが見受けられたとこのレポートには書いてありました。テクノロジーの学生エキスパートに加えて，従来からある学習の学生エキスパートです。これはいわゆるラーニングコモンズなどで行われているピアチュータリングのことを意味しているわけですが，アメリカでは大学の大衆化が随分日本より先行して進んでいますから，上級生が下級生を指導する，去年優秀な成績である科目を取った学生が，アルバイトの仕事としてラーニングコモンズでピアチュータリングをするというシステムです。これがどのように質を保って行われるかということはもう確立されている仕組みがあります。日本では宮城大学と同じ公立であれば沖縄の名桜大学が有名で，チューター資格を国際的に認証している制度があり，その認証を受けてチューターを育成しているということです。日本では今名桜大学のほかにはこだて未来大学も行っていますし，最近ですと神田外語大学という東京の私学も認証を受けました。ピアチュータリングの認証制度を今後も維持し，実施していないところには

それを導入して，安定的に学部学生や上級生が活躍し，下級生に教えるというような仕組み，これはぜひニューノーマルにも残したいということが挙げられました。

3番目は「インフォーマルコミュニケーションのためのバックチャンネル」，これは日本だとLINEですね。LINEでテキストメッセージの交換というのは当たり前にやっていますから，例えばZoomでつないで同期型の講義をやっている間にも，「これはどういう意味だ？」「あれ，なんかわけわからないな」「これはこういうことなのではないか？」などをテキストメッセージでやりとりするバックチャンネルというものを活用する例が多く見られました。日常的に彼らはこういうことをやっていますので，どうやってアフターコロナのニューノーマルにこの心理的抵抗が低いコミュニケーションのチャンネルを残していくのかということも重要な要素だと指摘しました。私どもはオンラインで学会や研究会をやるときに，必ずバックチャンネルのチャットで，「ちょっと音声が弱いようですよ」「ここの部分飛ばしちゃいましたよ。次の機会にもう一回言ってください」などといったバックのサポートチャンネルをつくるノウハウは身につきましたが，そういうことを大学の授業の中にどうやって組み込んでいくのかということを考えることが重要であると思いました。

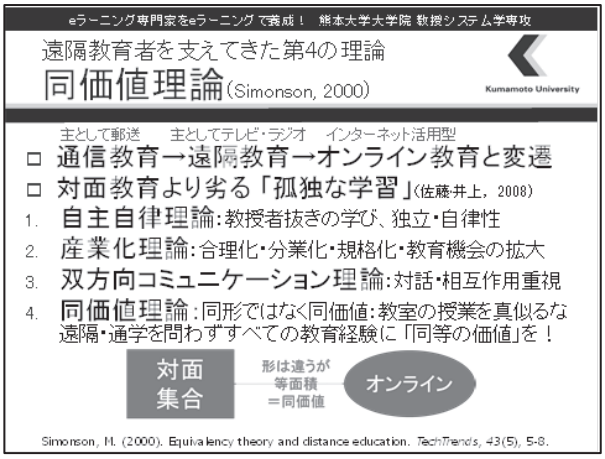
4番目は，「協働学修のためのブレークアウトルーム」です。Zoomの機能としてある時期から追加され，これも随分賢く使われた例が増えてきました。要するにこれもグループワークです。1番目と同じように，全体を相手に先生が1人でやるのではなく，グループに分けてブレークアウトルームをつくって，知識の確認やこのケースについてどう思うか意見を交換したり，学んだことを省察したり，質問等をグループ作業でブレークアウトを使う，これも残したいということが挙げられていました。

5番目は，「学習空間拡張のための録画提供」です。国立情報学研究所から，「データダイエットのすすめ」が出まして，回線がパンクしてしまい，なかなか同期型の全員がリアルタイムでつなぐことがなかなか難しいので，事前に録画して，それを配信するような形にして欲しいというお願いが出ました。自前のラーニングマネジメントシステムを持っている大学ではそこにアップしたり，YouTubeのチャンネルを使ってアップしたりして，録画を提供するということをしました。Zoomでも，今回のこの講演も録画というボタンを押すだけで録画でき，動画ファイルが作成されてしまうようなとても簡便なツールになりましたので，Zoomを使ってリアルタイムで授業をするときは録画して，それをどこかで再視聴可能な形にすると，学生がもう一回見直ししたり，講義でも今まで質問とかわからないことがあってもそのまま流れていってしまうところを，録画を見ることができれば自分がわからないところだけをもう一回見たりすることもできます。非常に便利だということも知れ渡りましたということで，これもぜひ残したいということが挙げられました。

もう一つ，5番で言っていたのは，学生の再視聴だけでなく，教員の授業分析にも使

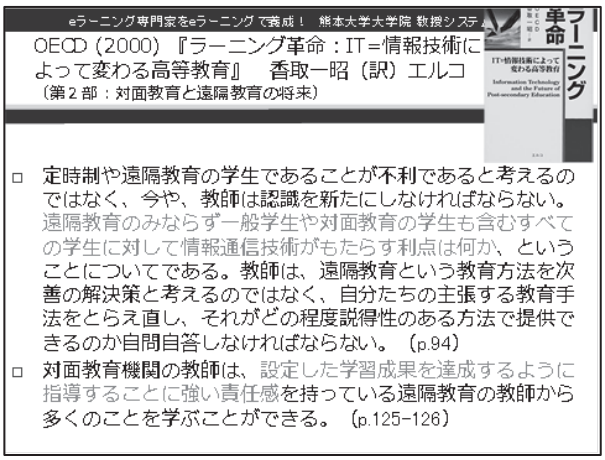
えるということを述べていました。最近Institutional Researchで，大学が持っているデータをどういうふうに質保証に使っていくかということも話題になることが多くなってきましたが，そういうことにも使えます。

以上のように1番から5番までのことが，ある意味当たり前のところが多いのですが，発想としては，せっかくコロナ禍でいろいろ試したのだから，何を残したいのかということを改めて振り返り，そしてこれは効果的だから対面授業が元に戻ったとしても残すということを考えることによって，今までの授業をワンランクアップするというようなことを考える非常にいいチャンスになるのではないかと思います。



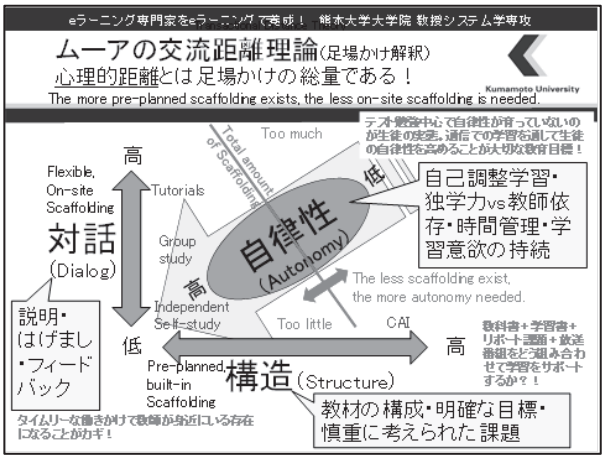
ここで改めて振り返り，遠隔教育では何がやられてきたのかということです。宮城大学は通信課程をお持ちではないと思うので，あまりわからないと思いますが，遠隔教育はこのコロナよりだいぶ前からあり，常に対面教育よりも劣る孤独な学習だと言われ続けてきて，それを何とかしたいという遠隔教育者はたくさんいました。そのときに様々な遠隔教育の良さがどこにあるかということを検討してきていました。

そこで，4番目の「同価値理論」というのは，対面教育と同じやり方をやっていたのでは絶対劣るので，教室の授業を真似しない方が良い，「同じ価値を追求することを目指さないといけない」ということです。遠隔教育には遠隔教育のやり方があるということが同価値理論なのです。僕はオンラインオンリーの大学院を始めるときに，講義をビデオに撮って，そのビデオを流してというようなことはしませんでした。なぜしなかったかと言いますと，同じ形でやったら絶対対面教育より劣るからです。違う形で，もっとオンラインの潜在的なものを生かしていくというデザインを考えなくてはいけないだろうと今までやってきました。



そのうちの一つにこの「自主自律理論」というのがあるのですが，OECDが2000年，ICT技術が発展してきたときに，「ラーニング革命」という本を出しまして，「情報技術によって変わる高等教育」という訳本も出されているのですが，遠隔教育はITが出たことによってリアルタイムでコミュニケーションができるようになったということが背景にあり

ます。遠隔教育だけではなく，一般学生や対面教育の学生も全て情報通信技術がもたらす利点は何かということを考えなくてはいけないのではないかということを提言しました。非常に不利で，恵まれていない，毎日学生に会えない，毎週学生が来ない，そういう状態に置かれてきた遠隔教育を担ってきた教師は，それだけ設定した学習成果を達成するよう指導することに強い責任感を持ってやってきたのだ。対面教育機関の教師もそこから多くのことを学べるのではないかという提言を出したのです。OECDの提言が出たのが1997年，訳本が2000年に出ました。いわゆるそこから失われた20年があったのではないかということで，実はコロナ禍以前から使えたわけです。恐らくそういう背景から，PC必携ということに踏み出されたのだと思いますが，では必携にしたらどうやって使わせるのかという問題が今度出てくるわけです。買わされたのだったらちゃんと使ったという実感がないと，何で買わせたのかってことになって，不満のネタになってしまいます。コロナ禍だからICTに依存しなければいけませんでした。今度はコロナ禍が終わって対面が戻ったとしても，20年前にOECDが警鐘を鳴らした情報通信技術，ICTが対面教育の学生にも何をもたらしてくれるのかということを今考えなきゃいけないのではないかと思います。



そのときに，僕は絶対的に考えてほしいことが1個だけあります。それは「自律性を育てる」ということなのです。「自律性」とこの図の真ん中に書いていますけど，大学というのは，高校で先生に言われたとおりに勉強してきた人たちを迎え入れて，そのまま出しては良くないということです。つまり高等教育機関は，入ってきたときは大して自律性がない人たちを相手にしなくてはいけないのですが，出るときには自律性を高くして卒業させなくてはいけないのではないか，そういう役割が世の中から期待されているのではないかと考えたときに，自律性をいかに育んでいくかということがかなり重要なこれからのポストコロナの大学を考えるときの目標になるのではないかと思います。

遠隔教育を長い間支えてきたムーアの「交流距離理論」というものがあります。これが今注目されるものなのではないかと思います。遠隔教育というのは先生がいないところで学ばなくてはいけない，教授者抜きの学びというのが要求される宿命にあります。そうすると，何がメリットかと言いますと，独立性や自律性が育つのだということを自覚したということです。本当だったらそばについて，ああでもないこうでもないと言ってあげたいのですが，それができません。できないということを逆手に取ればどういうことがメリットとして浮かび上がってくるかと言いますと，自律性を育てるということ

なのではないでしょうか。自律性というのは，自己調整学習・独学力や教師依存の体制から脱却し，自分で時間を管理し，学習意欲を自分で高めて維持していくというようなことができる人です。「私それ習っていません」なんて言われては困りますので，習っていなかったら自分で調べ，誰かに聞く，どうやってアプローチしたらいいか教えてもらうというようなことを自分でやるなど，そういうことができる人にして世の中に送り出さないといけません。恐らく，特に看護学群は困ると思うのですが，看護学群に限らず宮城大学の卒業生は自分でできますねというような評判を立てるためには，自律性を育成するということが，例えばプロジェクト学習とかを入れるときに何で入れるのかと考えたときに重要になってきます。自分で回す力だと，マネジメントする力だというようなことが重視されているのですから，これを何か副産物のように捉えずに，真ん中に据えたらいいのではないかと思います。

そこで，ムーアの「交流距離理論」というものはどういう理論かというと，1970年代に提唱されている理論ですが，遠隔教育の遠隔というのは物理的な距離ではなく，心理的な距離であるとまず定義しましょうということです。大教室の後ろのほうに座っている人は，同じ教室という空間をシェアしているわけですから，物理的な距離はそう遠くないですが，先生との間で心理的な距離が縮まらないというケースがあります。二人称の関係になれないような場合を指します。ゼミだったらよく知っている間柄になるかもしれませんが，対面しているからといって必ずしも心理的な距離が近いわけではないだろうということです。このことから考えると，遠隔教育で地球の裏側にいたとしても，その人との距離をどうやって心理的な距離を縮めることができるかということを考えることが重要です。遠いからできないと諦めるのではなく，心理的距離を縮めるという方向で工夫ができると考えたのがこのムーアの「交流距離理論」というものです。

ムーアがどうしたら心理的距離を縮められるかということを考えたときの要素は2つあり，Y軸の「対話」とX軸の「構造」です。

「対話」は非常にわかりやすく，頻繁に柔軟に語りかける，励ましたり，あるいは困っている学生にここはこうなんじゃないのってアドバイスしたりフィードバックしたりというような対話が頻繁に，しかもタイムリーにあれば，心理的な距離が縮まります。会えなくても仲良くなる手だてはあるということです。これは恐らく学生同士にも言えると思いますが，学生同士全然会っていなくても，グループワークをして，ああでもないこうでもないとやる中で，あるいはその前後の雑談のようなものの中で対話がきちっとなされれば，距離感は短く感じるのではないかということです。

他方の「構造」というのは，しっかり組み立てられていて，先生がちゃんと用意してくださっているなということがわかると心理的な距離が縮まるだろうと考えられています。シラバスや学習目標がしっかり書いてあって，それを達成するためには何をやっていくと地道に単位修得に近づいていけるかというようなことです。教材の構成とか目標

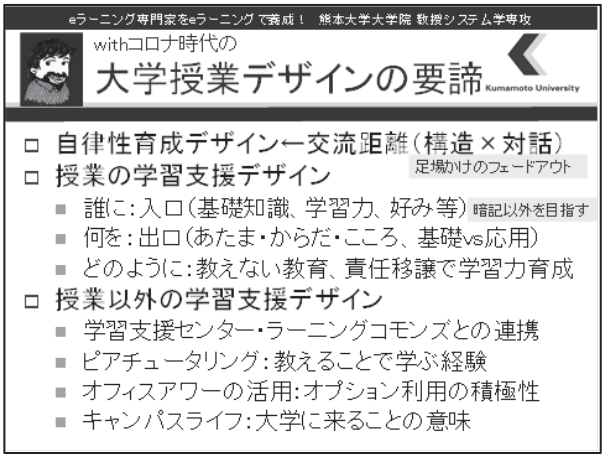
が明確に書いてあり，それを達成するために慎重に考えられた課題が用意されているということなのです。

なおかつ，昨今ですとそれを先生が決めたとおりにやらなくても，学生の自由な組み合わせ，あるいはオプションなど，そういうものを用意してあげることも可能になってきています。「対話」が学習中のやり取りであるのに対して，「構造」というのは授業が始まる前にどのように学習を支援するものとして用意できるかということです。その「対話」と「構造」が，高い・低いが両方ともあり得るわけで，この先生は最終試験で何の問題を出されるかわからないという，心配な気持ちで過ごすのではなく，1個1個積み重ねていける授業にして，なおかつ「大丈夫ですか」という励ましやフィードバックを，こまめにチェックしてあげるという，「対話」も「構造」も高いというのが一番親切です。それに対して，何をやっているのかよくわからないし，自分で模索しなくてはいけないものが多いし，先生は何も言ってくれないし，自分はこれで大丈夫なのか，とても心配だというのが両方とも低いような状態です。

「構造」をいかに明確に用意して，「対話」の量をいかにタイムリーに適切な量を提供するのかということによって，心理的距離が縮まったり離れたりします。

もうひとつの要素が，「自律性」です。自律性が高い人と低い人がいて，低い人は当然のことながらいろいろ世話を焼いてもらうのがうれしいわけです。シラバスは何をやらなくてはいけないか明確に書いてあるし，授業を始めた後も先生，あるいはTAの方，あるいはピアチューターの方が自分の歩みを見守って，必要に応じてヘルプをくれるという体制が一番歓迎されます。ところが，これをずっとやっていたのでは，いつまで経っても子供のままになるのではないか。最初は懇切丁寧にやるとしても，するとしても，徐々に足場を外していく関係にならないと，いつまで経っても自律性を高めることはできないと考えています。

大学なのだから勝手にやれと言って放任主義では絶対良くないので，それはこうやってやるということを懇切丁寧に最初はやったとしても，じゃあ次はあなたにここの部分は任せるからやってごらん，オプションは幾つかあるからどれでもいいから選んでごらん，1個以上やればいいよ，あるいは自分でこれにない，1から5じゃない6番，7番をやってもいいよという，徐々に学生に任せる部分を増やしていって，そういうことによって自律性を高めるというデザインを意識して，4年間のカリキュラムを考える必要があるのではないかと思います。そういう状況じゃないと怒られるかもしれませんが，少なくとも4年の歳月があるのだから，最初から期待するのは無理なので，少しずつ自律性のかけらでも身につけさせるような接し方というものができないだろうかと思います。



今後の大学は，大学が学校化していて，学生が生徒化しているという警鐘は随分前から鳴らされていますが，最近の大学は親がうるさいから，学生が頼りないから，様々な理由でお節介を焼き過ぎますよね。とにかくそれをまずは反省し，自律性をいかに育成するかということを考えましょう。そのためには，ムーアの「交流距離理論」の「構造」と「対話」の足場かけをだんだんフェードアウトしていくということが重要な指針になるのではないかと思います。

では，授業のデザインというのはどのようにするかといいますと，これは当たり前の話なのですが，教育工学，Instructional Designでは，「誰に」「何を」「どのように」教えるかということです。

入口と出口で，出口が到達目標で，入口が現状で，入口ではまだ目標に立ってないからそのギャップを埋めるために授業というのがあるわけですから，入口というのは授業が開始した時点のことです。1年生の1学期は入学したとき，後期の授業は1年の前期が終わったときが入口で，そこまでに何ができているようになっているかで，それを受けて自分の科目が始まり，どこまで到達させるのかという出口を目指していくわけです。入口を意識して，学生がどのぐらいのことを知っていて，どのぐらい自分で学ぶ力があって，テクノロジーや対面の授業の何をどういうふうに好んでいて，何が苦手で，どういうことが得意だというようなことを把握しましょうということです。以上が「誰に」です。

「何を」は，出口として自分の担当の科目はどういう目標を掲げているのですか，シラバスに投げかけてあるのですかということです。頭脳を鍛えるという「あたま」，それから何かができるようになる手技とかも含めた「からだ」の問題，どういうプロフェッショナリズムや学習意欲という心の問題を育むのかという「こころ」の問題，あわせて「あたま・からだ・こころ」で考えます。

そのときに，僕はすごく重要だと思うのは，基礎から初めて応用というカリキュラムは効果的でもなければ魅力的でもないので，もうそれは逆転させる必要があるだろうということです。応用問題から入って，「できないだろう？できないだろう？そうだろう，じゃあこの基礎をやれ」という，これはパラシュート勉強法という，「「超」整理法」の野口先生が名づけたものです。最近の学習科学でも認知心理学でも，要するに何のためにこれを勉強するのかがわからないと，勉強する気にもなれないし，基礎ばかりやってつまらないから諦めてしまう，それをどうするかと言いますと，応用から入るのです。

応用といっても一番簡単な応用から入ればいいのですが，その一番簡単な応用問題をまず示して，それでそれに必要な基礎はもう自分で探して来いでもいいのではないかというような発想で，教科書の1ページ目から書いてあることを延々と階段を上るようにやるのはもうやめましょうということです。そうでないとおもしろくもないし，どうして基礎をやらなくてはいけないのかがわかりません。昔のように研究者を養成している大学だったらそれでもよかったのですが，とにかく階段全部全員上れと言って，脱落した人は不可と言えばそれでよかったのですが，今はそういうわけにはいきません。とても優秀な人はどんどん伸ばして，できない人でもここまではという簡単な応用問題はできるようにさせたいというようなところをまず示すことです。そしてその応用問題を解くのに必要な基礎をやりましょうということです。下りてくるということです。下りたり，行ったり来たりするわけです。せっかく大学に入って，今までの高校とは違う勉強ができると思って楽しみにしている人たちに，高校の復習と言って同じようなことを勉強させるのはやめましょうということです。できてないのはわかっているのです。できてないことはわかっているのだけど，大学の勉強というのはこういう問題が解けるようになるものなのだということをまず示して，「できないだろう？じゃあここの基礎をやっぱりやらないといけないね」という示し方のほうがいいのではないかと思います。

そのとき大事なのは，「暗記以外を目指す」ということです。いまだに定期試験依存で，定期試験が持ち込みなしで，一夜漬けでも何でもいいから覚えてこないと答えられないような問題をやっているようでは，大学らしくないわけです。暗記以外の目標を設定し，それを目指すということで，基礎からの積み上げではなく応用からパラシュートで下りてきて，必要な基礎をその場で学ぶことです。覚えなくてもいいのです。「ああ，そういうことか」とわかることで，応用問題が解ければ良いので，それを何も見ないで答えられるようになる必要はないのです。理解できればいいのです。というように腹をくくった方が良いのではないかということです。

「どのように」教えるかと言いますと，一言で言うと「教えない」と言うことです。だからこそ自分で学び，調べるということで，ただし，シラバスにはこれらができるようにならないと単位にはなりませんということをちゃんと書かなければなりません。もちろんわからない人は幾らでも聞きに行くことです。TAやチューターがいればまずその人たちに聞いて，わからない人対策は当然立ててはおくのですが，学ぶか学ばないかはあなたの責任ですという責任移譲です。学生として扱うということなのですが，それをしないと自ら学ぶ力は育たないのではないかということです。

最後は授業以外の学習支援デザインをどうするかという話なのですが，これは先ほどから出てきている学習支援センターです。ラーニングコモンズ，建物はいいのだけど，そこの活動をどういうふうにデザインするかです。ピアチュータリングで上級生にどのように活躍の場を与えるのか考える必要があります。往年の研究からこれも明確なのは，

ピアチューターの方がチューティー，教わる人間よりもチューター，教える人間の方が学ぶということがわかっているわけです。教える機会をつくってあげるということがとても重要で，教わる側としても「先生に聞きに行くのも何だよね」という心理的抵抗がなく，上級生からであれば安心して教えてもらうことができるというウィンウィンの関係にあるということです。

「オフィスアワー」については，これまでもやっていたとは思うのですが，あるけど誰も使わないことをいいことに自分の仕事をする時間になっていなかったでしょうか。これも学生からオプションを，とにかくいろんなオプションがあるのだから，それを積極的に使えということを教えてあげる，その一つとしても使えるのではないでしょうか。欧米の大学では，ラーニングコモンズでオフィスアワーをやるという，そういう工夫もありますし，様々な工夫でオフィスアワーを使うということを奨励しています。

あとは「キャンパスライフ」です。大学に来ることの意味をどういうふうに見いだしてくれるのかということです。実技が伴うものであれば，当然そこに来ないと，シミュレーター等があるのでそれを使って実技をやるということの意味はわかりますが，それ以外の意味はどこにあるのでしょう。大抵のことは自宅でもできるということがわかってしまったわけですから，ではその人たちに大学に来るということの意味をどのように考えて，大学全体として演出するなり，実利を取っていくかということを改めて考えなくてはいけないのかと思います。

以上，これで私の講演ということにさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

【第2部】パネルディスカッション

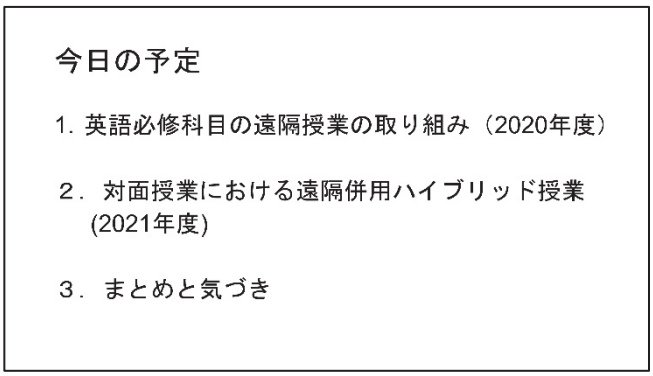
：「宮城大学における遠隔授業の取組と教育の質保証に向けた課題」

○事例1：基盤教育群　小島さつき　准教授

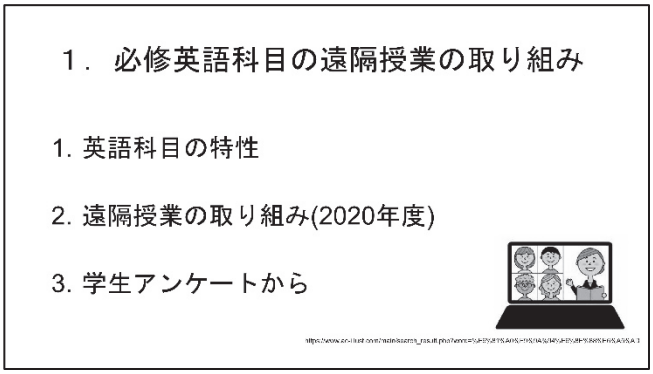
基盤教育群の小島です。本日はよろしくお願いいたします。私は英語の担当ですので，「英語必修科目における遠隔授業の取組」と題しまして，15分ほどお話ししたいと思います。よろしくお願いいたします。

昨年度から遠隔で授業をするようになりました。戸惑うことが多くありましたが，同時にコロナのおかげでこれまでの教員生活を大きく見直すきっかけになったのではないかと感じています。

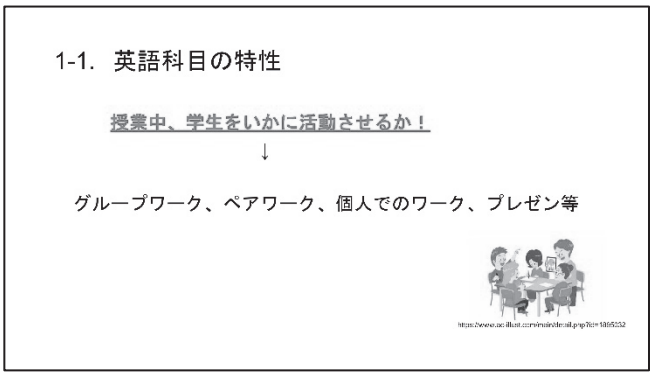
最初に昨年度行いました，英語必修科目の遠隔授業の取組についてお話しします。2番目に，対面における遠隔併用ハイブリッド授業，つまり，遠隔も一緒にハイブリッドで行った内容に関して簡単に話をし，最後にまとめと気づいたことについて話をしたいと思います。



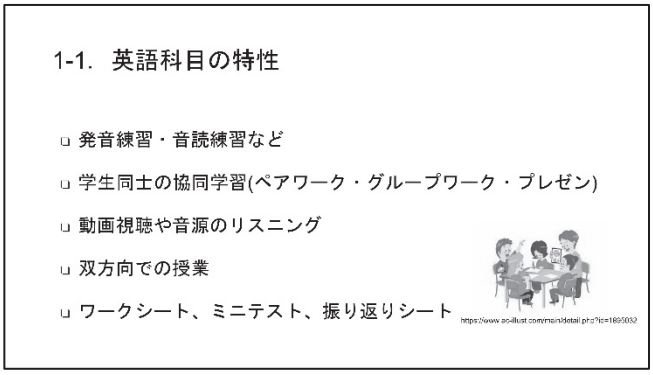
まず，必修英語科目の遠隔授業の取組みでは，簡単に3つ，英語科目の特性と遠隔授業で実際どのような取組みをしたか，苦労したことなど，それから学生のアンケートから少しお話しします。



英語の授業というのは，教員が1人で一方的に話している講義型授業というよりは，授業中に学生がいかに活動するかというのが大事なポイントになり，グループワーク，ペアワーク，個人でのワーク，プレゼンなどを，大体20分ぐらいずつを目途に行います。また，学生の集中力が切れそうなときには，また違ったアクティビティーを行うというようなことを大抵のクラスでは行っています。教員が話している時間よりも学生が活動したり，会話をしたり，お互いに意見を交換したり，練習している時間のほうが長い授業となります。また，発音を指導したり，



音読，文章を読ませたりなど，声出しをするようなアクティビティー，ゲームなどを用いて授業を行ったりですとか，共同で学習をさせたり，また動画を視聴させたり，音源を聞かせて，それについて問題を考えさせたり，解かせたり，また教員が質問をして，それに対して答えるというような形も行っています。また，ワークシートやミニテスト，最後に振り返りというようなことも行っているのが英語科目の特性です。



また，本学では英語科目に関しては複数の教員が，十数あるクラスに関して，同じ内容を同じ進度で進めるという特徴を持ち，クラスによってバラバラなことをしていませんので，教員間での連携や共有というのが大変大事になってきます。そのため，今回のコロナで教員間の連携は，これまで以上にかなり取った形となりました。

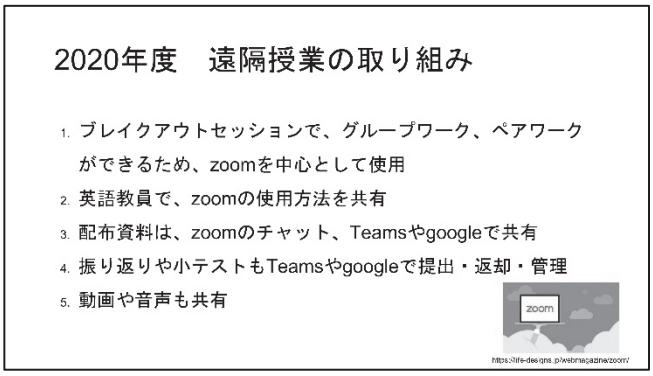
1-1 英語科目の特性 (赤字は必修科目)

1年生	2年生
前　期	
English Reading Skills Ⅰ	English for Academic Purposes Ⅰ
English Self-Expression Ⅰ	English Self-Expression Ⅲ
	Practical English (選択)
後　期	
English Reading Skills Ⅱ	English for Academic Purposes Ⅱ (選択)
English Self-Expression Ⅱ	Extensive Listening (選択)

リーディング中心のERS Ⅰ, Ⅱは日本人・コミュニケーション中心のESE Ⅰ, Ⅱ, Ⅲは主に英語ネイティブが担当

では，実際どのような授業を行ってきたのかについてここから話をしたいと思います。

ICTを活用した授業としては，Google Classroomを使って，どのようにしてテストをし，簡単に採点するかなど，数年前に英語の教員間でFDを行い，勉強しており，少しずつできる範囲で取り入れていました。また，eラーニングもやっていましたが，本格的には，なかなか進まないというのが現状でした。その中で，コロナのおかげで，これまでの教育のやり方を大きく見直し，変革せざるを得なくなり，背中を押されたような，そのような気がしています。



では，実際どんな取組みをしたのかといいますと，先ほど言ったようにグループワーク，ペアワークが多い科目となりますので，ブレイクアウトセッションができるZoomを中心として使用することに決めました。Teamsですと，ブレイクアウトみたいなものはできるのですが，ランダムにグループを作れませんので，そこでZoomを使うことにしました。

また，先ほども言いましたが科目の設定上，教員間で，Zoomは初めて使いますので，使い方も何もかもわかりませんので，教員が学生役になって，一人一人の教員が何分か

練習をして，「画面を共有します」などの練習をかなりの時間をかけて行い，どのようにすれば授業がうまくいくかというようなことをお互いに共有しながら，準備が始まりました。最初は3月頃に，いち早く食産業学群の先生からアドバイスを受けて，まずは2人でZoomやTeamsを使用してみて，そこから英語の教員を増やしていくというような形で進みました。また，Zoomのチャット機能やTeamsも使いましたので，TeamsやGoogle Classroomで資料の配付や共有をしました。最後に紙のプリントを配っていたもの，振り返りや小テストなどを，TeamsやGoogle Classroomでオンライン上で提出させ，返却し，管理するというような形で進めていました。動画や音声ももちろんですが，Zoomで共有するというような形を取ることで，やらなければならない授業内容は，同じ教室にはいませんでしたが，やるべきことは頑張ってやりこなしたのかなというような感じです。

その中での苦労ですが，一部のITの苦手な学生の対応というのは，昼夜を問わず，土日を問わずメールが来て，思い出してみるとそんなことがありました。その学生には，Zoomでいろいろ教えたり，「ここ押してみな」と伝えて対応をしたり，そのようなことが最初の方はありました。ITに関しては，少し教えればわかる学生，あと最初から教えなくてもいい学生，そしていつまで経っても全然できない学生と，学生を3種類に分類することができ，本学は幸い最後のいつまで経っても全然できないという学生がごく限られた人数しかいませんでしたので，その学生には大変苦労しましたが，基本的には徐々に学生が慣れていったというような形でした。他大学ではこの3番目の学生がとても多く，大変だったという先生方の意見も聞いたことがありました。また，通信の不具合，途中で学生がいなくなったり，音がよく聞こえなかったり，ハウリングしたりというようなことがありました。教員自体のITスキルが少なくて，課題の作成の仕方など，うまく提出したり集めたり，効率的な方法が最初見つからずに結構苦労して，今ではできるようになったのですが，学生にどう見えているのかもわからず，そういった形で苦労しました。また，画面上ですので，学生が部屋で何をやっているのかはっきりはわからないので，そういった点も苦労することもありました。

遠隔授業での苦労

1. 一部のITの苦手な学生の対応　(昼夜・土日問わないメール)
2. 通信不具合（途中でいなくなる、音がよく聞こえない）
3. 教員のITスキル（課題の作成法など）
4. 画面上で学生達が、実際何をしているのかわからない。

その中で，どんな工夫をしていたかと言いますと，Zoomでのグループワークのときには適宜それぞれのグループに参加して，学生の名前が出てきますので，顔と名前を見ながら「○○さん，こうですね」というような，声がけみたいなものを頻繁にやっていました。質問はチャット機能で受け付けました。日本人は割と「これどう思いますか」と言っても発言しないことが大体多いのですけれど，このチャット機能に助けられた教員は多かったのではないかなと思います。「どう思いますか？」と聞いた後，シーンという感じではなく，そういった雰囲気を変えることができたのは，このチャットのおかげだったと思っています。また，カメラをオンにして音声をオフという形にしていましたので，学生はもう私の目の前のフロント，目の前に全員に座っているような，そういった形の授業にしていました。

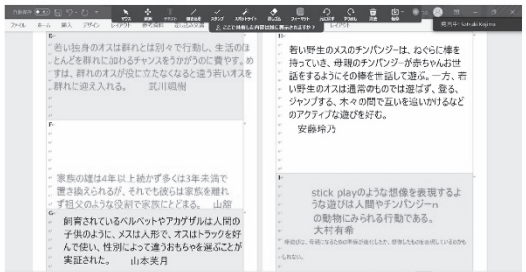
遠隔授業での工夫

1. グループワークに、適宜教員が参加し、進捗を確かめ、コミュニケーションをとる。
2. チャットで、質問を受け付けた。
3. カメラをオン、音声をオフにしてもらう。
4. ホワイトボード機能

先ほど鈴木先生もおっしゃっていました，ホワイトボード機能を使用していました。このような形でZoomには全学生がお互いに共有できるホワイトボード，もちろんWordもパワポも共有できるのですが，そこにお互いに星マーク，何でもいいですけど書き込みをすることができまして，教室にいませんので，代わりにこのホワイトボード機能を使って，これは私のクラスの一部のスクリーンショットですが，学生に答えと名前を書かせて，「ここはこうですね」と説明したり，赤で書き込んだりとか，こういったようなことをして，授業を進めていました。遠隔授業への学生のアンケートから，2クラスしか取れていませんが，前期の授業，後期の授業，遠隔の授業はどうでしたかという質問をしたところ，8割，9割くらいの学生が，ブルーが「良かった」，オレンジが「どちらかといえば良かった」，灰色が「どちらかいえば悪かった」，「悪かった」はあまりいなかったようですが，大体良かったというような感想でした。

ホワイトボード機能

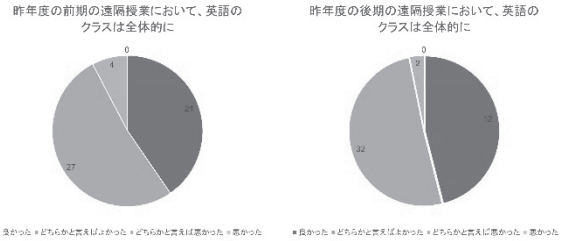
保存されたホワイトボード（ワード）



すべては紹介しませんが，学生は，「ほかの人と対話する時間があったので嬉しかった」，「英語の発音のいい学生と一緒になると真似することができるのでよかった」，「対面と変わらず，先生が細かく読解の説明をしてくれた」，「ホワイトボードを使って，回答を共有しているところに書き込めた」，「保存も容易だった」というようなコメントをもらいました。一方で，「あまり話さない人とペアになるとやりづらかった」，「予習復習が大変だった」，といった意見もありました。

今年度，2021年はどんなことをやっているかと言いますと，Zoomを授業の中で立ち上げさせて，同時に配信しました。学生はタブレットやPCを立ち上げた状態で授業を行いました。このメリットとしては，今年は特にPCRの待機者や軽い風邪の症状ですとかそういった学生が結構頻繁に出ましたけれど，その学生には家からZoomで入ってきてもらい，私が授業で話していること，学生が話していることが聞こえるような状態で，グループワークには参加できませんけれども，そんな感じで授業に入れることがメリットだったり，後ろのほうに座っている学生の回答は常に聞こえないのですけれども，イヤホンなどを使うとその声がよく聞こえたり，先ほど言ったチャットで出席管理など，すぐに質問できない学生がチャットに入れてくれたり，先ほどのホワイトボードは，ペンを共有して

学生アンケートから



学生アンケートから

・他の人と会話する時間があったのが嬉しかった。

・いつも固定の人と話すことがないので、英語の発音のいい人と同じグループになると、まねすることができるので、それがよかったです。

・対面と変わらず、先生が細かく読解の説明をしてくれたところ。

・回答を共有しているところに書き込めたため、保存も容易で、授業に参加しているという実感を持てた。

2. 2021年度：遠隔併用ハイブリッド授業

1．教員・学生は全員PC（タブレット）を毎週持参

2．Zoomを併用し、授業を行っている。

https://www.illust.jp/search/illust/w_iPad/

https://itsukaitte.com/pc-laptop/

対面授業とZoomの併用型のメリット

①PCR待機者，軽い風邪症状などでも教室外から授業に参加

②騒音 or 声が小さい等の問題が解決（学生はイヤフォン使用）

③チャットでのやり取りや出席の管理

④資料、ホワイトボード、動画の画面を共有、パソコンに保存可能

⑤ペーパーレス（課題提出や資料配布はTeamを使用）

学生からの声

・体調が悪く、登校できない学生も参加できる。

・板書よりもパソコンの画面の方が見えやすく、保存や書き込みなども楽だったから。

・パソコン内に授業内容のデータを保存できたため（すぐに確認できる）。

・書く人が前に出て書くと密になるため、時間差をあけ行うことになる。そうなると時間がかかり時間の無駄になる。そのため、zoomでの板書はとても良かった。

消毒したり、学生同士が密になったりということを避けるためにも，このホワイトボード機能を使ったのもよかったのかなと思っています。

また，なかなか進まないペーパーレスですが，配付資料は全てオンラインで，ZoomやTeamsを使ってできるのもメリットであると思っています。

学生のアンケートからは，「体調が悪く登校できないときも参加できる」，「板書が見やすい」，「データ保存できる」，「Zoomでの板書はとてもよかった」というようなコメントもいただきました。

対面授業とZoomの併用型のデメリットは，「寝坊などの理由で急にZoomで入ってくることがあるということ」，「パソコンのバッテリーの減りがはやい」ということです。

対面授業とZoomの併用型のデメリット

・出欠に関する教室ルールを厳格にする必要がある

↓

寝坊などの自己都合に利用されてしまう可能性がある

・パソコンのバッテリーの問題

まとめとしては，遠隔授業でICTの活用がより促進されたということです。教員はどうしてもこれまでの長年のやり方を変えづらいし，変えたくないし，変えられないという，そういった強い信念があったのですが，もうこれはやらざるを得なく，少し促進したかなと思います。また，併用することは当面は重要，必要なのかなと感じました。

まとめ

1．遠隔授業により、ICTの活用がより促進された

2．当面は、遠隔併用授業は有効

あとは気づきですが，先ほど鈴木先生もおっしゃっていましたが，元の授業に完全に戻るのではなく，遠隔授業，ICTのいい部分を活用していくことが大事かなという点です。

気づき　1

元の授業に完全に戻るのではなく、遠隔授業で得た、ICT利用のいい部分をうまく活用することが、今後、重要となってくるのではないか。

やはりマスクをしていると学生の顔が全く覚えられなく，笑っているのか何なのかもわからない状態でおりました。距離は取るが，心の心理的距離が大切ということです。学生との気持ちが離れないようにしなくてはいけないなと思っていて，どうするべきかについては，現在検討しています。

最後に学生の写真を撮りました。いつかマスクなしで，「みんな笑って一」と言うと，これは笑っているかどうかよく見えませんが，マスクを外すとこのように嬉しそうな顔をしていましたので，いつか早くマスクを取ってというふうに最近は考えています。

早口になりましたが，以上です。ありがとうございます。

気づき　2

マスクをして、社会的な距離を取っての対面授業ではあるが、そのような中でも、学生との心理的距離を取ることのないようにしたい。

○事例2：看護学群　出貝裕子　准教授

看護学群の出貝です。本日はよろしくお願いいたします。看護学群で，去年実施した取組をご紹介させていただきます。

ご紹介するのは，私が担当している老年看護学領域の講義のことです。これは主にグループワークについてのお話になります。もう1つ，看護で特徴的かなと思う，技術教育のところは基礎看護領域の先生から情報をもらいながらご紹介できればと思います。最後に実習での状況もお話しできればと思っています。

本日紹介する内容

1. 老年看護学領域の講義での取り組み
2. 基礎看護学領域の技術教育の取り組み
3. 実習での取り組み

最初に老年看護領域でやっている講義についてご紹介します。今回お話しするのは，老年看護援助論の1と2になりますが，それぞれ2年生と3年生の必修科目になります。ここにはシラバスの科目概要を載せているのですけれども，要は2年生では高齢者の加齢に伴って生じてくる様々な変化によって生活にどんな影響があってとか，どんな支援が必要になってくるのかということを学んでいく科目になっていて，3年生ではさらにその上で入院したり，いろいろな施設に入居したりという方々への支援について学んでいくという，ざっくり言うとそういう形になっています。

科目の紹介

○老年看護援助論1（2年生）

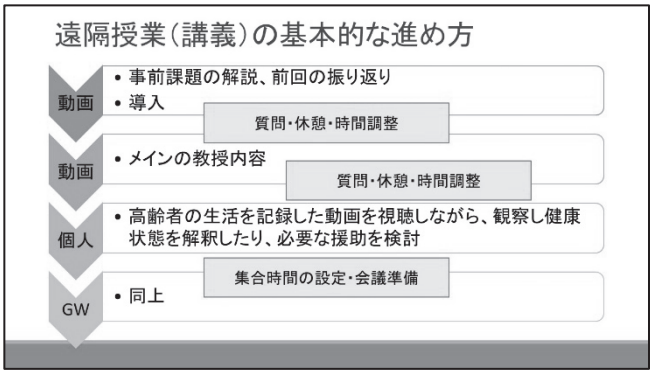
加齢に伴う変化や健康障害により様々な生活機能の低下や障害を来たしながらも地域で暮らす老年期の人々の理解を基に，要介護高齢者が有する力を引き出しながら日常生活を支援する看護援助について家族支援も含めて学修する.

○老年看護援助論2（3年生）

様々な健康課題を持ちながら様々な場で療養生活をしている老年期にある人々とその家族への基本的看護と，高齢者看護上生じやすい倫理的問題やジレンマとその解決策を学修し，看護職が果たす役割を検討する。また，加齢による生活機能の低下に加え疾病による障害を来す老年期の人々の包括的アセスメント方法と看護実践方法を知識基盤に，紙上事例のアセスメントと看護計画立案を試みる。

どちらも同じ教科書を用いて，どちらの科目もグループワークを多く取り入れながらというような授業形態になります。

これは，昨年度遠隔で行ったときの講義の進め方の概要になります。この前後に事前学習や事後学習はあるのですけれども，こういった基本的な構造でしていきました。



基本的には，動画2本を配信しておいて，これは学生に「好きなタイミングで視聴してください」とアナウンスしています。この動画は15分程度にまとめていますけれども，1本目は事前課題の解説や，前回の授業でのレスポンスカードを見て，補強が必要なところの説明に当たるものが1本目になります。2本目がその単元のメインとなる知識等に関する解説の動画になります。それぞれの間に質問の時間等を挟んで，「チャットで質問を受けますよ」ということをアナウンスしておりました。

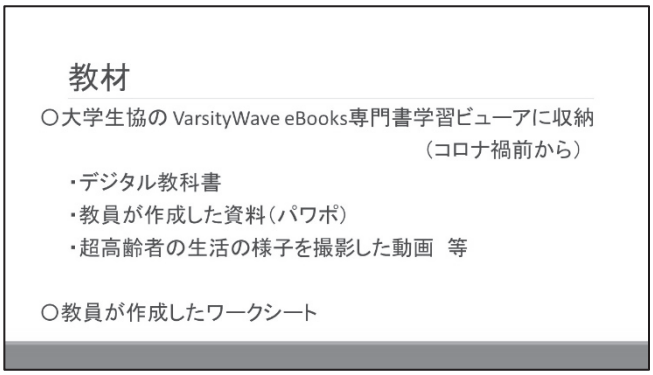
個人ワークのところでは，それらの動画を見て学んだ知識を活用して，高齢者の生活の様子を映した動画を見ながら高齢者の様子を観察し，得た情報を解釈，そして必要な援助を検討するというようなことをまず個人で行い，その上でグループワークという流れで行っています。学生にはグループワークの開始時間を知らせておいて，「この時間には必ず参加して作業してくださいね」ということをアナウンスしています。

授業の流れをある程度一定にすることで，学生も自分なりの計画が立てやすくなるので，最初からこういう流れで行きますということを決めて，進めていました。

これで行くと，グループワークの開始時間までは学生が個々のタイミングで学習することが可能ではあるのですけれども，多くの場合は授業時間になって動画を見始めるというようなスケジュールで動いていたようでした。ただ，学生によっては，個人ワークを自分でするのに時間がかかるので，授業前に動画を1本見ておこうかなとかと，工夫している方もいたようでした。

あと，時間配分ですけれども，学生が動画を見直したりとかということもできるように，余裕を持った時間設定にしていたのですが，学生の感想からするとグループワークの時間が足りないという声が多くありました。

次に教材についてご紹介します。老年看護では，コロナ禍前から学群制になってPC必携になったのを機にデジタル教科書を導入しております。大学生協のVarsity Wave eBooksのビューアを使って，このビューアの中にデジタル教科書と，教員が作成したパワポの資料，101歳の方の生活の様子を映した動画を入れておきます。それを学生が自由に見

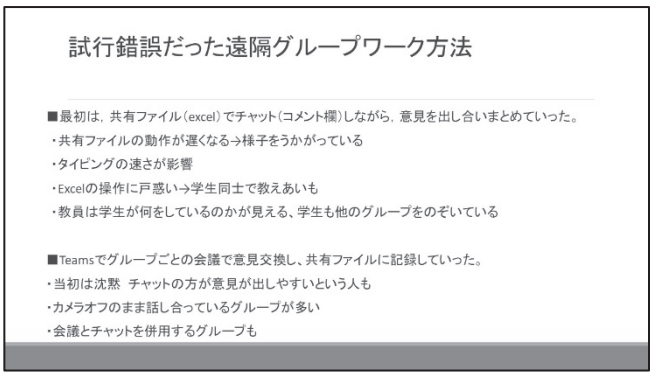


て学習をしていくということになります。そのほかに，個人ワークやグループワークで使うようなワークシートを一緒に使っています。

20歳前後の学生さんなので，なかなか高齢者の生活というのがイメージしにくくて，教科書に書かれてあるようなことを読んでもピンと来ないことも多いので，老年看護では比較的動画や画像を多用して進めています。

長く使っているこの動画ですけれども，役者さんが演じている動画ではなく，本当の101歳の方の日常生活を映しているので，わかりやすい演出とかがあるわけではなく，淡々とした生活が流れていくので，高齢者の表情の変化とかというのもよく観察しないと見えてこないという面があり，そういう意味では学生さんの観察力を鍛えるにはちょうどいいと感じていました。

デジタル教科書の特性として，学生がいつ何を閲覧しているか，どういう書き込みがあるとか，どういうところにマーカーを引いているというような学習活動記録が確認できることがメリットとしてありました。



昨年度，完全遠隔で授業を実施するということに決まって，グループワークをどうするかということを老年看護の教員で話し合ったのですが，基本的に老年看護ではそれまでに学んだ知識を使って高齢者の方を見て解釈するということがメインになるので，どうしてもグループワークは外せないということになりました。

1年前の段階では，Teamsを私たち教員側がうまく使いこなせるのかという不安や，通信状況がどうなのかということで，大丈夫かなと感じ，最初はTeamsを使わないで共有ファイルにコメントとかをしながら意見を出し合うという形でグループワークを組んでいました。共有ファイル，具体的にはExcelのシートですが，学生が観察したことなどを書き込む部分と，チャットで自分たちの意見を出している画面が映っているかと思いますけれども，こんな感じで学生は「次こっちかな」とか「そうだね」とか「みんなと似た感じになりますが」みたいなことを言いながら意見を出し合っていた現状があります。

そうこうしているうちに，Teamsでもグループワークができそうだという感覚になり，Teamsのグループごとのチャネルを使ってグループワークをすることにしました。

共有ファイルのやり方でも，学生が何を考えているのかが非常に目に見えてわかるし，教員としてはすごく便利な面もありましたけれども，100人が同じファイルにアクセスするせいか，動作がすごく遅くなってしまい，タイムラグが生じて困っているというような学生の意見もありしました。

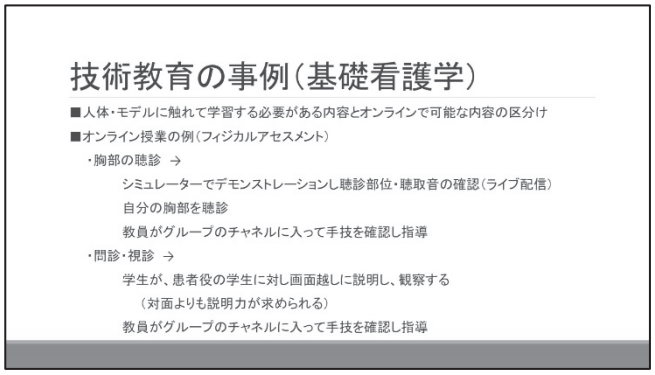
2年生ですと，Excelの操作自体に少々戸惑いがあったりして，得意な学生に教えてもらったりとかしながら，進めていたようですけれども，レスポンスカードにはいろいろ困ったことが書かれてきておりました。

最初はやはりTeamsで会議を立ち上げて，グループで意見交換するという方法に慣れるまでの間は，いろいろ会議が同じグループの中で2個も3個も出てきて，多少混乱はありましたが，学生さんはすぐ慣れて，グループワークにすぐ入れるようになっていきました。

意見交換の仕方も，グループによってそれぞれ工夫しながらやっていて，チャットを使いながらやっているところもあり，あとカメラをオフにするとかオフにしないとかというのもグループでこだわりというか，「うちのグループはオフのままやります」とかというようなグループも結構ありました。

Teamsでのグループワークは今年も活用していて，グループワークの方法の1つとして馴染んできたかなというような印象があります。

技術教育の事例についてご紹介します。これは基礎看護学領域の先生に情報をいただきました。基礎看護学領域では，昨年遠隔になったのですけれども，例えば体を拭いたり血圧を測ったりというような技術だとか，身体の査定をするようなフィジカルアセスメントがありますが，この中でもどうしても人体やモデル，シミュレーターに触れて学習するものと，オンラインで学習可能なものをまず区分けをして，組み立て直したということをおっしゃっていました。



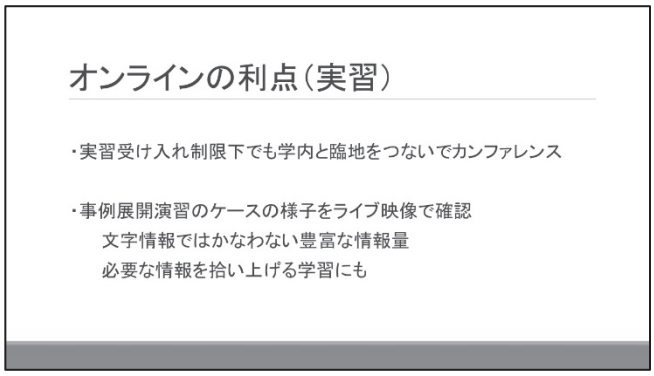
オンラインで，遠隔で行ったものの例がこちらになりますけれども，まず自分の体，学生自身の体を使ってできるものとして，胸部の聴診をやっています。聴診器を使って呼吸音や心音を観察して，異常があるのかないのかというような判断をするトレーニングですが，対面であれば学生同士，お互いの呼吸音を聞いたりして練習することになります。遠隔ですとまず教員がシミュレーターを使ってデモンストレーションをして，必要な知識を確認し，その上で今度は学生が自分の胸部を聴診して，それを教員がグループのチャネルに入って手技を確認して指導するというようなやり方になります。

もう1つは，「問診・視診」とありますけれども，Teamsのグループチャネルを使って学生同士が画面越しに患者役になり，お互いに実施するという流れになります。例えば腕とかに麻痺があるのかを確認するのに，両腕を体の前に挙げてもらう方法があるのですが，その動作を相手にやってもらって観察し，そのやり方を教員が見て指導するのですが，相手に画面越しで説明するとなると，対面のとき以上にしっかり説明しないと

通じないということも出てきたようで，より説明力が求められるような印象を持たれました。この話を聞いたときに，遠隔医療がこの先どんどん進んでくる中で，遠隔ならではの求められる技術もあるのだろうなと，学群教育のときからそれを想定した学習をこの先積み重ねていくことも大事かなと感じています。

次は，実習についてご紹介させていただきます。

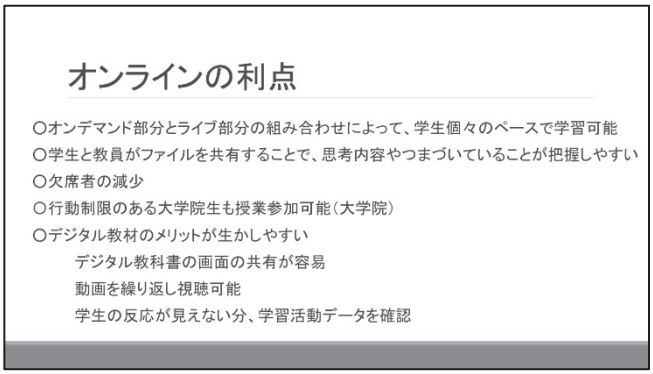
実習に関しては，病院や施設で学外者を受け入れ禁止という制限が出て，実習に行けなくなったこともありました。それでも，ありがたいことに何らかの形で実習ができる形で協力をしてもらい，例えばビデオ会議で，学内の学生と臨地実習指導者の方でカンファレンスをする，あるいは学内実習で事例検討するための患者さんや対象者さんを紹介してもらうという形で，ご協力してもらうこともありました。学内で患者さん，事例展開していく練習のケースの様子をライブで映してもらうこともあり，そうすると文字だけではわからない情報もたくさんありますので，非常にリアルな感じで学生も考えることができています。学内で患者さんを想定して実習をしていても，やはりリアルな患者さんは日々変化したりしますので，机上で学生たちが考えた支援方法が現場で見たときにどうなのかとか，支援したときにどうなのかというあたりを，カンファレンスを通して現場の方と共有してもらえることはすごく学生にとって学びが深かったと思っています。



画面を通じて得られる情報は豊富にあり，短時間であってもすごく情報量はたくさん得ることができています。そのたくさんある情報を得るということもそうですし，いろんな情報の中から必要な情報を拾い上げるということの訓練にもなるのだなというのがここから少し見えたかなというところは今回気づきになったかと思います。

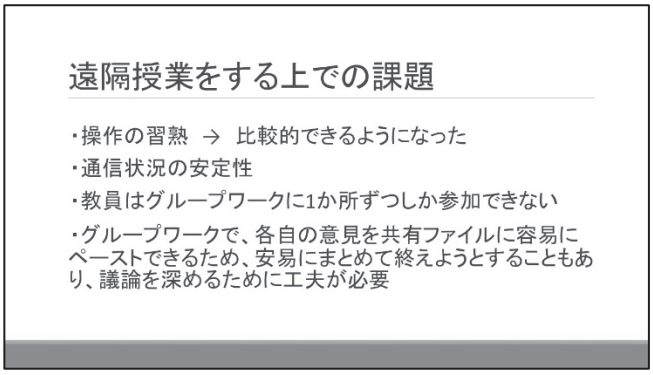
最後にまとめですけれども，昨年度遠隔授業をしてみて個人的に感じたメリットを少し整理してみました。

「学生個々のペースで学習できる」，「学生と教員がファイルを共有することで思考内容がわかりやすい」が挙げられました。大学院の場合は，現場で働いている方たちが大学院生として学んでいることが多いので，病院から行動制限がかかって大学に行けないというときでも授業に参加しやすい環境がつくれたと思います。



他に「デジタル教材のメリットが生かしやすい」，「デジタル教材だったからやりやすかった」，「授業をする上でも教科書の共有が簡単」，「動画を繰り返し見ることができる」といった点がメリットとして挙げられます。

学生の反応がライブでそのときに見えない分，学生が何をしていたのかということのデータに関心が向く等，そういうことも見てみようと思えたという点は利点としてあったと思います。



個人的に感じている課題としては，グループワークをしていて，グループチャネルに1か所ずつしか参加できないので，そのほかのグループが何をしているかということが対面より把握しづらい部分があり，見ていない間に実はもう容易に，簡単に終えていたり，進んでなかったり，深まっていなかったりというようなことがあったので，グループワークでも便利な面もあるのですが，議論を深めるためにもう少し工夫が必要と感じました。

○事例3：事業構想学群　土岐謙次　教授

事業構想学群価値創造デザイン学類から土岐が，遠隔授業の取組ということでご紹介します。事業構想学群は本当に様々な専門がありまして，その中でも我々デザインをつくるのですけれども，さらにその中でも特殊で，もりもりの実習の演習課題なものですから，私どもの取組が事業構想学群の取組として好例であるかどうか，ここは定かではありませんが，お含みおきいただきたいなと思います。

デザイン系ですので，演習，実習という科目を勉強していますが，この科目は3年生前期に選択で取る授業で，中田先生，私，それから非常勤の先生1名に来ていただいて，取り組んでいるものです。

この科目は，椅子を作らせています。木工で，木を使って椅子を作らせるわけですが，単なる日曜大工やDIYではなく，基本的にコンピューターを使ってパラメトリックにデザインするということで，3DCADを使って行います。一部形態の生成にプログラミングの技術を導入して，ダイナミックなデザインの方法を学ぶということで，さ

らにそこに連携して機械を使った木材加工を体験する，いわゆるデジタルファブリケーションを体験して，最終的には自分の手で椅子として組み上げていきます。

最初は素材体験ということで，材料が生まれる場所に赴いて，制作に使われる材木がどんな形で山に生まれて，それがどういう形で製材されて我々の手元に届くのか，素材の出自のようなところを見に行こうということで，登米の森林組合にご協力をいただいて，現場を見に行くということから始めまして，デザイン，それから小さな模型を使った試作，それから加工，また後で紹介しますけれども一部の材料を漆塗りにするというかなりエクストリームなことも織り交ぜつつ，最後は自分の作品を，映像作品を通して紹介をするということで，半年間半期でやっている授業です。

これを「遠隔でやるべし」ということで，昨年はやらざるを得なくなったわけですけれども，今から2分ほどの紹介映像がありますので，皆さんそれをぜひご覧になりつつ，これを遠隔でやるにはどうしたらいいだろかということを少し考えながら見ていただければと思います。2分ほどです。ご覧ください。

（映像再生）

ということで，今の映像は2019年度ですね，一昨年に実施した際の様子を映像にまとめたものでしたが，これを学生に見せて，こんなことをやるのだよということでガイダンスに使うのですが，昨年度これをリモートで実施せよということで，どうしたものかと，困ったわけですね。見学に始まり，3DCADのトレーニングをして，小さな模型を作り，データをきちんと整えて，加工する工場にデータを送って材料を加工してもらって，それに対して漆塗りを施し，最後は組み立てると。これに加えて映像制作があるわけですけれども，「何かもう無理」みたいな感じでした。

「無理ね」というわけにはいかないので，この課題を展開している背景みたいなことのお話をする必要があって，今現在材料を加工してくれるサービスが広がりを見せています。簡単な印刷物を作るというようなものを皆さんもオンデマンドのサービスとしてはおなじみかなと思うのですけれども，データはこちらで作って，サイトにデ

ータとして送ると，自分のデザインした形に加工した材料を送り戻してくれる，それをまさにDIYで，自分で組み立てると様々なものが作れるというようなサービスがかなり充実をしています。3Dプリントのようなものも非常に精密な試作品を作れたりしますので，もはや美術の現場でデザイナーの皆さんが実際に3Dプリントの試作をこういうオンデマンドサービスを通じてデザインプロセスの中に組み込むというようなことは本当に日常的に行われています。学生にもこれはオンデマンドサービスを体験する一つの練習というか，そういう機会にしてもらおうということで考え直してみたということで，まずは見学も現場に行けないということがありましたので，これはスキップして，漆塗りも，別にやらなくても椅子にはなるわけですから，ここはスキップするということで，CAD，それから模型制作，加工，組み立てと，このあたりをオンデマンドサービス体験するということで実施しました。

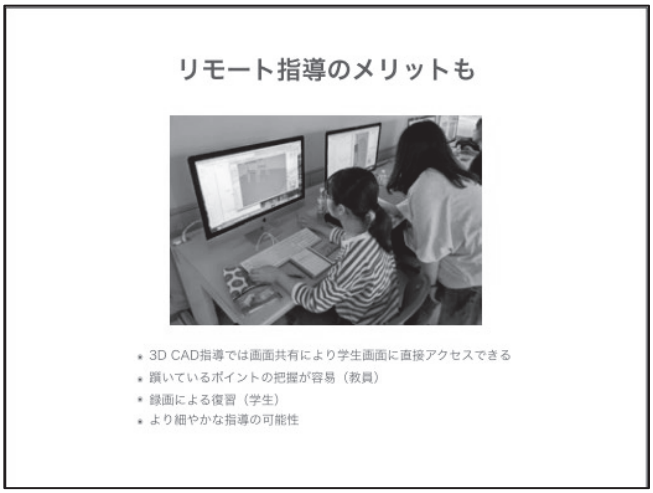
リモートの実施体制についてです。大体こういう形で，教員と学生はTeamsでつなぎ，CADのレクチャーですとか，もろもろのコミュニケーションは基本的にはTeamsで行いました。一部SpatialChatなども使いながら，個別のコミュニケーションを確保しました。

材料を確保してくれる工場とは，データを送るとそれに合わせて木材を加工したものを納品してくれる，送り返してくれるというようなことを，そういうプロセスが学生の手元に材料を届けるということで，実施しました。

この画像で，一番左の写真ですかね，これは大学側の様子ですけれども，学生の自宅に作業場を確保してもらって，ある人は和室みたいなところだったり，ある人はガレージみたいなところだったりしましたけれども，学生のその作業をする手元が映るようにカメラの設定をしてもらって，「ここはこんなふうに削る」，「ここはこんな具合に差し込むよ」等，リモートの組み立て指導みたいなことをやらざるを得なかったです。非常にもどかしくて，目の前にいればほんの一瞬で解決するようなコミュニケーションが，

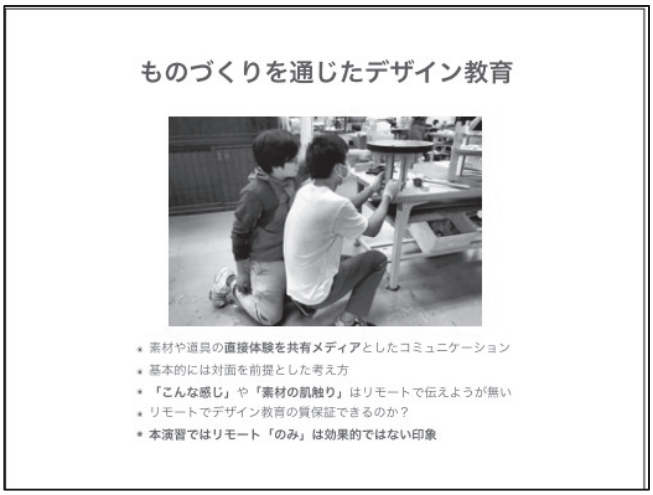
もうなかなか伝わりません。例えばサンドペーパーで木を整えるみたいなことをするわけですけれども，目の前にいれば実際にこちらがこうやって見せて，それを触ってもらって，「こんな感じね」と通じるわけですけれども，それが伝わらないわけですよね。どんな感じと表現すると伝わるかなということで，「手首の内側のちょっとツルツルした部分の感じかなあ」等，何か本当に伝わっているのか伝わってないのかということで，非常に苦慮しました。

リモート指導のメリットもなくはなくて，特にデジタルの作業ですね，3DCADの指導ですと，お互い直接画面共有はできますので，学生がどこにつまずいているのか，学生が直接教員のほうに尋ねてくるということを，画面を通してできますので，そのあたりはよかったということです。



Teamsで共有していましたから，録画をしておいて，特にソフトウェアの扱いというのは反復練習が非常に重要ですから，学生がのちのち復習の役にも立てられたというようなことで，細かい話もできた可能性はあるということで，リモートも悪くなかったです。

一方で，やはりものづくりを通じたデザイン教育ということですから，この画像が非常に象徴的というか一番クルーシャルな画像だなと思って紹介するわけですけれども，まさに「道具や材料」，「フィジカルなもの」，「感覚」，「どんな力でつかむか」，「どんな作法か」，「道具を使う作法」，「その力の入れ具合」，まさに直接の体験を共有しながらコミュニケーションを取って，技術を体験してもらいます。その先に自分自身がものをつくるということの，デザインの本質的なダイナミズムみたいなものがあるということで，「こんな感じ」のようなこと，肌触りのようなものは本当に伝えようがなくて，それでもなお去年はやったわけですが，とてもじゃないですがこの種のデザイン教育では質保証もないということで，問うまでもないという状況でした。リモートのみでは効果的ではないという印象を持たざるを得ませんでした。



今年度は対面に戻りましたので，一昨年と同様現場にも行き，フルスペックで実施しました。これは今年の様子ですけれども，みんなマスクをしていて表情は見えませんが，やはり自分が作ったものに座るという体験そのものはとても楽しい，うれしいものですし，仲間が作った椅子に代わる代わる座ってみて，人が作ったものを体験して，ほかの人が作ったもののデザインの本質的な理由や意味，そういう体験を通して知るということが非常に大切なので，なかなかこれをリモートでどう置き換えていくのかというのがこれからの課題というふうに考えています。

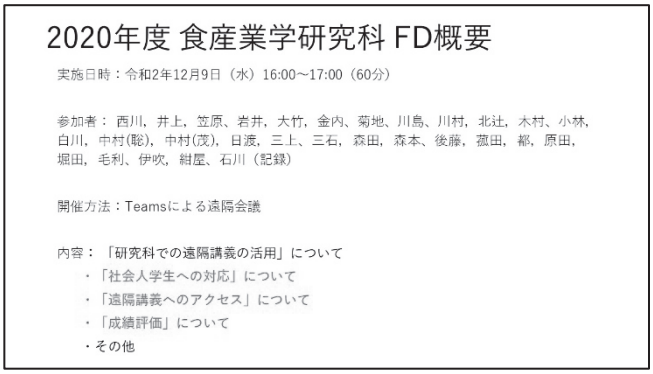
もともとデジタル，フィジカルということのハイブリッドでやっているものですから，特にリモートの方法そのものは全然否定しませんが，より有機的なというのですかね，いい方法を探る余地はまだまだあるのかなというふうに思っています。

やや不成功事例的な紹介になって，それを事業構想学群の代表として紹介するということで，私からは以上です。

○事例4：食産業学群　石川伸一　教授

食産業学群の石川です。本日はよろしくお願いいたします。昨年度，食産業学群研究科のFDで大学院での遠隔授業をどのように活用するかという話で議論していた経緯がありますので，そのときの課題を共有する形でお話しできたらと思います。よろしくお願いします。

昨年度，食産業学群研究科のFD，12月9日に60分ほどこのメンバーで行いました。ここから時間が半年以上経っていますので，あくまでこの時点での課題感という感じで受け取ってもらえればなと思います。



そのとき，Teamsで遠隔で行ったのですが，各先生から課題についてそれぞれFormsでコメントをもらって，最後にディスカッションという形で行っています。

テーマとしては，研究科での遠隔講義の活用について，具体的には社会人大学院生の対応をどうするかということと，あと遠隔講義へのアクセス，WEB環境についてどう

かというところと，今回の教育の質に関わると思いますが，成績評価についてどうか。あと最後にその他というコメントをそれぞれいただいています。

1.「社会人学生への対応」について

コメント（一覧）

- 通学時間に制約されないために、社会人学生にとっては都合がよいと思われる。今後も活用することが望まれる。
- 講義は遠隔でも可能かと思う。しかし、技術系の受講生が多いので基本対面になろうかと思います。
- 遠隔授業は非常に有効でよかったです。録画もできたので、時間が合わない人は後で見ることができました。
- 今年度自分は担当しないが、自宅その他で受講できるのは良い。
- 一般の学生と同じ扱いで良いと思う。仕事の関係で、希望があれば遠隔でできるものについては対応する。
- 遠方に居住する社会人、平日休みを取りにくい社会人に有効
- 積極的に取り入れたらよいが、対面と共存は経験がない
- 今年度の経験から，提供する側としては遠隔でも滞りなく行えたと思います。受講者としては，もっとディスカッションの時間が欲しかったかもしれません。

社会人学生への対応について，「遠隔授業賛成」，「どんどん活用すべき」というコメントが非常に多かったです。具体的に紹介していくと，例えば，「通学時間に制約されないために，社会人学生にとっては都合がよいでしょう」，結構遠方から通われている社会人の方がいらっしゃったので，「特に録画もできたので，時間が合わない人は後で見ることができる」，「平日に休みを取りにくい社会人には当然有効だろう」等コメントがありました。昨年度の経験から，提供する側としては遠隔でも問題なく行えました。受講者にとっては，もっとディスカッションの時間が欲しかったかもしれないという懸念がありますが，このあたりはやり方で工夫が必要と思います。

1.「社会人学生への対応」について

コメント（一覧つづき）

- 社会人学生については、講義等が平日の開催が多いことから仕事との両立（移動時間等の確保）が難しいかと思います。そう言った面でも、遠隔授業の活用が有効ではないかと考えるところです。実験・実習科目は別にしても、座学の科目については、積極的に取り入れて行くことを提案したいと思います。
- 「遠隔授業」について詳しく説明してあげることにより問題はないはかと思います。
- 以下は、遠隔授業を行った感想です。
  ①遠隔授業により、社会人は勤務先の職場からの参加が可能になった。
  ②基本書をじっくりと読む時間を確保できたという声を何度も聞きました（通学・移動時間のセーブ）
  ③実験が後期にシフトしたため、時間のある実験系の学生が複数履修し、予想以上に面白いという反応を得た。
- どこまでの知見があるか見通すことが難しいのではないかと思われる。

似たようなコメントが多いのですが，社会人学生について講義等は平日行うことが多いので，仕事もやりながら学びに来ているという方にとっては両立がなかなか難しかったです。そういう点でも，遠隔授業を活用するのは非常に大事だということです。ただ，座学ではなくて，実習とか演習科目に関してはやはり難しいです。座学では「積極的に取り入れることを提案したいと思います」というコメントとか，実際に遠隔授業を行った感想として，「遠隔授業によって社会人の方が勤務先の職場から参加できることになった」ということ，あとは「基本書をじっくり読む時間を確保できた」という声も何度か聞きました。これは通学や移動時間がセーブできたことによってのメリットと思います。

「実験が昨年度後期にシフトしたため，時間のある実験系の学生が複数履修できたことによって，予想以上におもしろいという反応もありました」という声もありました。

「どこまで知見があるか見通すことが難しいのではないかと思われる」というのは，恐らく授業の反応が，表情が見えないので理解度とかいうのがわかりにくいということを書いているという気がします。

あと，「時間や場所を設定できるので，社会人にとって授業を受けやすくなると思います」，「昨年度は社会人大学院生がいなかったのですが，これまで担当したコロナ前の授業においても社会人の大学院生がいた場合だと結構授業の日程が合わないので，そ

の大学院生に合わせて個別に授業をしているという先生方が非常に多いかなと思います。それが遠隔授業をできることによって，社会人院生の講義出席の負担が軽減されると思います」というコメントもありました。

1.「社会人学生への対応」について

コメント（一覧つづき）

- 今年度の大学院の担当科目の中では、社会人学生の履修はなかった。来年度、社会人学生を受け入れる可能性があるが、基本的に対面での授業及び指導を予定している。また、その学生以外の者が同じ科目を履修することも考えられるが、個別の事情に応じて複数の授業方法を取ることまでは考えていない。
- 柔軟に時間、場所を設定できるので、社会人にとって授業を受けやすくなると思います。
- 今年度は社会人大学院生がいなかったのですが、これまで担当した科目で社会人大学院生がいた場合だと講義の日程が合わず個別に講義日を設けて対応していました。遠隔になることによって、社会人院生の講義出席への負担が軽減されると思います。
- ポストコロナの時代においては必須となると思います。
- 10月に来たばかりで本学での遠隔授業の経験がありません。そのため求められている回答ができません。ただ、時間に制約がある社会人学生にとって、かなり有効な方法になるとイメージしています。融通性のある時間設定、頻度の高いコミュニケーションが可能になるのではないでしょうか。ただ、ウエットな実験が必要になる学生に場合は、遠隔講義がどこまで意味があるものになるのかはわかりません。

やはりキャンパスに来るというところの負担が社会人学生は多いので，「遠隔授業は上手に積極的に取り入れるべきだと思います。ただし，実験系はやはり無理でしょう」，「実際基本的に遠隔はいいと思いますが，課題としてはやはり実験が伴うものはどうするのか」，「受講者のネット環境がちゃんと整っているか」，「普通に大学に来れ，学群から上がってきた一般学生と一緒の場合，時間をどう調整するのか」というところは工夫が必要と思います。

1.「社会人学生への対応」について

コメント（一覧つづき）

- 社会人学生に対しては、人数が少ないこともあって、コロナ禍の今年度以前でも実施曜日の変更、準集中講義形式、メール等による遠隔で実施したこともあった。キャンパスに足を運ぶことが負担と考える社会人学生は多いので、遠隔授業は上手に積極的に取り入れるべきだと思う。ただし、実験系の内容は無理ではあるが。
- 教員の負担にならない範囲で，教育効果を勘案して，できるだけ柔軟な対応がとれるようにするのが望ましい。
- 基本的には良いと思います。ただし、課題として以下があるかと思います。
  ①実験が伴うものの手法
  ②ネット環境が整っているか？
  ③一般学生と一緒の場合の調整方法
- 遠隔を使っても，講義は大丈夫かと思います。実験を大学で来て行う必要がある場合が対応が困難。
- 遠隔を利用すれば社会人の大学院への敷居は低くなると思います。
- 県外から講義に参加している大学院生にとっては、遠隔授業は特に有効である。

「遠隔を利用すれば社会人の大学院への敷居は低くなると思います」というところは，入学する前の段階から遠隔授業を謳っている大学院も当然あるので，遠隔授業を積極的に使うことで，大学院の人数の確保にもつながる可能性はあるなと思っています。

「今年度の大学院への対応はなかったが，社会人はやはり遠隔のほうが時間を取りやすい」と聞いています。「そのまま学群から進学した学生との調整が難しい部分がある」，この調整が，時間の調整もあるでしょうし，対面と遠隔の両方をハイブリッドでやる場合の難しさも当然あるのかなと思います。

1.「社会人学生への対応」について

コメント（一覧つづき）

- 今年度の大学院での対応はなかったが、社会人は時間がとりやすいと聞いている。進学した学生との調整が難しい部分があるとも感じている。
- 社会人学生に対して遠隔授業をしたことはありません。社会人学生は大学に来る時間も限られているので、コロナ禍が終息した後も、遠隔授業を生かすことはできるかと思います。
- 今年度、社会人の方が科目履修するはずでしたが、on-line講義になったのを受け履修を取り消されました。
- on-line講義の方が社会人は受講しやすいだろうと考えたのですが、on-lineを受講できるような環境が無かったり、せっかく履修するのであれば対面でやり取りをしたいという願望が大きかったようです。この経験から、on-lineにすべきかどうかは一概に判断できないと考えます。
- 社会人学生も遠隔を使える環境にあるのであれば、有効なツールであると思います。

社会人学生への対応としては，やはり遠隔授業のメリットは非常に大きいため，今後もぜひ活用すべきという意見が多数と思います。特に大学の講義の実施に関しては大きな問題はないですが，やはり実験を伴うようなものには当然遠隔で対応できない部分の問題点は残っていると思います。

1.「社会人学生への対応」について

まとめ

- ✓ 社会人にとって遠隔授業はメリットが大きいため、今後も是非活用すべきという意見が多数。
- ✓ 座学の講義の実施は大きな問題はないが、実験を伴うものには課題がある。
- ✓ 社会人以外の大学院生との共存（ハイブリッド講義、時間調整など）が難しい。

社会人以外の大学院生との共存という点で，ハイブリッド講義をどううまくするか，時間調整をうまくしないと教員が二度授業しないといけないということもありますので，そのあたりの難しさは残っていると思います。

2つ目の問い，遠隔講義へのアクセスについてというところで，アクセスというのはネット環境という問いではあったのですが，それに関しては特に大きな問題はなかったように思います。ただ，「顔が見えず反応がわからなかったのは欠点」という，このあたりもビデオをオンにするというところの工夫をすれば，ある程度解消される気はします。

2. 「遠隔講義へのアクセス」について

コメント（一覧）

- 大きな問題はないと考える
- TeamsかZoomがわかりよいかもしれません。
- 特に問題は感じませんでした。授業内で質疑応答も行いましたが、各自問題なく接続できている様子でした。
- ネット環境が整っていて、全く問題ないように思います。
- 特に問題はない
- 特に問題はありませんでした。顔が見えず反応がわからなかったのは欠点ですが。
- 学生さんの遠隔授業へのアクセスについては、双方向で通信ができるようなインフラの整備も必要かと思います。
- TeamsかZoomは難しくないと思います。
- 特に問題なし。社会科学系は大学院の本来の講義がやりやすくなったかもしれない。
- 忙しい社会人の時間を考慮すると必要に応じて対面と遠隔を組合すことがベスト。

双方向での通信というのも，これも工夫すればできる部分もあるのですが，インフラの整備，パソコンの性能やネット環境が個人個人違う場合があるので，そのあたりの確認が必要になると思います。

「私の場合は，時間帯を決めて遠隔授業を実施しましたが，社会人ではオンデマンド方式も必要になってくるのではないでしょうか」という，録画のものを残すのが大事だというのもあるのですが，下の意見でいうと「ライブ配信かオンデマンドで状況は異なると思いますが，ディスカッションをメインとする授業ではやはりオンデマンド型は不向き」なので，当然場合によるのかなというところです。

2. 「遠隔講義へのアクセス」について

コメント（一覧つづき）

- 私の場合は時間帯を決めて遠隔授業を実施しましたが、社会人ではオンデマンド方式も必要になってくるのではないでしょうか。
- 私の担当科目については、基本的に対面授業を予定しているが、一般論としては遠隔授業をすることで社会人大学院生を受け入れられる地理的な範囲が広がることの意義は大きいと考えている。
- PC、タブレットとネットワークがあればよいので、問題はないと思います。
- 外部からだとMicrosoftのteamsでうまく入れない場合もあるようなので、Zoomの方がよいように思います。
- ライブ配信かオンデマンドかで状況が異なると考えますが，ディスカッションをメインとする授業ではオンデマンドは不向きです。
- わかりません（コンピューターの操作があまりわかりません）
- 高齢者には、ほとんどの場合期待できない（メールのやりとりすら第三者任せのことがあった）。
- 遠隔授業で効果があるかどうかは，科目で判断する必要があるが，研究科にあっては本人の意欲と希望を勘案して可能であれば遠隔講義も取り入れて実施するのがよいかと考える。遠隔でも授業効果が十分な科目もあると考えるが，これも本人の意欲次第。

「社会人の大学院生の中で高齢の方がいらっしゃった場合，パソコンの使い方ができないので，ほとんど期待できない。メールのやり取りすら第三者任せの場合があった」という事例もあるので，個別対応が必要になってくる場合もあると思います。

遠隔授業で効果があるかどうかは，やはり科目で判断する必要があり，研究科では特に本人の意欲と希望を勘案して，可能であれば遠隔講義も取り入れて実施するのがよいと考えます。遠隔でも授業効果が十分な科目もあると考えますが，これも本人の意欲次第というところで，教員が優先してやるというよりも，受講者の目線で考えるべきだという，コメントと思います。

同様のコメントで，これは学群のお話と思うのですが，大崎市に住んでいる4年生とは，卒業研究を遠隔で進めていました。学生の要望もあり，対面から遠隔に移行しました。遠隔講義へのアクセスは学生によって異なるので，あくまで要望があったときに遠隔で講義を行うべきだと思いますと書いております。

2.「遠隔講義へのアクセス」について

コメント（一覧つづき）

- 環境が悪い場合は、オンデマンドの対応が良いかもしれない。
- 会社の人との会議をZOOMでやる場合も多く，通常は問題ないかと。
- 県の職員などだと，県のネットワークからでは遠隔システムは使えない決まりがあると聞いた。
- テザリングでも講義であれば大丈夫かと思われる。
- コロナが収束したあとでも、遠隔授業を検討してもよいのでは。
- 今年度、社会人学生に対する遠隔授業を行っていないが、遠隔講義のアクセスは特に問題はないと思われる。
- 大学院生のアクセスについては問題が生じなかったようである。
- 大崎市に住んでいる4年生とは、卒業研究を遠隔で進めています。学生の要望により対面から遠隔に移行しました。遠隔講義へのアクセスは、学生によって異なるので、あくまでも要望があったときに遠隔で講義を行うべきだと思います。
- アクセスは、最初は主に慣れていないということで、音声が聞こえないとか、ログインできないなどありましたが、今は問題ありません。

アクセスに関して，最初は慣れていないということで，昨年先生方は経験したと思いますが，音声が聞こえないとかログインできないなどありましたが，今は問題ありませんということで，私はやはり慣れる期間というのは教員側と受講者側，両方必要かなというふうに思います。

ネット環境やPC環境で授業の質も変わるというところや，学群生においてPCの故障，スマホでの履修など，不具合を抱えていてもそのまま受講しているような学生がいたように感じます。レスポンスの悪さなどから感じたということです。教員サイドから状況確認ができない欠点があるのではないかとのことなので，進行の統一には標準的な履修法の指定をすることの必要性を感じました。教員側は全く問題ないように感じていても，実は学生側がいろいろ不都合を抱えていても，それが遠隔だと見えにくいという，確認しにくいという，そういう不安点もあると思います。

2.「遠隔講義へのアクセス」について

コメント（一覧つづき）

- ネット環境やPC環境で授業の質も変わる。
- 学群生についてPCの故障、スマホでの履修など不具合を抱えていても、そのまま受講しているような学生がいたように感じた。レスポンスの悪さなどから。教員サイドから状況確認できない欠点かと思われた。進行の統一には標準的な履修方法を指定することの必要性を感じた。

遠隔講義へのアクセスについてまとめると，遠隔講義へのアクセス自体は大きな問題は教員側から見るとないように思えます。「大学院生のネット環境，もしくは対応能力というのはそれぞれ異なるため，どのように把握することができるかというのはわかりませんが，少人数であればつながっていること，お互い双方向でできることという把握が授業の開始等に必要」というところと，「遠隔講義は教員の都合で進めがちになるが，やはり受講者である大学院生・学群生に配慮した進め方というところが非常に重要だ」というのをコメントから感じるところです。

2.「遠隔講義へのアクセス」について

まとめ

- ✓ 遠隔講義へのアクセスは、大きな問題はないように思える（教員側からすると）。
- ✓ 大学院生のネット環境や対応能力はまちまちであるため、把握することが大事。
- ✓ 遠隔講義は教員の都合で進めがちになるため、大学院生に配慮した進め方が必要。

3つ目の成績評価についてですが，大学に関してはやはり「レポートによる評価なので問題ない」という意見がほとんどであったと思います。大学院生については，「授業内でディスカッションをすることで，内容に対する理解度，さらにその人の積極性もきちんとはかることができると思います」，「これまで担当した大学院科目ではレポートによって課題を出しており，遠隔授業でも成績評価は特に問題ないように思います」ということです。ただ，実施上，講義の中で実物を見せたり見学したりすることがあるので，その部分は当然対面でやるべきだというところです。

3. 「成績評価」について

コメント（一覧）

- レポートによる評価であれば問題ない
- 学部生の場合、レポート試験を課した。大学院でも調べなくては書けないレポートでいいかもしれない
- 研究科の科目については試験を行いませんでした。試験を行うとなると評価はかなり難しいと考えます。持ち込み可試験と位置付けて基準を設定することになると思います。
- 研究科の場合には、個人の研究に主に重点が置かれると思います。それほど重要視する必要はないようにお思います。
- 一般の学生と同じ
- 特に問題はない
- 発表プレゼンの完成度と質問回数などで積極性を評価していました。適切であったかはわかりませんが，これは対面の講義でもいつも感じています。
- 大学院生については従来から試験実施よりは、講義内での活発な討議、レポート等での評価が主かと思いますので、遠隔授業が中心となりましても変化は少ないのではと考えております。

もし試験を実施するのであれば，「不正防止をどのように担保するかが大きな課題だと思います」，「プロジェクト的な試験であれば実施可能であり，成績評価も大きな問題はないと思います」ということです。

3. 「成績評価」について

コメント（一覧つづき）

- Report提出でいいかと思います。
- 最後にレポートを課しましたが，皆さん、しっかり書いてくれました。また、毎回担当を決めてじっくり書籍を読み、それをまとめることも課していましたのでワークロードはかなりあったと思います。
- 期間を決めてレポートを提出する形をとりました。
- 少人数かつディスカッションを主とすることで、内容に対する理解度や積極性を測ることができると思います。
- これまで大学院担当科目ではレポートによる課題を出しており、遠隔授業でも成績評価は特に問題ないように思います。(ただ、講義で実物をみたり見学したりすることがあるので、その部分では対面の方がよいと考えています。)
- 試験を実施する場合では不正防止をどのように担保するかが大きな課題と思いますが，プロジェクト的な試験であれば実施可能であり，成績評価も大きな問題はないと思います。
- コミュニケーションの中で判断できると思います。ただ、点数などの指標が必要というのであれば、何かしらの対処は可能と思います。私としては、実験結果が出れば、試験みたいなことはしないで高評価でいいとも思っています。

「成績評価はレポートやコメントカードというのが主と思いますので，通常の講義と変わりありません」というコメントや，大学院生の成績評価はレポート中心なので特に問題はないが，「もし試験を併用した場合は公平さというところで問題になる」というコメントがあります。

3. 「成績評価」について

コメント（一覧つづき）

- 実験系の科目でなければ問題ないと思う。
- その時々に適切に評価すれば良い。重要なのは，修士論文や博士論文を書くことであって，科目の成績はそのときどきの瞬間風速みたいなもの。
- 試験がないのであれば、問題はない。試験が必要な場合は、試験日は登学してもらう。
- レポートとコメントカードでしょうか。
- 通常の講義と変わりはありません。
- 大学院の評価はレポートが中心なので、遠隔授業の評価においても特に問題になることはない。
- 大学院生の成績評価はレポートが中心なので特に問題が無いが，試験を併用した場合には，公正さというところで問題となる。
- 遠隔でも、対面でも、特段問題はないと思います。

成績評価とは直接的には関係ないのかなと思いますが，オンライン講義を昨年した結果，平均点の部分に一つの山があるのと，あとすごくサボる人はどんどんオンラインだとサボってしまうというように分かれてしまうじゃないかと，特にサボる派にとってオンライン講義というのは通常の対面よりも見えない分よくなくて，そういう学生にはオンラインでの講義，成績評価は難しいと感じましたと，そういうコメントもありました。

3. 「成績評価」について

コメント（一覧つづき）

- on-line講義とした結果、成績の評価が2パターンに分かれました。普通は平均点で正規分布すると思うのですが、二山に分かれるという結果です。これは、コロナ環境下で少しでも大学の授業をしっかりと受けたいという意欲派と、サボろうと思えばいくらでもサボれることから形だけしか講義を受講しなかった（ログインしただけ）派に分かれてしまい、成績が二つに分かれてしまったと考えます。サボるのを防止しようと、講義中にあてたり、アンケートをとったり工夫しましたが、あまり効果が無いと感じました。サボる派には当然on-line講義は良くなく、そういった学生にはon-lineでの講義や成績評価は難しいと感じました。
- 授業に取り組む態度等が評価に含まれないのであれば、課題の提出と内容で評価は可能
- 学生の理解状況が分からない不安がありますが、成績評価は対面で受講している学生と同様に行えると思います。
- 学群科目について試験実施での評価を行っていた科目をレポートに代替したが、基礎的な知識の習得を促す部分もあり、科目全体の評価が難しく感じた。

成績評価についてまとめると，「遠隔講義であっても大学院での成績評価はレポート等が中心であるので問題はない」，「少人数のディスカッションやコメントカードで内容に対する理解度や積極性を評価することは可能である」というコメントがありました。

3.「成績評価」について

まとめ

✓遠隔講義であっても大学院での成績評価は、レポート等が中心であるので特に問題はない。

✓少人数のディスカッションやコメントカードなどで、内容に対する理解度や積極性も評価することは可能である（通常の対面講義と同様）。

✓試験を行うのであれば、公平さの確保は難しい。

「もし試験を行うのであれば，公平さの確保というのはやはり課題があります」というコメントが複数あったと思います。

最後，その他，自由意見としてもいろいろコメントを挙げてもらいました。

4.「その他」について

コメント

- 研究科については、今後も可能な限り遠隔授業がいいと思います。理由は、学群と異なり、仙台市に居住していない学生がいること、社会人には平日昼間の講義への参加は負担であることです。
- 社会人大学院生については、研究の方に重点を置き、授業は遠隔が良いと思います。
- 一般学生と差はないと思います。
- 個人的には非常に忙しい前期でしたが、じっくりと大学院の授業らしい授業ができた時間でもありました。
- 今年度、教員も遠隔授業の実施に慣れたので、積極的に導入していくべきであろう。
- 学部学生と研究科は目的が異なるので遠隔授業の意味も異なる。
- 履修科目間の調整が必要。行うのであれば、すべての科目で行うことが望ましい。
- 講義であればオンデマンドを考えるべきかと。もちろん対話型が必要な時はそうするべきだが，100%対話型が必要ではないかと思います。
- セミナーなどに関しては、気軽に参加できるという点から、受講者が増えて当初良いと感じました。しかし最近は実学教育プログラムが乱立していて、過剰すぎると考えています。

やはり研究科においては，「今後も可能な限り遠隔授業がいいのではないかと。理由は，学群とは異なり仙台市に住んでいない学生がいること，特に社会人に対しては平日の昼間なんかの講義はなかなか負担であるので，その軽減のために遠隔はいいでしょう」ということです。

「昨年度教員も遠隔授業を実際行うことで慣れたので，せっかく慣れたのでそれを活かさない手はない，積極的に導入していくべきであろう」ということです。

学群学生と研究科の目的が異なるので，ある程度専門性のことを話す，あと少人数で行う研究科というのは遠隔授業と相性がいいと思いますが，よりディスカッションをグループでやる学群の授業というところは，やはり向かない部分もあるので，学群と大学院の遠隔の導入というのはそれぞれ特徴を見て，入れる入れないというのを考えた方が良いと思います。

講義であれば，「オンデマンド型を考えるべきかと，もちろん対話型が必要なときは対話でやるべきですが，100%対話型が必要ではない」とも書いてあります。

最後，コメントを紹介した後にディスカッションを行ったのですが，そこで特に話された内容は，「ネット環境が悪い院生もいるので，オンデマンドの講義も必要であるが，やはりオンデマンド型のメリット，デメリットを考えて対応すべき」，「特にオンデマンド型のデメリットというのはディスカッションがリアルタイムでできないということで，

5. ディスカッションで話された内容

- ネット環境が悪い院生もいるので、オンデマンドの講義も必要ではあるが、オンデマンドのメリット・デメリットを考えて対応する必要がある。
- オンデマンドのデメリットはディスカッションできないことがあり、質疑応答を別途設けることや、チャット等の有効活用を考える。その際はタイムラグがないようにする。数日内にレスポンスできるような時間の確保および連絡を行う。
- また、オンデマンドは授業なのか？ 教員の都合（出張等）によるオンデマンドはどこまで許されるのか？ などの意見もあり、オンデマンドの運用については慎重に行う必要があることなどが話された。

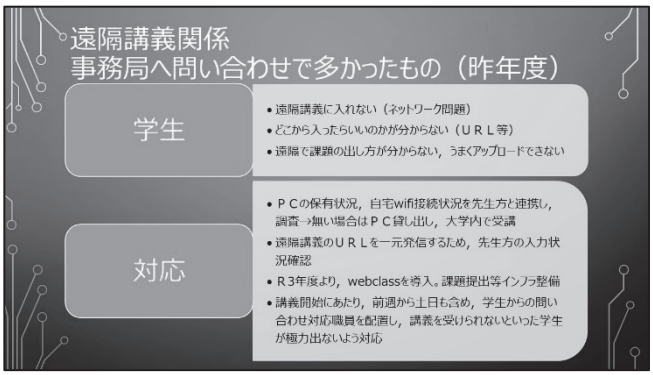
質疑応答とかを別途設け，チャット等の有効活用を考えるべき」，「タイムラグがないように工夫することが必要で，数日内に少なくともレスポンスするような時間の確保及び連絡はするべき」ということです。

「はたしてオンデマンド型というのは授業なのか？」「教員の都合でオンデマンド型にするというのはどこまで許されるのか？」と意見もあり，「オンデマンド型の授業の運用については慎重に行う必要がある」というのが最後のディスカッションで話されました。私からは以上です。ありがとうございました。

○事例5：事務局　菅野司　主査

事務局の菅野から「遠隔授業の取組と教育の質保証に向けた課題」ということでお話しさせていただきます。

事務局の場合，授業内容という面よりは授業を行うために事務局でどのような対応をしてきたかというような，多少泥臭い部分もありますが，そういった部分を事例報告させていただければと思います。



まず，遠隔講義を行うにあたって，学生から問い合わせが多かったものをご紹介させていただきます。

学生から問い合わせが多かったものを3点ピックアップしております。まず，1つ目に物理的なことに関することです。そもそも遠隔講義に入れない，これはネットワーク関係のもので，特に新入生ですと自宅にまだWi-Fi環境が整っていない，パソコンが届いていないという問い合わせがございました。

2つ目が，授業のURL等はどこに掲載されているかということです。もちろん本学ではアマビエ通信やポータル等でお知らせ発信はしているのですが，その情報をなかなかキャッチできない学生がおり，問い合わせがございました。

3つ目に，授業に実際入れている部分となりますが，課題の出し方や，パソコンの操作に慣れていなくて，うまくアップロードできないといったような問い合わせがございました。

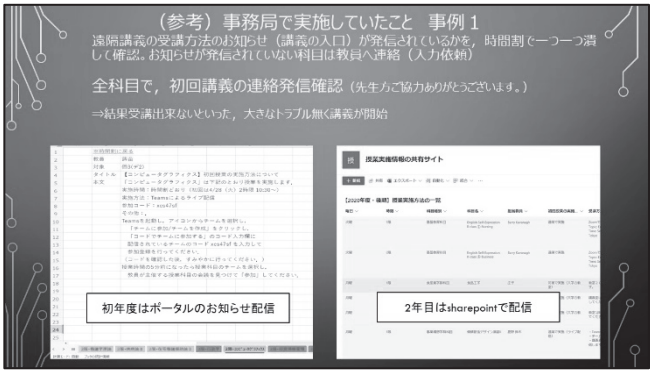
事務局，先生方も記憶に新しいかと思いますが，大学全体で，新入生に対してPC保有状況，自宅のWi-Fi接続状況について，先生方と協力，連携して調査を行ったという事例がございました。PCとWi-Fi環境が整っていない学生に対しては，コロナ禍で制限をかけていましたが，授業を受けられないというのは避けるべきということで，その学生に対しては大学で受講させるというような対応を取っておりました。

また，遠隔講義のURLについてですが，学生が1つのページを見てわかる方が一番良

いということで，URLを一元発信するために，先生方にもご協力いただいて，ZoomもしくはTeamsの入り方を1つのページにまとめた上で，情報を掲載しました。

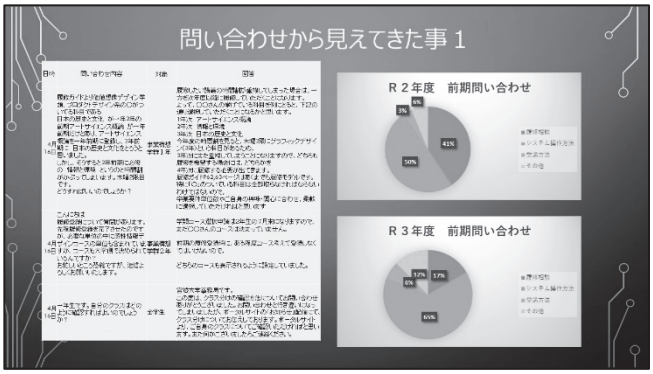
また，課題等の状況に関しましては，本年度からWebclassという新しいツールを導入して，学生だけでなく，先生方も含め，課題の提出をスムーズにできるようにインフラ整備を進めておりました。

また，学生の問い合わせは，小島先生もおっしゃっておりましたが，土日関係なく問い合わせがきておりました。昨年度に関しましては講義開始に当たって前週，土日も含め事務職員1名もしくは2名ほど出勤し，メールもしくは電話対応を行い，問い合わせ対応ができるように体制を取っておりました。



こちらが事例紹介，先ほどお話しさせていただいておりましたけれども，授業の受講方法の一元化のために，しっかりお知らせ配信がされているか，本当に一つ一つ確認をしておりました。お知らせ配信されていない科目に関しましては，先生に個別に連絡をして，学生さんが授業を受けられませんので入れてくださいと，先生方にご協力いただきました。前回もこのように確認を行うことで，初回講義，遠隔講義の受講方法を，発信および確認ができて，学生さんたちも無事授業を受けることができたのではないかと考えております。先生方ご協力ありがとうございます。

ということで，初回講義は大きなトラブルなく講義が開始されたと思います。初年度はポータルサイトからお知らせ発信をしていたものも，翌年度からはもっと見やすい方法があるということで改善されて，sharepointで配信がされているのが現状でございます。



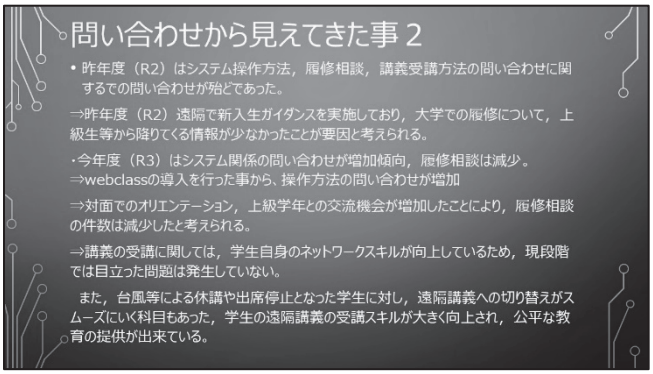
続いて，問い合わせから見えてきたことですが，遠隔になっていますので，やはり学生さんからはメールで問い合わせが続々と飛んできておりました。事務局の業務系のグループでTeamsグループをつくり，問い合わせ内容をまとめて，このように回答しましたということでまとめておりました。

今まで教務担当者が独自に学生対応していたのですが，問い合わせを積み重ねることによって教務担当者でなくても，誰でも対応できるということはメリットの一つとして挙げられるのではないかと考えております。

右側に問い合わせ内容を，左側に抜粋を載せておりますが，全体を通してどのような問い合わせがあったかというのをまとめてみました。初年度は授業内容というよりはどちらかというと履修相談，「どの授業を履修したらいいですか」というような質問が半数でした。もう半数はシステムの操作方法，「どうやって授業に出席したらいいですか」と，そういった質問が多かった印象があります。

しかし，今年度に関しましては，対面講義が始まっているというのもございまして，履修相談は先輩や上級生から情報が下りる機会が対面によって増えたのかなということで，問い合わせ内容としては減少しており，システムの操作方法のほうが増えてきています。

システムの操作方法が今年度増えたことに関しましては，最初の事例で挙げましたが，Webclassを導入したことにより，新しいシステムになってしまったので，学生さんからも操作方法等の問い合わせが増加したのではと考えております。

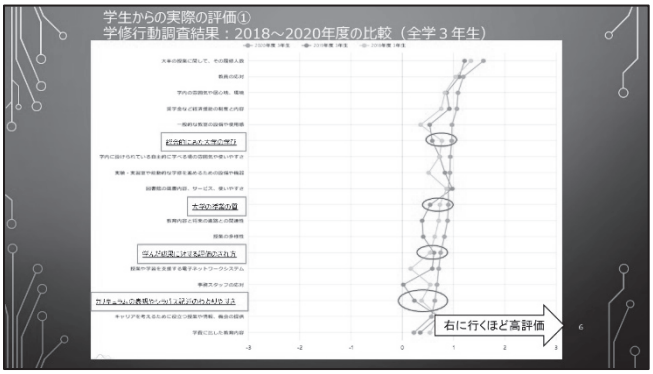


最初のほうでお話しさせていただきましたが，履修相談で，やはり対面になると「この授業はわかりやすいよ」とか先輩から聞いたからこれ取ろうといったような交流機会が対面だと増えたということで，今年度に関して履修相談は減っています。

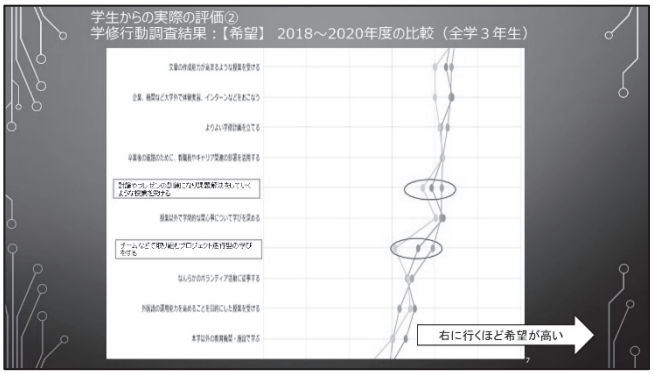
さらに，2年生以上に関しましては，やはり遠隔授業を昨年度経験しておりますので，学生自身のパソコンスキル等も向上しているのも要因の一つかなと考えております。

遠隔講義のメリットとしましては，先週台風で急遽一日休講となった場合でも，遠隔講義への切り替えがスムーズに行く科目もあり，そこまで大きなトラブルもなかったこと。台風等でバスの遅延，電車の遅延等で遅れてしまった学生に対しても，自宅でも受けられるということを考えると，公平な教育の提供ができていると考えております。

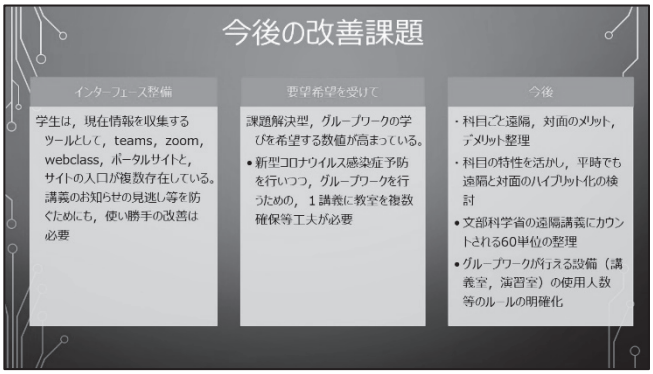
こちらのグラフは，毎年取っております学修行動調査ということで，昨年3年生（現4年生）について，遠隔が実際どうだったかという結果になっております。「総合的にみた大学の学び」や「大学の授業の質」，「学んだ成果に対する評価のされ方」，「カリキュラムの表現やシラバスの記述のわかりやすさ」というのは，こちらは昨年度の状況ですが，遠隔の場合でも高評価になっておりました。こちらの学修行動調査は，ALCSというほかの大学も入っている調査のものですが，報告会のほうに私出席させていただきま



した。ほかの大学ですと，大学の学びや授業の質というのは遠隔だと下がっている傾向が多かったですが，本学に関しましては先生方の工夫等もあり，なかなか高評価という，学生自身は「総合的にみた大学の学び」もよかったと，「授業の質」もよかったと感じている学生が多かったというのが現状になっております。



こちらが学生の希望ですが，遠隔講義ですと討論やプレゼンの訓練，課題解決型の授業，もしくはチームなどで取り組むプロジェクト型の学びというのはもっと受けたいと。やはり遠隔ですと，そういった他者と関わるような授業，初年度ということもあり，なかなか難しい部分があり，学生さん自身もそういった講義を学びたいというような結果になっておりました。



今までの学生さんの状況や事務局に対する問い合わせを考えて，今後の改善課題というものをまとめております。事務局の視点的な部分は多々あるかと思いますが，まずはインターフェースの整備です。学生は現在情報収集するツールとしてTeams，遠隔授業を受けるとしてもTeams，Zoom，お知らせ配信，課題を出すためにWebclass，ポータルサイトといったツールがあります。先生方に工夫をしていただくために，本学では遠隔授業のツールをTeams，Zoomとし，先生方に自由に選択してもらえるようにしていた部分があり，そういった面で特色がある授業というのができているかなと思います。しかし学生目線からいいますと，たくさんツールがあるとこちらの操作ともう一つのツールの操作など，複数覚えたりしなければいけないという，デメリットも存在しているようです。また，様々なツールがたくさんありますと，入口等もどこから入ったらいいのかというような，また，授業の配信等の見逃しも出てきてしまうおそれもあるというところで，使い勝手等の改善は必要になるのではと考えております。

また，先ほどのアンケートの部分で学生の声からも，課題解決型やグループワークの学びを希望する数値は非常に高まっていますので，今年度に関しましては対面授業で，まだ距離を取ったり入場制限を行ったりして，徐々に対面型の部分ができていますが，コロナ禍でも十分にこちらが発揮できるものに改善していく必要があるのではないかと思います。

グループワークを行うためには，1つの教室で行っていたものに関して複数の教室を

配置して，先生は少し大変になってしまうかもしれませんが，2つの教室を使用して対面で行うということも必要になってくるのではないかと考えております。

そして，今後に関しましては，何を残すかというふうに鈴木先生もおっしゃっておりましたが，科目ごとに遠隔，対面のメリット・デメリットを整理して，残すべきものを整理していく必要があると思います。

また，科目の特性を生かして，通常時でも遠隔と対面のハイブリッドを検討していく必要があるのではないかと思います。

また，こちらは事務的な部分になりますが，文科省のほうから遠隔講義60単位までというのは撤廃されておりませんので，その60単位をどのように活用していくかを整理していく必要があると思います。

また，学生がグループワークを行う際に，今はどうしても講義室の席を1つ空けて，間隔を空けてといったように制限をかけておりますので，グループワークが行える設備ですね，使用人数等のルールを明確化していく必要があると考えております。

そして，少し駆け足ですが最後にまとめさせていただきます。本日，今の先生方のお話を聞いて，やはり遠隔講義は残していくべきだと考えております。しかし，安易に全て遠隔化というような，そういった遠隔化は避けるべきだと考えております。本学ですと，地方ならではの対面講義のメリット，地方自治体との関わり等も含めて，それらを踏まえておく必要があると考えております。本学の特色ある講義，フレッシュマンコア科目，基盤ですとグループワークを行うスタートアップアカデミックセミナー，また地域フィールドワークで直接地域（自治体）へ向かって行う講義があります。また，専門科目ですと看護でしたら看護実習，事業構想でしたら先ほど土岐先生もおっしゃっていましたが演習ですね。漆というのは本学ならでは，土岐先生ならではといったような，そういった特色ある講義です。食産でしたら実験，農場実習等でしたり，なかなか遠隔では難しい，対面ならではの強みというものは強化していき，教育の質を上げていくことが必要になるのではないかと考えております。そういった内容を，もちろん先生方，事務職員で協働して，大学運営を進めていくことが重要なのではないかと考えております。少し駆け足となってしまいましたが，以上となります。

全体ディスカッション

○鈴木熊本大学教授　貴重な実践の報告，皆さんありがとうございました。

それぞれが大変だったと思いますが，何とか乗り越えて平時にたどり着いたかなという感じで，これらの経験から良いところ取りをして，今後，できるだけ教員が楽できて，学生が忙しくなって，学びが濃くなるという方向へデザインしていくことが必要であると思います。今までの教育は先生方が一生懸命やっていて学生が楽しているという感じがあり，それを逆転して，やはり学生が成長する場であるわけですから，一生懸命頑張って成長するというデザインを考えていかなければならないなという気持ちを新たにしました。いろいろ大変である中，ご苦労さまでした。さて次どうするかということを考えるいい時期であると思いました。

事務局の最後のプレゼンにあったように，ソーシャルディスタンスの問題というのは今後も続いていきます。今年の6月頃にアメリカの教育省の高等教育局が新しく全員がワクチンを打った場合どうするかという指針を出しており，マスクの着用は引き続き行い，ソーシャルディスタンスは不要と出ていました。ということは，みんながワクチンを受けたら，少なくとも1つ席を空けて云々というのは考えないで済むようになるのではないかということです。アメリカはそのような指針が出たので，そのうち日本もそうなるような気がしますので，それまでの辛抱という感じがいたします。今アメリカ政府が何をやっているかというと，コロナがなくならなくても，学期の最初に調査して，とにかくワクチンを全員打たせるようにしています。学生だけでなく，もちろん教職員も含めてですが，全員接種が完了したらソーシャルディスタンスはやらなくていいというのが通達として出ています。そういう意味ではもう少しの辛抱という今状況にあるということですね。

私がやはり一番言いたかった「自主性や自律性を育てる」ということに関しては，あまりご発表の中で触れた部分はなかったと思いますが，ぜひそういう観点を今後どうするかを考えていただきたいと改めて思います。

大学院の発表の中で，フタコブラクダになったというのがありました。真面目な学生はほっといても真面目にやるし，単位だけ取ればいいやと思う人もいますので，どの段階までは絶対に許せないのかということについて考えなければなりませんし，今まで教室にみんな来ているからいいという感じで，その辺の現状把握が緻密に行われていなかったかもしれないわけです。しかし，いないとなるとやる学生とやらない学生の差がすぐバレてしまうという状況ではなったと思いますので，そこを1つの契機としたときに，どこまでを許容して，どこまでは絶対に譲れないのかということを改めて学生に伝える必要があると思います。水は低きに流れるではないですが，放っておいてもこれは大丈夫，あの先生優しいから大丈夫だと思うと絶対何もやらなくなり，最後の定期試験に駆

け込みというようになってしまいます。その結果，日本の大学生は年に2回しか勉強しないという状況が生まれたわけでございますから，そこはもう少し緻密にやってもいいのかなと思いました。

一方，看護の中で，セッションを分けたときに教員が全部回れないという話が出ましたが，逆にどこまで細かくフォローするかというのがあります。ある意味学生に任せて，ディスカッションが結局早く終わったグループがあったときには，1つの経験として，このディスカッションの結果，「これしかないけどこれでいいの？」ということをリフレクションする機会があって，次に「それじゃダメだよね！」って気がついたときに，この子たちはどういうふうに自己調整をするかどうか考える必要があります。最初ダメという経験がないと自己調整もできないので，最初から全部先生方が完全にフォローしてあげて，失敗体験がないまま終わっていいのかということも一方で考えたほうがいいかなと思います。僕は「ブレイクアウトセッションに分けたら絶対に見に行かない」という方針を立てていまして，これは僕の個人的な趣味ですが，その代わりグループワークで何を求めているかを出させて，コメントは後でするというようにしています。従って，プロセスを任せて，プロダクトのチェックはするような方式を取ります。これは1つの例ですが，あまり一挙手一投足，自主性に任せる部分がないと，そこで失敗する経験もないし，気づく経験もありません。プロジェクト学習等を行うと不可避的に絶対失敗するので，立ち直る機会があるというのが1つのメリットです。そのような失敗する経験から学んでいくということをいかに織り込んでいくかが大切となります。最後までダメだとこれもまた困るので，そこはフォローしてあげて，最終的にはよくできましたにならないと困るのですが，その辺のデザインが重要です。あまり大ざっぱでも困りますし，あまり緻密でも困りますので，その辺をどういうふうに，いわゆる足場掛けをどのぐらいつけて，どうやって外していくかということについて，自主性を育てるという視点からもぜひ今後の方向性を見直していただくと良いと思いました。

つたないコメントでございますが，このような感じです。ご苦労さまでした。

○蒔苗カリキュラムセンター長　遠隔授業については，カリキュラムセンターとしての立場で皆さん取り組んでもらっていて，本当にありがとうございますとまず感謝の意を表しておきたいと思います。その中で，去年の苦労が非常に示されていて，本当に皆さん苦労したというところがよくわかりました。

2019年は対面で行い，2020年が遠隔で，2021年がハイブリッドで，この急速な変化にどう対応していくかというところがあります。最初のコロナ対応はドタバタで何とか切り抜けたところがあって，クリアしたわけですけど，そこから先，今年は非常にそれぞれの学群の取組の中でもうまく組み合わせてきているところが見えてきて，実際に鈴木先生も先ほど，「よいとこ取り」と言っておりましたが，ICTのいいところが取り入

れられるようになって，アクティブラーニングというのはどうしようとか苦労していたところが救われてきているというところが改めて明らかになってきたと思います。

そういうところで，来年から新しいステージに入るので，特にカリキュラムが変わるので，その辺も含めて遠隔授業をどう取り入れていくか，遠隔だけじゃなくてICT全般ですよね，今回みんなが勉強するすごいいい機会になったので，その辺をうまく取り入れて，新しい展開を検討していただければと思いました。

あと，学生の個人差の話もあるかと思います。性善説を取るか性悪説を取るか，私は今週久々に遠隔授業をオンデマンドで実施し，途中にクイズを入れ込んでおいたところ，適当に答えている学生があぶり出されてきて，やはり相変わらず変わりません。授業のコメントはいいことをたくさん書いてありますけど，実際にクイズをやると合ってないぞというところが多くて，少し萎えていると言いますか，しょげていますけど，その辺うまく見極めてやっていく必要があるかと思いました。

以上，コメントでした。

○食産業学群　森田明　教授

パネラーの方へ，遠隔授業になると学生間のインタラクションが欠けがちになり，孤立してしまって，授業にうまく参加できない学生が，少し意見があったかなというのがあります。パネラーの先生方で学生同士のインタラクションを促進するような，そういうフォローの仕方というのがありましたか，何かご意見ありませんか。

○小島（基盤教育群）

Zoomを使うと，Zoomの中にブレイクアウトセッションというのがありますので，私たちはそれを使っておりました。ランダムにグループが毎回作成されますので，人数もこちらで選べますし，2人は気まずいと言われたので3人以上がいいと思うのですが，そこでお互いの意見を交換させて，交換した後に戻ってきて発表させたり，何か提出させたり，そのようなことをすれば学生間でインタラクションできるのかなというふうに思います。

また，オンラインで同時にみんなで書き込むこともZoomであればできますので，ツールを使うと，今どんなことを考えているのかなというのがわかると思います。manabaとかは本学はありませんけれども，そういうのだとオンラインでお互いに書き込んだ内容が同時に見ることができます。今現在無いのですが，Zoomでもそういうのもできるのではと思いました。

○出貝（看護学群・研究科）

老年領域ではグループワークは固定したチームで行いました。6，7人が半年間同じ

グループで活動してという形でした。グループワークを始めたときは確かに「実際に話せる機会があまりないので，グループワークの時間が楽しい」というようなコメントがあり，学生自身もグループワーク自体にはいいなと思ってくれているというところは感じていました。見ていると，話し合って欲しいこともそうですが，やはり時々個人のやり取りや，お互い情報交換しながら進められていたので，その点ではグループワークも効果的だったかなと思います。人数の広がりという点では，固定チームだったので，そこはあまり広がりませんでしたが，少ない範囲ではやれていたかなと思っています。

○土岐（事業構想学群・研究科）

80名ほどの必修授業で，ポスターをデザインするというような課題があります。この課題のときに，学生が作品をつくって，それを全員で眺めるという講評会のようなこともするのですが，それぞれ20名ずつぐらいの4つのグループに分けて，それぞれの作品へ，お互いコメントし合うというような時間をこまめに設けて，学生が孤立しないように，さらに学生同士のコミュニケーションを取ることを心がけていました。

単純な孤立，例えば「ちょっと今ついていけません」，「今ここで引っかかっているんですけど」みたいなSOS信号のような，進度に追いつけない学生の孤立ということをフォローするために，特殊な専用のシステムのようなものをつくっています。画面の下に80人分のアイコンが出ていて，「助けてください」という学生のアイコンが赤くなるみたいなやつを，それは特定の誰かはわかりませんが，「あ，誰かいる」ってなるとそこで1回止めて，巻き戻して対応するような形での対応をしていました。これはまさに遠隔授業の状況がもたらした1つの成果かなと思っていまして，これはまだ実装には至っていないのですが，継続して開発しています。

質疑応答

○食産業学群　石川伸一　教授

実験や実習でICTを活用してオンラインで行っている事例など，教育の質を担保するような，何かそういった方法があったら教えてください

○鈴木熊本大学教授

方法はいろいろありますが，「必要ない」というのが僕の答えです。要するに全部オンライン，通信課程にしようと思っているわけではないので，難しいことはオンラインでやる必要がなく，対面でやればいいわけです。そのメリット，デメリットを生かしてやればいいと思います。実験実習の教育目標を考えるときに，実験しないとできないことと，頭の中で組み立てることに分かれるわけでして，頭の中で組み立てて，例えば「手順を理解する」，「どういう実験を考えよう，やってみよう」と考えることはオンラインで十分できます。しかし，いざ何かをやる，漆を塗る，何か実験する，実機がないとできないようなことはその場に行う必要がありますが，そのための準備にかかる大きい部分はオンラインであろうがなかろうが実験施設なしでできます。要素に分解して考えるということは非常に重要な視点だと思います。

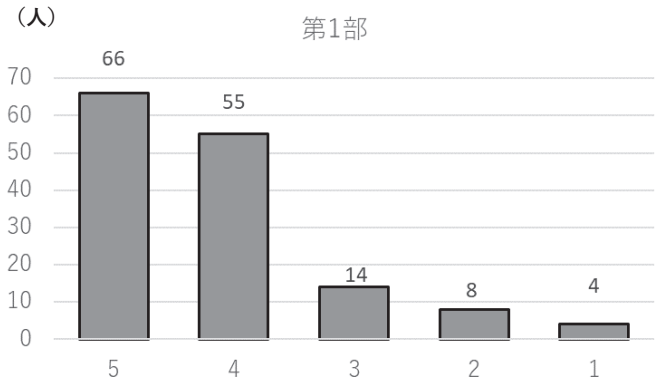
また，先ほどのグループワークの話ですが，孤独を授業で満たすというのはおかしな発想で，どうして孤独感が今までなかったかと言いますと，クラブ活動等があったためです。そういうエコシステムの中で学生は孤独を感じない，授業に来て孤独を解消していたわけではないのですよ。そこを全部授業で解決しようと思うのがおかしな話で，授業でグループワークをなぜやるかと言いますと，それは「グループワークができるようになるスキルを身につけさせる」，「人の考えを聞いて自分の考えを深める」，どちらかです。どちらの目標でやるかということを考えて，どういうグループワークがいいかを考えます。グループワークというのは教育の方法ですので，その方法を洗練するためには何のためにやるかという目標に意図を変えて考えないといけません。グループワークをオンラインでできないことはなく，Zoomのブレイクアウトをつくればできるわけです。できるからやるのかというとそうでもなく，もちろん語学でできれば1人や2人など，少人数の方がいいです。グループに分けると，1人必ず発案者が出ますから，そのほうが発案の機会が増えるという目的で行います。その目的，何のためにグループワークをするかを考えて，今後はどんなグループワークをどの程度使っていくかということを考えるとよろしいかと思います。

すみません，余計なことばかり言いましたが，以上です。

Ⅲ．令和３年度 全学ＦＤ・ＳＤアンケート結果から 【回答者数：147 名】

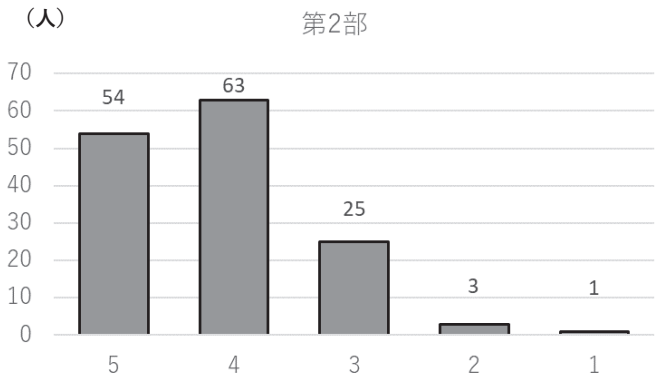
※良い　５・４・３・２・１　悪い　で評価

１．第１部の講演について



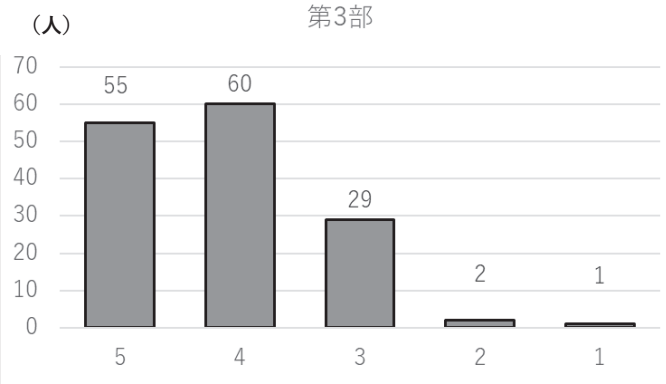
・第１部の講演については，５と４の評価をつけた教職員は全体の 8 割を超えていた。今後，遠隔授業の効果的な導入について考えるにあたり，関心が高いテーマだったことが想定され，教職員のニーズに合致した適切な講演内容だったと考えられる。

２．第２部の講演について



・第２部の講演についても，５と４の評価をつけた教職員は全体の７割を超えていた。参加者から各部局の教職員の取組や苦労した点について触れ，今後の遠隔授業の取入れや学生の自主性を育成するにあたって示唆を得る機会となった。その反面，ディスカッションの時間を十分に確保できなかった点が反省点である。

３．全学 FD・SD の全体構成について



・全体の構成についても，第１部の講演のみより評価が下がるものの，５と４の評価をつけた教職員は全体の７割を超えていた。今後，講演後に教職員でディスカッション等アウトプットできる時間を確保したい。

４．ＦＤ・ＳＤを受けて，あなたが今後の教育の質保証のための授業運営や学生対応において，活かしたいことや意識したいこと，取り組みたいと考えたこと等，記載してください。

●同じ形でなく同じ価値の追求
・鈴木先生の，無理はせずに同じ形ではなく同じ価値を追求するというのはもっともなことだと思った。
・大切なのは学生に学ぶ姿勢を持たせることだと思うので，各学群の先生方が紹介して下さったような手法を是非取り入れていきたいと思った。

●遠隔を取り入れる目的
・達成目標を中心に，コンテンツや手段が設計されるべきという，教育の基本を改めて認識することができました。
・要素技術の切り分けと，併用などの柔軟な対応について意識が高まりました。
・目標達成に向かうための授業構成・内容を考えることや
失敗も重要な経験とするためのリフレクションの実施を今後も大切にしていきたい。
・何を学んでほしいのかを細分化するということと，何のためにグループワークを行うのかなど，
目的を見失わない授業のやり方を考えるという点で，今後活かしていきたいと思いました
・遠隔と対面の特徴を捉えつつ，形式にこだわるのではなく，新たな方法を模索していきたいと思います
・オンラインを活用する授業であっても，直接の体験を提供することが重要であること。
・鈴木先生の，”遠隔授業で何でもかんでもやろうとしないほうがいい”というのは，その通りだと思います。

●自律性の育成・養成
・鈴木先生の「自律性を育てる」というお話に共感いたしました。
大学を卒業したあとにも，社会人として財産となりうることだと思います。
心理的な距離は近く，同時に自律性を促すということを心がけたいです。
・鈴木先生の指摘されていた「足場」を徐々に外して自分で考える自律型の勉強法に導くことを心がけたい。
・講演の「自律性」の説明において，授業評価から授業改善計画に対応するなかで，
学生に過度に迎合していたのではと考えさせられた。
・鈴木克明先生のお話の中で，学生の自立性をいかに育てるかが特に印象に残りました。
最近の宮城大学の学生への対応について，手取り足取りし過ぎではないかと感じていたので，共感したところです。
放任ではなく，教えない教育について自分なりに深めていきたいと思います。

●遠隔，ICTの工夫
・本日の話題のうち，グループワークなどは遠隔講義によらずとも重要なアクティブラーニングの技法であり，
その教育技術の向上に尽きると感じました。

●システム・ツールの整備
・遠隔講義の効果をいかに今後の大学教育の質向上に活かしていくかを考えることができた。
遠隔によるグループワークの導入については，効果があると感じているので，
今後，対面と遠隔の学習パッケージのデザインに取り組んでいきたい。

●著作権等情報管理
・今後，遠隔授業に伴い，電子講義資料の取り扱いや著作権（他人に譲渡しないなど・・・）についても，
学生に文書で周知しておいたほうが良いと思います（他大学の例あり）。

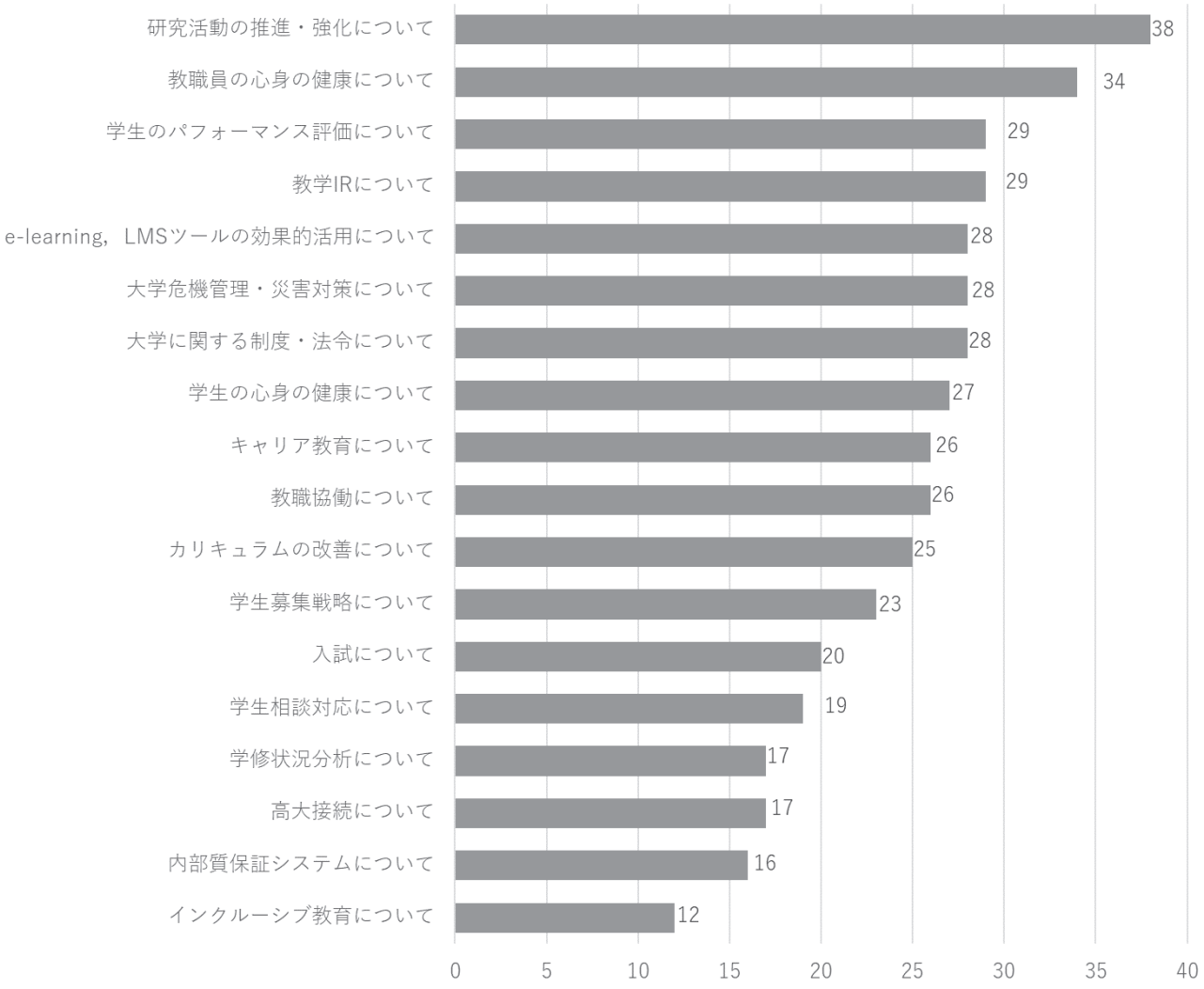
●大学運営，教員の準備
・疫病，災害等が起こっても，教育の質保証のためには固定概念にとらわれず，
変化を恐れることなく取り組むことが大切だと感じた。
・鈴木先生が繰り返し仰っていた学生の「自主・自立」については，
先生方や事務職員のパフォーマンスの向上にも重要であると感じました。
人員や勤務時間等のリソースが限られている公立大学では，どこにそのリソースを集中して組織の目標を達成し，
運営していくかを考えることが必要だと思います。
普段の業務の中でそのことを意識した目標設定や各種検討を行いたいと考えます。

●学生からの評価
・これまで大学に来れず休学していた学生が復活する切っ掛けになったりしているので，そういった側面も遠隔授業の評価ができる。
・ALCS調査や授業評価アンケートの継続的なモニタリングもあると良いのかと思います。
alagin/nigalaの導入で回答率は徐々に上がってきて，設問の見直しから5年近く経っているのでかなり「宝の山」かと思います。
「授業外学習」の部分だけ経年分析をかけるだけでも興味深いIR資料になるのではないでしょうか。
第４サイクルの認証評価では，確実にその辺りが問われることになると感じています。

●学生支援
・遠隔授業においても学生と適切なコミュニケーションをとって，その学習に的確に効果を上げていきたいと考えます。
・遠隔配信の状況になってから，連絡方法や課題の提出方法が多様化して学生が混乱していることがわかったので，
今後は講義内できちんと情報整理をすべく取り組んでいきたいと考えた。
・遠隔授業の工夫については，事務局職員もアンテナを張っておかないと教員，学生に取り残される恐れがあると感じています。
・鈴木先生のお話にあった「学び方を学ぶ」という視点について，
そうしたことを意識せずとも大学での学びを進めていける学生と学び方が分からないという学生がいるかと思う。
後者のような学生がいることについて，改めて認識すべきであると感じた。
・「学生の孤独を授業で満たすのは違う」という鈴木先生のコメントは良いですね。
これはキャンパス・ライフ全体の問題であり，授業がその解消の全てを背負い込む必要はないと思います。

・今回の FD・SD を受けて，遠隔で何でもかんでもやろうとせず，「遠隔を取り入れる目的」について再確認すること，手取り足取り教えるのではなく，「教えない教育」，「学生の自主的な学び」について挙げられた。
・遠隔授業を案内する際も，連絡方法に注意しないと学生が混乱するだけでなく，教職員が「学生に取り残される恐れがある」といったコメントが挙げられていた。

5．今後全学 FD・SD で取り上げてほしいテーマについて



●大学運営
・ハラスメントについて。
・大学における健康経営について
・地方の公立大学が今後直面する課題について
・地方大学の生き残り戦略について
・「大学経営者や経営陣はこの大学をどんな大学にしたいのか？」
・アフターコロナにおける他大学の大学運営の実施例、変化、成果
・大学の国際化について

●教職協働
・「大学教・職員の大学内での役割とパートナーシップ」

●教育評価
・宮城大学生の個人個人の１－４年間の学修状況・成績等の変化
・卒論研究の評価方法の公平・厳格化
・「学生（受講生）の評価について－納得できる評価の在り方」

●多様なツールの使い方
・ICTの教育利用については、もう少し掘り下げてほしい。
・大学DX
・Google for Educationなどのツールを積極的に講義・演習に取り入れた事例とその効果の検証などの紹介

●オンライン講義
・遠隔授業に伴う、電子講義資料の取り扱いや著作権について

●研究活動の推進
・教育・研究によって創出された知的財産の管理
・教員と学生の発明に関して
・研究費の獲得について

●学生指導・学生支援
・学生のメンタルケアについて、専門家から
・より良いEQと人間関係スキルの為の効果的な教育

●インクルーシブ教育
・ダイバーシティ、LGBTQ+、男女共同参画

●その他
・学生の学びのモチベーションをあげるにはどうしたらよいのか

・今後 FD，SD で取り上げて欲しいテーマとして，選択/自由記述ともに，「研究関連」や「教職員の心身の健康」，「学生のパフォーマンス評価」についての関心が高い結果となった。
・今回の講演を受け，学生の心身という希望が少なく，「学生の学びのモチベーションをあげるには」といった，学生自身の学びや教育評価についてあげられていた。
・LMS や教学 IR については，昨年同様に関心が高い傾向にあるので，カリキュラムセンター含め，テーマの検討の参考としたい。

第２部

ミドルレベルＦＤ・ＳＤ

第２部　ミドルレベルＦＤ・ＳＤ

１．看護学群　・・・５８

２．事業構想学群　・・・７０

３．食産業学群　・・・７２

４．基盤教育群　・・・７４

５．看護学研究科　・・・７６

６．事業構想学研究科　・・・８０

７．食産業学研究科　・・・８４

８．アドミッションセンター・高大連携室　・・・８８

９．カリキュラムセンター　・・・９２

10．キャリア・インターンシップセンター　・・・９４

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　桑名　佳代子

主催者（組織）	看護学群教務 WG （担当：◎坂東志乃，相樂直子，遠藤昭美，桑名佳代子）
タイトル	学びの振り返りの活用について
実施の趣旨	看護学教育において、卒業時にどのような知識や技術を身につけておくべきか、これまで文部科学省や厚生労働省でも検討会が重ねられてきた。特に大学教育における卒業時到達目標については平成16 年に文部科学省で検討され、その後、日本看護系大学協議会が「学士課程においてコアとなる看護実践能力」としてまとめた。この動きを受け、本学では「学びの振り返り」を作成し、学生自らが卒業時の到達目標を把握し、自己評価しながら学修を進めることができるよう先駆的に取り組んできた。平成 30 年に日本看護系大学協議会が「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時の到達目標」を発表したことを受け、本学でも令和 2 年 4 月にコアコンピテンシーとの関連が精査された改訂第 5 版が発行された。今後より一層の活用が期待されるところであったが、コロナ禍での感染予防対策のため学生への周知や教員と相互確認する機会が十分に取れない状況にあった。そこで、FD では、コアコンピテンシーと学びの振り返りについて全体での共通理解を深め、今後に向けた効果的な活用方法を検討する一助となることを目指す。
参加者	看護学群教員
日　時	令和 3 年 8 月 6 日(金)　9：30～12：00
場　所	300 講義室
プログラム構成	9:30～　開会　司会：教務 WG　坂東志乃 9:30～ 9:35　挨拶　副看護学群長　菅原よしえ 9:35～ 9:45　趣旨説明　教務 WG 長　齊藤奈緒 9:45～10:10　話題提供（25 分）　講師：木村眞子教授 「学びの振り返り改訂第 5 版の内容と活用状況について」 休憩（10 分） 10:20~ 11:00　グループワーク（話合い 30 分+準備・移動 10 分） 「今後に向けた『学びの振り返り』の効果的な活用について」 11:00～11:50　グループワークの発表と意見交換（50 分） グループワークの内容を発表し、意見交換する 11:50～12:00　総評　看護学群長　高橋和子 12:00　閉会

[事前準備]　各自が、FD 当日までに、①②の資料を確認した。

①「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時の到達目標」
https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf

②学びの振り返り(第 5 版)

[当日]

1. 趣旨説明

教務 WG 長（齊藤奈緒教授）が本実施の趣旨について説明した。

2. 話題提供

「学びの振り返り改訂第 5 版の内容と活用状況について」　講師　木村眞子教授

3. グループワーク

6 つのグループに分かれて、「今後に向けた『学びの振り返り』の効果的な活用について」をテーマにディスカッションを行った。

《グループ》

1 G	2 G	3 G	4 G	5 G	6 G
桑名佳代子★	安齋由貴子	大熊恵子	大塚眞理子	塩野悦子	武田淳子
木村眞子	風間逸郎	高橋和子	齋藤奈緒★	出貝裕子★	相樂直子★
真覚　健	菅原よしえ★	武田和久★	後藤　篤	金子健太郎	萩原　潤
平泉　拓	木村三香	竹本由香里	横山佳世	菅原亜希	勝沼志保里
三上千佳子	小松容子	山田志枝	山本文枝	鈴木敦子	坂東志乃
沢田淳子	霜山　真	伊藤佳美	菱沼ゆう	佐藤泰啓	後上亜友美
大槻　文	千葉洋子	鈴木智美	大橋幸恵	桑名　諒	成澤　健
庄子美智子	徳永しほ	相澤美里			遠藤昭美

★：各 G のファシリテーター(教務 WG メンバー)

4. グループワークの発表と意見交換

1G あたり 5 分程度で、ディスカッションの内容についてグループごとに発表し、全体で共有した。

5. 総評

看護学群長（高橋和子教授）より、本実施に関する総評のコメントをいただいた。

【グループワークの記録】

１Ｇ　桑名佳代子、木村眞子、真覚健、平泉拓、三上千佳子、沢田淳子、大槻文（発表）
　　庄子美智子（記録）

はじめに、学びの振り返りの活用の現状について、教員が総合実習で学生と学びの振り返りを行った際に記載が白紙の学生もみられたことや、学びの振り返り自体に意識がいかない学生もいれば、学びの振り返りに記載し評価している学生もいたことを共有した。また、まとめ（自由記載欄）の活用が不十分な学生もみられ、個人差が大きいことがあげられた。学びの振り返りの使い方は示されていたが、いつ・どのように使うかが分かりにくいことが考えられた。学びの振り返りを有効的に活用するためには、いつ、誰が、どのように説明していけばよいのかが重要である。そこで、学びの振り返りの導入時期について、新入生の教務ガイダンスで実施しているが、１年生は初めの時期の説明で取り組んでいく意味を理解できるのかについて議論を行った。その結果、導入時期は、専門科目が始まる時期にある１年生後期の初めの時期に説明を受けてもよいのではないかという意見があった。一方、関連する科目の記載は１年生の前期から始まるため、前期に視点を提示しないと振り返りが難しく、視点をもって学習できないことが考えられ、１年生は該当する科目に焦点を絞った説明が望ましいことがあげられた。また、4 月のオリエンテーションで説明を詰め込むことは難しいと考えられ、関連する科目の説明時やオリエンテーションが終わった落ち着いた時期に説明することがあげられた。例えば、概略については１年生の 4 月に行い、具体的な使い方の説明については SSC の新入生向けのオリエンテーション時に行うことで、学習し始めている科目と学びの振り返りとのつながりについて理解しやすいのではないかとの意見があった。

次に、学年毎の評価担当・時期について議論を行った。1 年生はクラス担任が評価を行っているが、担当学生約 25 人の振り返りを担保できるのかと意見があった。実習での統合した学びの大きいことを考えると、基礎看護学実習Ⅰ段階終了後の評価が妥当ではないかと意見があった。2 年生は、2 年終了時にクラス担任が評価を実施しているが、実習終了後が 1 年時からの変化を捉えやすく、課題を明確にしやすいため、基礎看護学実習Ⅱ段階終了後の 9 月が妥当ではないかと意見があった。3 年生では、実習前に学びの振り返りを活用することをアナウンスして意識付けを行い、領域実習開始の領域で面談時に確認し、実習終了時の担当領域で振り返りを行うことが案としてあがった。4 年生では、総合実習前後の時期 5～6 月で学びの振り返りを確認しているが、学びの振り返りは卒業時の到達度であるため、卒業研究担当教員がディプロマポリシーの評価と一緒に行うのが妥当と考えられるが、担当学生数の状況によっては個々人の振り返りではなく、総括して話し合うことも案として

あがった。卒業する時に不安を抱えている学生もいるが、学びの振り返りで評価し自信につながるものになるのではないかとの意見もあった。今後、教員との確認を行うタイミングを明文化し、教員および学生にアナウンスを行う必要がある。また、評価欄のデータバーは卒業時 100 とした時、1 年生は 25 区切りの評価の割合の考え方の難しさがあげられ、案としてチェックリストでの評価について意見があった。

さらに、新カリキュラムになると科目が変わるため、新たな説明が必要である。活用の視点や位置づけを学生に伝えていくことを意識し、共通認識のもと行っていくことが重要であり、まずは『学びの振り返り第 5 版』を十分に活用し、次につなげていく必要があるという結論に至った。

２Ｇ　安斎由貴子、風間逸郎、菅原よしえ、木村三香、小松容子、霜山真、千葉洋子、徳永しほ（書記）

１．学びの振り返り（第 4 版）の活用状況の共有

「学びの振り返り（第 4 版)」の活用状況について、以下のような意見が共有された。

１）講義場面：

・講義において、教員はディプロマ・ポリシーとの関連を意識した講義準備を行っているが、学修成果と「学びの振り返り」の評価項目との繋がりについては十分に振り返りができていないと教員自身が感じることがある。

・「学びの振り返り」を中心とした講義・演習とし、学生自身も「学びの振り返り」を意識して学修に取り組めるような仕組みをつくることにより、教員と学生の双方で「学びの振り返り」を活用しやすくなるのではないかと思う。

２）実習場面：

・実習での振り返りの際に、各領域の実習目標と、「学びの振り返り」の評価項目の繋がりが把握しにくいと教員自身も感じることがあった。

・学生が振り返る根拠となる材料の明確化の支援として、教員は面談で学生と実習での学びの場面を振り返り、学生自身が「学びの振り返り」に当てはめて評価できるように関わっていた。

・実習の学びを「学びの振り返り」の各項目で評価するにあたり、学生だけでは主体的に評

価を進めている様子が少ないと教員は感じており、根拠となる材料の明確化には、教員の介入が必要であると思う。

2．今後への活用

上記の意見交換を踏まえて、「学びの振り返り（第 5 版）」の活用について、学生が主体的に評価する動機付けの機会の充実に向けて、以下のような意見が出された。

・学生が 1 年間の中で、自身の学修がどの項目に関して評価できるか、学年ごとに評価項目を焦点化する支援を行っていく。そのためには、「学びの振り返り」の全ての項目に対する評価を、教員と学生が毎年一緒に実施する、というこれまでの方法を見直し、各学年での講義または各実習での学修が「学びの振り返り」の各項目のどれに該当するか学生に想起させることで、主体的な評価を支援する方法などが提案された。教員は、学生が想起する際に、課題だけではなく、学生自身の成功場面や成長についても併せて振り返り言語化ができるように支援を行っていく。

・各学年で評価する時期や担当教員について明確化することで、学生が定期的に「学びの振り返り」を活用する機会をつくる。但し、1・2 年生の担任制では、担当教員 1 名に対し、約 25 名の学生を担当することとなるため、教員の負担とならない方法の検討が重要である。

・1 年生で「学びの振り返り」を導入する際、1 年生が理解しやすい表現を用いて、1 年生の時期に活用する具体的な方法などについて十分な時間を設けた上で説明し、動機付けを図るなど、丁寧な支援が必要である。

・今後の見通しとして、新カリキュラムでは、1 年生のスタートアップセミナーにて、「学びの振り返り」を活用したディスカッションの実施を検討していることが共有された。

・学生が講義や実習との繋がりを捉えて主体的に評価できるような仕掛けづくりの具体例として、「実習で 1 つの目標が達成したら、『学びの振り返り』の関連する項目にポイント性で 1 点追加」や、アプリなどの電子化の導入などが提案された。

３Ｇ　大熊恵子、高橋和子、武田和久（司会）、竹本由香里、山田志枝、鈴木智美、相澤美里（発表）、伊藤佳美（記録）

◎現状と課題

・学生が 1 人で評価することは難しい。一方、学生と教員がともに振り返ると膨大な時間がかかる。

・学生の主体性に任せすぎており、うまく活用しきれているとは言えない。
・実習後に振り返ることが多く、実習での学びが中心となる。
▶基礎看護学実習終了後に振り返っている。実習での学びが主となり、講義等での学びを振り返ることが難しい。
▶精神看護学実習での学びは複数の能力群にまたがり、結果として、できたか否かのチェックにとどまっていることが多い。
・教員も第 5 版の活用方法を共有する機会がなく、充分理解できていない。

◎OSCE との比較

・（他大学での経験）OSCE は、評価者が教員や病院職員であり、技術チェックは客観的に行うことができる。一方、ヒューマンケアや倫理に関する部分は評価しづらく、OSCE で網羅的に評価することは困難である。「学びの振り返り」は形成評価であり、振り返ること自体が学びである。OSCE と「学びの振り返り」は使用方法が異なることを確認した。

◎今後の活用について

・学生が主体的に活用するために、教員による誘導が必要である。
▶1、2 年生に対しては、「ここまではやる」と梯子を登らせることが必要であり、3、4 年生になるにつれ、主体的な振り返りをできるようになることが理想的ではないか。
▶1、2 年次の学生の振り返りを行う教員について検討が必要である。
・学びは実習に関することだけではないことから、年度末に評価する際には授業での学びを併せて確認して、学習の成果を示すことができれば、学生も評価しやすいのではないか。
・学生自身が振り返る際の指標としてポートフォリオの作成が必要ではないか。
・「学びの振り返り」を電子化するとよいのではないか。
▶学生は卒業後にも振り返ることができると考えられる。
▶電子化するのであれば、教員側の共通の指針が必要である。
▶「学びの振り返り」に各実習の自己評価入れ込めれば、他領域での学修状況を確認したうえで指導できるので教員側のメリットも大きいのではないか。
・教員が「学びの振り返り」の活用方法を確認する機会も必要ではないか。

4Ｇ　大塚眞理子，齊藤奈緒，後藤篤(発表)，横山佳世，山本文枝(書記)，菱沼ゆう，
　　大橋幸恵

1）「学びの振り返り」の使用状況と課題

はじめに，1 年次の基礎看護学実習第 1 段階終了時，3 年次の領域別実習前，4 年次の総合実習前，卒業研究終了時に「学びの振り返り」を活用していることが共有され，各自の所感を話し合った。

1 年次に学びの振り返りを実施する際は，何をどう評価するのか理解できていないことから，学びの振り返りの使用方法を説明し，学生の自己評価と教員の評価をすり合わせることが必要であると共有された。

また，3 年次以降に使用する際，「○」「△」「×」だけで評価することが難しいこと，「%」での評価はより難しいのではないかと問題提起がされた。そこで，学生が「○」「△」「×」とつけた理由や考えのプロセスの振り返りを重視していることが紹介され，学びの振り返りを総括評価のみではなく，形成的評価として活用することの重要性と有用性を確認した。

その他に，紙媒体で運用しているが，4 年間の内に紛失する学生が見受けられることから，データベースでの運用が提案された。しかし，財源の問題や卒後に学生の手元にデータを残せない可能性が指摘され，検討を重ねる必要があるという結論に至った。

2）今後の「学びの振り返り」活用について

4Ｇでは，「学びの振り返り」は学生自ら振り返りを行うツールであり，大学教育として目指すべきは学生の「自律性」であることを共有し，自己調整学習を確立するために活用していくことを念頭において話し合いを進めた。

話し合いでは，学生が主体的に学ぶためには，1 年次の早い段階から「学びの振り返り」で目指すところを学生に示すことの重要性を再確認した。

また，形成的評価としての活用や，ポートフォリオの作成・活用により，4 年間の段階的な学びの積み上げのみならず，卒後のキャリア形成に繋がる「自律性」を養うことを目指し，学生の学ぶ姿勢と連動した振り返り方法を検討することが必要であると意見が出された。

その他に，学生と教員で振り返りを行う際は網羅的に振り返るのではなく，学生の特性や学びに合わせた振り返りの工夫が必要ではないかという意見や，学年ごとの学修進度に合わせた評価項目を整理し，学生が毎年の評価をパソコン入力でき,学年ごとの総合評価をグラフでみられるような電子化を図ること。また，活用す

る学生の意見をも反映した「学びの振り返り」作成をしていくことで、活用率がさらに向上していくのではないかという意見があった。

５Ｇ　塩野悦子、出貝裕子（ファシリテータ）、金子健太郎（発表）、菅原亜希（記録）、鈴木敦子、佐藤泰啓、桑名諒

「学びの振り返り」の効果的な活用について考えるため、活用の現状を共有した後、課題と対処について話し合った。

１．「学びの振り返り」の活用状況

最新版の「学びの振り返り（第５版）」は、現２年生に配付されているが、令和２年度に１年生に関わった教員がグループ内にいなかったため、第４版までの活用状況を共有した。

その結果、３年次の活用として、領域別実習の該当クールの実習前後に振り返りを促し、教員が学生の学習状況を確認し、当該領域の実習で見込まれる学習成果を伝え、学生の目標達成を促していた領域があった。一方で、当該領域の目標管理に集中し、実習前後の面談では「学びの振り返り」を使用していなかった領域もあった。また、活用していても、３年次時点で過去の記載のない学生や「学びの振り返り」を紛失した学生が認められたり、第４版までは当該科目に関連する目標を抽出しづらいと感じていたり、課題や困難を伴っていた。４年次総合実習前後には、すべての領域で「学びの振り返り」を活用しており、振り返りの記述の内容や目標達成状況の根拠となるエピソードについて、他領域での実習経験も含めて聴取し、学生とそれまでの学びを振り返っていた。

２．課題と対処

「学びの振り返り」は、講義・演習・実習での学びの達成状況や学びの蓄積を学生が可視化できる点で有用であるが、現状では学生にとっても教員にとっても身近なツールになっておらず、日常的な活用に至っていない。その要因として、アセスメント項目の多さ、授業科目毎の目標達成評価との重複、低学年には理解が難しい目標表現であることが考えられた。

アセスメント項目の多さについては、現在表記されている関連科目に学年を追加することで、その時点で評価すべき項目がわかりやすくなると考える。また、学年毎に項目を抽出したものを提示することでも解消が見込まれる。この場合、冊子体では学年毎の評価が分離してしまうが、電子化することで、学年毎に項目を選抜しても蓄積が可能である。さらに、電子化することで、授業科目の到達目標との重複に対して、各授業科目での目標達成状況を「学びの振り返り（コアコンピテンシーの獲得状況）」に反映させることも可能になると考える。目標表現の難しさに対しては、特に低学年において教員の支援が必要であり、「学びの振り返り」をともに行っていく必要がある。

学生の記載漏れ、紛失、使用頻度の低さといった、活用されていない現状に対しては、定期的なリマインドと、教員のフィードバックによる学生の動機づけが必要と考えられた。第５版で新たに設けられたコメント欄については、教員がコメントを書くのではなく、面談等におけるフィードバックから学生が受け取ったことを学生自身が書き込むことで、自律的

な「学びの振り返り」の活用に至るのではないかと考えられた。

3．結論

「学びの振り返り」の活用にあたっては、目標そのものを解釈することや学生が体験を振り返ることが必要である。そのため、決められた時期に教員と面談を行い、学生が意味ある振り返り（内省）を行なえるよう支援することが必要である。

6Ｇ　武田淳子，相樂直子，萩原潤，勝沼志保里，坂東志乃，後上亜友美，遠藤昭美，成澤健

1．学びの振り返りの活用状況について

・基礎看護学実習後に教員と学生とで実習の学びを振り返る際に活用している。

・看護援助技術論などの演習科目において、演習ごとに演習の目標と学びを振り返る際に活用している。

・2 年次の基礎看護学実習 II 段階の実習後に評価した後、3 年次の領域別実習まで評価していない学生が多いと思われる。

・領域別実習や総合実習の際の個人面談時に、課題の明確化や学びを振り返るために活用することが多い。この際に使用していない学生や紛失している学生がいるなどの理由で活用できないこともある。また、領域別実習の合間だと学生は次の実習に意識が向く傾向があり、「学びの振り返り」の活用に意識が向かない印象がある。

・評価項目が多く、時間を要する印象がある。記載している学生もいるが、単に項目を埋める作業や実施の有無の記載にとどまっていることがあり、教員との振り返りで学びとしての意味づけを認識する学生も多い。

・講義でしか触れられず、実習時に体験できない内容もある。

・養護教諭課程においては、「看護学士課程で養成する養護教諭のコアコンピテンシーと卒業到達時目標」（日本看護系大学協議会,2017）が示されており、本学の「学びの振り返り」との関連や活用について模索中である。

2．今後の活用について

・教員側で、活用方法や評価を行う時期などについて共通理解をし、学生の振り返りを支援する必要がある。

・2 年次での活用を促進するために、2 年次修了時期などで学びの振り返りを実施する機会

を追加する。領域別実習を含め 3 年次の学修へのモチベーション向上につながることが期待できる。

・3 年次での領域別実習において、学生自身が 6 か月間全体での成長を実感できるように、領域別実習を最初に履修する領域と最後に履修する領域のタイミングで、該当領域の教員と「学びの振り返り」を行う。

・学生にとって、項目を埋めるだけの記録、実施の有無の記録にならないように、教員は担当科目だけに限らず、他科目も含めて学生がそれまでに体験した内容を想起させ、「学びの振り返り」内の表現を用いて学びとしての意味づけを行えるよう支援する。

・基盤も含めた科目全般において、授業の中で、最終目標として「学びの振り返り」を提示して、これを達成するために必要な知識や技術であることを説明し、学生の認識の強化を図る。継続的に授業の中で、「学びの振り返り」の項目を振り返るようにする。

・学生への「学びの振り返り」の動機づけにおいて、学生が将来の自己像をイメージできるように関わり、自己像を実現するための有用なツールとして認識できるように関わることが大切である。就職活動時の志望動機や医療に関する考え方の整理にも活用できるツールであり、このような視点で、学生が活用するメリットを認識することで活用の動機づけにつながることも期待できる。

▼グループ発表と意見交換

6つのグループ発表により、「学びの振り返り」の活用状況と課題が共有され、今後の効果的な活用方法について多くの意見が集約された。学生が主体的に取り組めるように教員が支援する具体的な方法や電子化への提案があり、今後は教務ワーキンググループを中心にして検討を進めていくことが確認された。

以上

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　高山　純人

主催者（組織）	事業構想学群
タイトル	障害学生の学修支援体制の構築について
実施の趣旨	障害学生の学修支援体制の構築への意思統一を図る
参加者	事業構想学群所属教員
日　時	令和 3 年 10 月 13 日
場　所	遠隔による実施（teams 内）
プログラム構成	1）障害学生の支援について 2）重度障害学生受入事例 3）グループディスカッション 4）発表（各学類より） 5）全体での議論 6）好評（学群長）
招聘講師	

【内容】

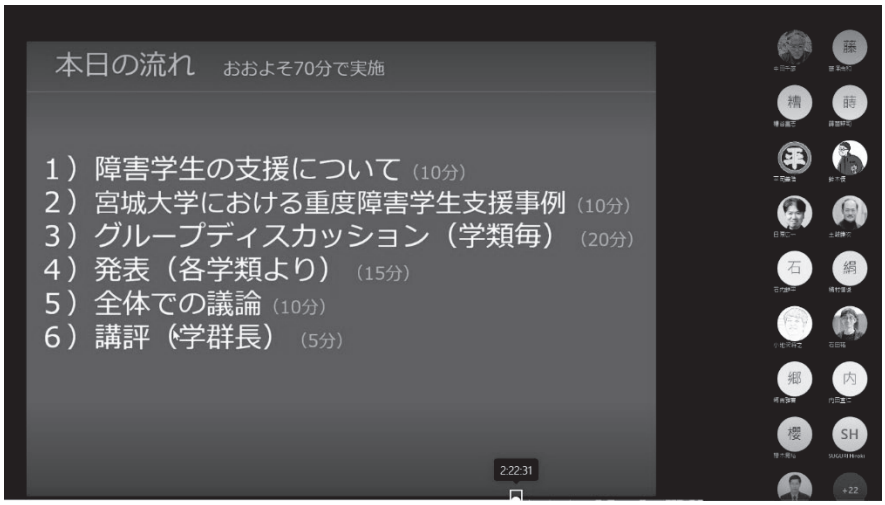
本 FD では、「障害のある学生の学習支援体制の構築」をテーマとして、本学における事例報告、意見交換がなされた。

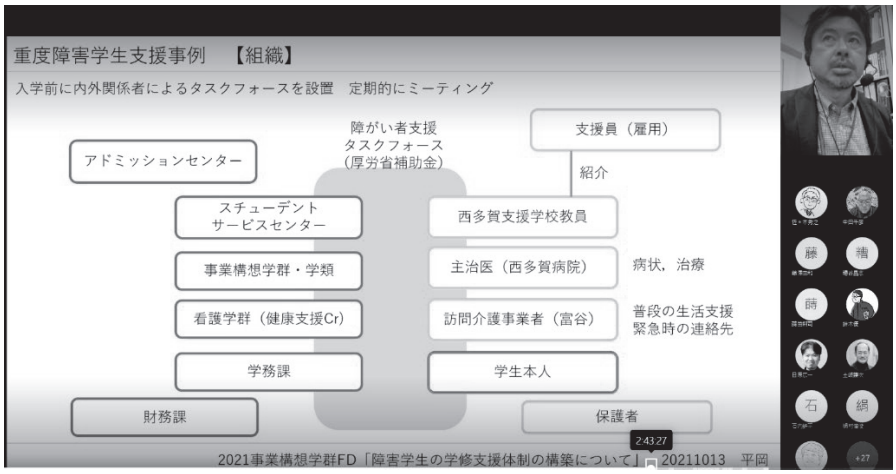
まず、佐々木准教授から、日本学生支援機構が示すガイドラインである、「はじめて障害のある学生を受け入れるにあたって」に基づき、国の方針や障害の種別、支援方策の考え方に関する話題提供があった。

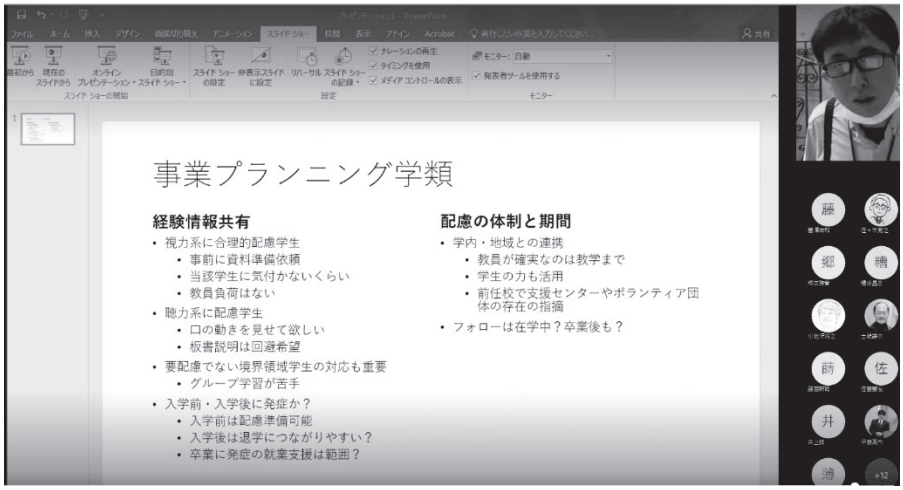
続いて、平岡教授・鈴木准教授から、本学における、重度障害を持つ学生の支援事例の報告があった。平岡教授からは、教学支援及び生活支援に係る必要経費の確保や、学内外の関係者による支援体制構築の過程について説明があった。また、鈴木准教授からは、講義内での対応の実例が共有された。

その後、学類毎に分かれて「障害のある学生の学習支援体制」について意見交換が行われた。最後の全体会において、事業プランニング学類では、障害種別の違いや発症等のタイミング（入学前か、入学後か）による特性や必要な対応に関する議論の共有がなされた。地域創生学類では、現在在学している合理的配慮が必要な学生を取り巻く状況やより良い支援体制について意見交換がなされた。最後に、価値創造デザイン学類からは、学生受け入れの指針や方向性に関するコンセンサスの形成、発達障害・精神障害をはじめとする表に見えにくい困難を抱える学生への対応等について議論がなされたことが共有された。

＜参考資料＞


本日の流れ　おおよそ70分で実施
1）障害学生の支援について（10分）
2）宮城大学における重度障害学生支援事例（10分）
3）グループディスカッション（学類毎）（20分）
4）発表（各学類より）（15分）
5）全体での議論（10分）
6）講評（学群長）（5分）
2:22:31


重度障害学生支援事例　【組織】
入学前に内外関係者によるタスクフォースを設置　定期的にミーティング
障がい者支援
タスクフォース
（厚労省補助金）
アドミッションセンター
スチューデント
サービスセンター
事業構想学群・学類
看護学群（健康支援Cr）
学務課
財務課
支援員（雇用）
紹介
西多賀支援学校教員
主治医（西多賀病院）
病状，治療
訪問介護事業者（富谷）
普段の生活支援
緊急時の連絡先
学生本人
保護者
2:43:27
2021事業構想学群FD「障害学生の学修支援体制の構築について」20211013　平岡


事業プランニング学類
経験情報共有
• 視力系に合理的配慮学生
  • 事前に資料準備依頼
  • 当該学生に気付かないくらい
  • 教員負荷はない
• 聴力系に配慮学生
  • 口の動きを見せて欲しい
  • 板書説明は回避希望
• 要配慮でない境界領域学生の対応も重要
  • グループ学習が苦手
• 入学前・入学後に発症か？
  • 入学前は配慮準備可能
  • 入学後は退学につながりやすい？
  • 卒業に発症の就業支援は範囲？
配慮の体制と期間
• 学内・地域との連携
  • 教員が確実なのは教学まで
  • 学生の力も活用
  • 前任校で支援センターやボランティア団体の存在の指摘
• フォローは在学中？卒業後も？

以上

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　石川　伸一

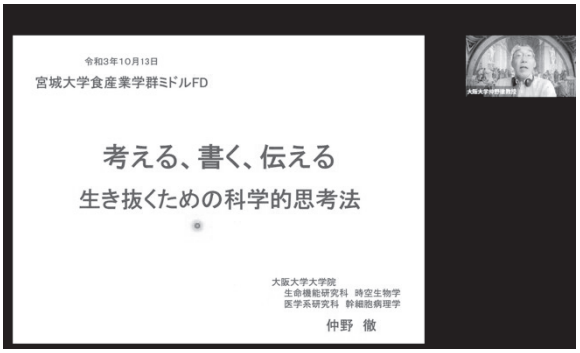
主催者（組織）	食産業学群
タイトル	2021 年度 食産業学群ミドル FD
実施の趣旨	タイトル：『考える、書く、伝える 生きぬくための科学的思考法』 内容：大阪大学の仲野徹先生に上記のタイトルで基調講演をして頂き、各教職員の教育能力の向上を図る。仲野先生は、今年度『考える、書く、伝える 生きぬくための科学的思考法』という書籍を上梓おり、初年次教育における興味深い取り組みを行っている。講演ならびに講演後の質疑応答を踏まえて、来年度からの基礎ゼミでの教育内容を各教員が考える機会とすることを FD の目的とする。
参加者	食産業学群教員：西川、井上、笠原、岩井、大竹、金内、川島、川村、北辻、木村、小林、菰田、作田、白川、須田、中村（聡）、中村（茂）、日渡、三上、三石、森田、森本、菊地、島津、後藤、都、原田、堀田、柳澤、庄子、伊吹、紺屋、鳥羽、赤澤、阿部、滝口、元木、石川 他学類教職員：風間、三浦、須栗、山本、沢田、山﨑、萩野、齊藤（千沙）、水戸、横山
日　時	令和 3 年 10 月 13 日（水）16:10～17:40
場　所	zoom によりオンラインで実施（レコーディングあり）
プログラム構成	プログラム： 16:10～16:20　FD の目的の説明、仲野先生のご紹介（石川） 16:20～17:20　仲野先生のご講演 17:20～17:40　質疑応答 終了後　Microsoft forms を使って参加者にアンケートを実施（後日、参加者全員に全員の回答を匿名で共有）。
招聘講師	大阪大学大学院医学研究科 仲野徹 先生

【内容】

◯講演内容（抜粋）

- 仲野先生の書籍『考える、書く、伝える 生きぬくための科学的思考法』内で書かれた初年次教育、学問への扉『健康と医学について考えよう』のシラバスやその具体的な取

り組み、本に書かれていない課題などについて講演頂いた。



- 昨年度のコロナ禍での実施のため、すべて zoom での遠隔授業として行われた。テーマの提言、個人でのプレゼン＋ディスカッション、グループでのプレゼン＋ディスカッションなどが行われた。
- 科学的に考えることを重要視し、その説明を十分した後に、レポートではなく論文を書かせることを特徴としていた。また、論文とプレゼンの相違点、データとファクトの取得方法など、オンラインでのディスカッションの優位性等の説明があった。

◯質疑応答での内容（抜粋）

- 「ライティング技術の指導はどうしたのか」という質問があり、文章力向上には時間がかかるため、出された論文やレポートを添削することが最低限することであり、まずは論理構築をしっかりと教えることが重要との返答があった。
- 「初年次教育における教員側の負担」に関する質問には、教員が教えることよりも、学生間で学ぶことの教育効果が大きいため、教員の負担はさほどではなかったと話された。また、特に最初のグループディスカッションにおいては、オンラインの方が学生が話しやすいことなどの話があった。
- 「初年次の教育のトレーニング結果は、その後の学年にどのように活かされるか」という質問があり、その回答として、大学では知識の伝達ではなく、「自分で考えること」を教育の中心にすべきであるとの話があった。

◯講演後の教職員アンケート結果（抜粋）

- 過剰なほど供給される情報を、見極め、正しい知識と情報に基づいて考え、自ら発信できる力を身に付けるため、先生が新入生の講義の中でどのようなプロセスを実践されていたのかを興味深く拝聴いたしました。
- 教員は環境づくりに徹し、学生の自主性にゆだねるというスタイルは他の科目に関しても共通する考え方と感じました。また、早期に大学（＝卒業後の社会も）とはそういうところだと思わせることも大事かと思いました。過保護になりがちな教育の力の入れどころを再考する機会になった気がしております。
- とても参考になりました。他の学生に強制的に質問するようにしたことがきっかけとなって自発的なディスカッションに至ったようにも思います。他人の意見に対する関心を持たせることが重要に思いました。また、一般の講義での自発性とは別物であるとのお話がありましたが、教員としては初年次教育を一般の講義科目につなげていくのが今後の課題と思います。

＊各教員の感想等は、今後の初年次教育に各自活かしていくため、メールで共有した。

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　基盤教育群　三浦　幸平

主催者（組織）	基盤教育群
タイトル	ミドルレベル FD：「新入生アセスメント報告会」
実施の趣旨	令和３年度新入生に実施した「学習状況診断テスト」「大学生基礎力調査」の分析結果の報告，情報共有等
参加者／参加対象	大和キャンパス：２３名 太白キャンパス：６名 参加対象：基盤教育群教員・全教職員
日　時	令和３年９月３日（金）１４:００～
場　所	Zoom による遠隔実施および大和キャンパス４０１会議室
プログラム構成	１．開会 ２．第１部 「2021 年度入試結果・受験生動向分析 6 月共通テスト模試分析のご報告」分析結果報告 説明者：株式会社進研アド　　福田　様 質疑応答 ３．第２部 「2021 年度新入生アセスメントご報告会 ～「学習状況診断テスト」・「大学生基礎力調査（GPS-Academic)」のご報告」分析結果報告 説明者：株式会社ベネッセｉキャリア　　田中　様 質疑応答 ４．基盤教務ＷＧからのおしらせ ５．閉会
招聘講師（ある場合）	株式会社進研アド　　福田　氏 株式会社ベネッセ i-キャリア　田中　氏

【内容】

令和３年度新入生に実施した「学習状況診断テスト」，「大学生基礎力調査(GPS-Academic)」他の分析結果報告が行われた。学群に依らない一般的な分析事項としては，進研アドからの報告（第１部）では「進研模試」の志望者の動向と実際の入試における受験者数の関係，偏差値と実質倍率に関する分析が報告された。今回は 6 月模試の結果を入試シーズンに入る前に可視化されたことは，前回の本 FD に比べて有益であった。今後の見立てとして「一般入試の学力低下」が予測され教育と広報の重要性などが指摘された。一方で，過去 5 ヵ年の分析結果を確認すると誤差の範囲と考えられない根拠などに乏しく，学内に

おける分析の追加の必要性を，前回に引き続き確認することとなった。

ベネッセ i-キャリアからの報告（第 2 部）は昨年度に引き続き，本年度も感染対策上から実施した CBT(Computer Based Test)である「大学生基礎力調査(GPS-Academic)」に関する分析結果が報告された。

2020 年度と 2021 年度入試の各学群の入学者に関する状況の変化の説明が学群別になされた。前回と同様，報告内容には入試状況・背景（センター試験，共通テストの難易度の変化）の同一性の下，実質倍率や偏差値の推移などに関しては学群により差異が明確に現れた報告が含まれた。質疑に関しては，前回と異なり，データの前提についての質問より現状の把握についてのものが大半を占めた。

大学生基礎力調査(GPS-Academic)の結果は，前年度と実施時期は異なったが，実施形態は同一のものとなり，この点に注意しての比較が必要である。入試区分別の GPS-Academic での測定項目のうち「思考力」については前年度と同様の挙動が確認された。一方で，「姿勢・態度」に関しては，2020 年度に比較して微減との報告が 3 学群で一貫して報告された。この点が実施時期によるものであるかについての判断は，現時点では留保すべきである。来年度は本年度と同一環境で実施するため，本データそのものについての性質理解も含めて注視していく。

前年度に引き続き，第 1，2 部ともの報告に関して，同種のデータ・背景から各学群で現れる諸現象に関しての差異は今後の分析対象として捉えるべきであるように思われる。

本 FD は昨年の感染症対策などの影響を受けず，例年通りの時期に実施され，6 月模試などの結果を適切な時期に確認出来た点では正常化した。一方，来年度から所謂「プレースメントテスト」の同一形態での実施は（業者側のサービス停止）見送られ，異なる形態での実施が予定されている。過去 5 ヵ年のデータとの接続性なども含め，検討を進める必要がある。(「基盤教務ＷＧからのおしらせ」の部分にて共有)

以　上

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：菅原よしえ，齊藤奈緒，武田和久，桂晶子

主催者（組織）	看護学研究科教務ワーキンググループ　大塚眞理子
タイトル	学群から大学院へ臨床経験なしで進学（ストレート進学）する大学院生の教育充実に向けて
実施の趣旨	宮城大学第３期中期計画（2021～2026 年度）に掲げている大学院課程の定員充足率向上は重要な課題である。本学では看護学研究科に入学する学生のほとんどが社会人入学であり、看護の実務経験を活かした研究に取り組めることや、大学院での学びをすぐに実務経験に活用できることは社会人大学院生の利点である。一方、欠点としては、十分な学習時間の確保が難しい事によるディスカッションの不足、柔軟な発想や新たな気づきを得にくい傾向がある。社会人だけでなく、学群からのストレート進学の学生を受け入れることで、ディスカションを活性化し、柔軟な発想や気づきを引き出せる機会が必要である。そこで、看護学研究科では、高度な専門的知識及び課題分析、課題解決手法を身につけた看護人材の育成に向けた学士教育から継続した大学院への進学（ストレート進学）の促進を検討している。 以上のことから本ＦＤでは、ストレート進学した大学院生と社会人大学院生の教育経験を持つ先生に講演を頂き、ストレート進学学生の教育に向けた配慮や体制について考えることとした。
参加者	看護学研究科教員　22 名
日　時	11 月 12 日（金）10:30～12:00
場　所	宮城大学大和キャンパス　301 講義室
プログラム構成	10:00～　講師との接続確認、打合せ等 10:30～　開会：挨拶と講師紹介（5 分程度） 教務 WG 長　大塚眞理子 10:35～　オンライン講演：（30 分程度） 「ストレート進学した大学院生と社会人大学院生の傾向と教育上の工夫」 神戸大学大学院保健学研究科　教授　宮脇郁子先生 11:05～　グループディスカッション：（30 分程度） 「ストレート進学学生の教育に向けた配慮や体制」 11：35～　全体討議、意見交換（20 分程度） 11：55～　閉会：看護学研究科長　高橋和子先生
招聘講師	神戸大学大学院保健学研究科　教授　宮脇郁子先生

【内容】

１．趣旨説明および講師紹介

看護学研究科教務ワーキンググループ長の大塚眞理子教授より、本 FD の趣旨説明および講師紹介がなされた。

２．講演内容

ストレート進学した大学院生の教育経験を多く有する宮脇郁子教授より「ストレート進学した大学院生と社会人大学院生の傾向と教育上の工夫」について具体的に解説いただいた。主たる解説項目と解説内容の一部を以下に示す。

①学部生への大学院に関する情報提供

学部の早い時期から大学院の情報提供を行っている。具体的には、新入生オリエンテーションでの大学院に関する説明、学部生に対する大学院オープンキャンパス参加への呼びかけ、学会や大学院ゼミ参加などの課外学習（レポート提出を課す）などである。

学部 2 年次の「研究ゼミナール」（通年科目）では、研究に取り組む意義や文献（原書論文）を読む力を身に付けるなど研究能力の基盤強化を図っている。

②ストレート進学した大学院生の背景

ストレート進学生の背景として、「家族や同級生に大学院進学者が多く修士進学があたり前という認識をもっている」「3 年次の卒業研究テーマ（指導教員）を選ぶときから修士進学を考えている」「臨地実習で指導を受けた教員の研究への関心が高い」「漠然としながらも、揺るがない取り組みたい研究テーマをもっている」。また、「必ずしも優等生タイプではない」「データ分析、プレゼンテーション、英語が好き（得意）である」などの傾向がある。

③ストレート進学した大学院生および社会人院生の教育上の工夫

「特論などの学内講義」「フィードワークを含む演習」「修士論文の研究課題の明確化～研究計画書作成」「調査、分析、論文作成、プレゼンテーション」の各段階において、ストレート進学生、社会人大学院生それぞれに特徴や良さがあり、それに応じた教育上の工夫を行っている。具体例として、社会経験に乏しいストレート進学生がフィールドワークや臨床現場で研究を行う際は、教員が現場との調整を図るよう配慮している。ストレート進学生の場合、「私のやりたい研究」であることが困難を乗り越える原動力となるため、「私のやりたい研究」であるかを確認しながら指導を進める。

上記のほか、学部生がストレート進学を決める時期、ストレート進学を希望する学生への配慮（不安への対応など）についても詳細に説明いただいた。

３．グループディスカッション

４グループに分かれて、講演に対する感想および本学の現状、ストレート進学生の教育に

向けた配慮、体制などについてディスカッションを行った。以下はその一部である。

＜講演の感想、本学の現状＞

・学部の 1 年生から大学院に関する情報提供、大学院進学の広報を行っていることが印象的だった。

・大学院生が学部の授業で話しをする機会があれば、それは学部生・院生の双方にメリットがあるだろう。

・本学の現状として、学部生は大学院を遠い世界に感じている印象がある。

・就職すると現場が面白くなり、研究意欲が小さくなるのではないか。

・本学のストレート進学生は少数であるが、学修意欲、論文読解力、書く力は、社会人学生よりも高い印象がある。

・大学院入試と就職（特に県内就職）の併願は、本学では現実的でない。

・本学は実学を重視しており、これはストレート進学が進まない要因の一つなのかもしれない。

・本学のキャリアガイダンスは就職ガイダンスが中心である。看護職についた後に、どのようにキャリアを形成していくかの説明も必要である。

＜ストレート進学生の教育に向けた配慮・体制＞

・学部生の進学したい気持ちを育むか、小さくするかは教育環境に影響される。進学したい気持ちを育む対話を大切にしたい。

・研究科オープンキャンパス、学部生への講義などを通して、大学院を身近に感じる体制づくりや支援が必要である。

・学部教育のなかで、研究や大学院生と関わる機会を多くもてるとよい。

・学習意欲や探究心の高いストレート進学生と、看護経験を豊富にもつ社会人学生が互いに刺激し合える風土がつくられるとよい。

・病院側の採用上の課題もある。大学院卒よりも学部卒を取りたい病院は少なくないだろう。病院との連携も今後必要である。

・ストレート進学生の経済的基盤を整えることも大切である。例えば、ストレート進学生の研究テーマに近い分野での学内研究補助、SA など。

・本学では、専門看護師（CNS）コースがあり現状では実務経験がなければ受験できない。先に研究科で勉強しその後の実務経験によって資格取得が可能となるような CNS の制度上の改正も将来的には必要かもしれない。

４．全体討議

グループディスカッションの共有と意見交換を行った。また、宮脇先生と参加者との間で以下の質疑応答がなされた。

［質問］ストレート進学するメリットを感じて大学院に進学すると講演で話されたが、学部生が感じるストレート進学のメリットについて具体的に教えて頂きたい。

［回答］ストレート進学する学生は研究志向がある。また、「学部でやった研究を続け、大学院で学びたい。それから臨床に出た方が自分にとって良い」と語る学生が多い。社会経験も含めて大学院で学ぶことで就職後の社会適応が円滑に行く学生もいる。英語の実力が落ちないうちに受験したいと明言する学生もいた。

［質問］ストレート進学後に現場に出たときの、学部卒生との 2 年間のタイムラグを当該修了生はどう感じているか。

［回答］ストレート進学生は、就職先でそのタイムラグを殆ど気にしない。2 年のタイムラグは学生にとってはそれほど大事でない。一見、臨床経験がないと思われがちだが、臨床現場での研究（患者と関わる、診療録を閲覧するなど）を通して、身に付く実践力は沢山ある。教育的配慮としては、研究を通して実践力がどう身に付いたかを意識させるようストレート進学生へ働きかけている。

［質問］学部 1 年生に対するキャリアガイダンスで、ストレート進学を身近に感じるための情報提供はどうするとよいか。

［回答］先輩の例は学生の印象に残りやすい。ストレート進学は、キャリアの一つであり、将来臨床で働く場合でも大学院で学びたいという意識を、時期として先にもってくることであると捉えている。そのため、研究職になるために大学院へ進学するという説明の仕方はしない。

［質問］CNS、NP などもあるが、ストレート進学をどう位置付けているか。

［回答］神戸大学には家族看護 CNS コースはあるが、本コースにストレート進学生はいない。高度実践教育とストレート進学とは位置づけが違う。臨床体験が絶対的に必要であるのでストレート進学は考え難い。

［質問］ストレート進学生がフィールドで研究を遂行する際、多くの配慮を要した経験がある。指導上の工夫について教えて頂きたい。

［回答］教員によって指導の仕方は異なる。私の場合、研究の導入段階で現場に行き、研究が上手く進むよう支援する。その方が後々の関わりが少なく効率的でもある。

5．閉会の挨拶

看護学研究科長高橋和子教授より、講演はじめ本 FD を通して、ストレート進学をより視野に入れた教育およびキャリア支援に対する示唆を得たこと、医療等関係機関の協力を得ながら大学院修了生のさらなる活躍へと発展させたい旨の展望が述べられた。

以上

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　金子　浩一

主催者（組織）	事業構想学研究科
タイトル	学生の特性に応じた指導方法の課題と工夫
実施の趣旨	社会人が多く通学が難しい研究科での遠隔授業の検討
参加者	石田祐，井上誠，内田直仁，大嶋淳俊，風見正三，郷古雅春，糟谷昌志，金子浩一，茅原拓朗，櫻木晃裕，須栗裕樹，高橋修，田邉信之，土岐謙次，徳永幸之，中田千彦，日原広一，平岡善浩，藤澤由和，蒔苗耕司，安藤裕，石内鉄平，伊藤真市，小地沢将之，佐々木秀之，鈴木優，高橋信人，千葉克己，絹村信俊，
日　時	2021 年 7 月 14 日（水）17：10-18:40
場　所	遠隔会議
プログラム構成	1. 副研究科長挨拶(2 分) 2. FD についての説明＋出席者確認(2 分，蒔苗先生) 3. 研究科全体の共有事項など(10 分) (1)　入試区分（地方自治体派遣枠含む） (2)　遠隔授業による指導 (3)　夜間土曜日開講 (4)　基礎学力の格差 (5)　その他 4. 新カリ各領域の議論(30 分間(移動時間含む)) 5. 各領域から発表(25 分(1 領域 5 分＋交代時間)) 6. 全体議論(10 分) 7. 研究科長講評(5 分)
招聘講師	無し

【内容】

＜全体＞

研究科では，「学生の特性に応じた指導方法の課題と工夫」をテーマに議論した。大学院生の環境や入学までの学習経験が異なる中で，どのように教育・研究の質を高めるかといったことを検討するよう，糟谷副研究科長から説明があった。また，FD 開催の意義について，蒔苗 CC 長から説明があった。

大学院では，本学内外からの新卒者，社会人，外国人留学生と背景が異なる学生が一緒に講義，研究を行っている状況にある。実際にはその背景により，専門に対する基礎力が異なったり，研究時間の確保が難しかったりするため，指導方法の課題と工夫を共有する。

まず，高橋准教授から，実際の入学者の区分の割合と，過年度のアンケート調査の結果について資料に基づき説明があった。遠隔授業による指導については，佐々木准教授から事例

報告があった。昨年度から普及しており，利点を共有しつつ，逆に対面を希望する学生も一定数いることについても対策を検討する必要があった。夜間土曜日開講については，内田教授から事例報告があった。社会人学生であるか否かで相違もあり，利点・課題など共有した。

その後，各領域に分かれて議論がなされ，それぞれ代表から発表がなされた（詳細は以下の各領域の概要を参照）。その後，全体議論で各領域の工夫などを共有した。最後に，中田研究科長の講評を受け会議を終えた。

＜ビジネスデザイン領域＞

本領域では，社会人院生の割合が相対的に多いと感じられるため，土日夜間開講を中心に論議を行った。

社会人大学院生からは，夜間土日開講については評価が高いようである。また，本領域の教員は，社会人大学院生であった者も多く，その経験からも講義は土日・勉強は平日夜間で，仕事との両立がしやすいと思われる。社会人取り込みとしては，有効と考えられる。また，土日では対面，夜間は遠隔の希望が高く，アフターコロナでも活用の有効性が感じられた。その一方で，本学は社会人大学院ではなく，学群進学生にとって有効化は疑問視された。門戸を広げるなら，ハイブリッド（対面・遠隔・録画）の同時対応も考えられた。大学院は少人数教育であり，院生のレベルに合わせた即興的対応として，書籍や資料をその場で閲覧させることも多い。その点では，論文指導や演習での遠隔利用は，不向きであり，文系の講義向きである声が大半を占めた。論文指導や演習で利用する場合は，質を落とさない工夫が必要と感じられた。

そもそも社会人大学院生を目指す者の学習意欲（仕事優先か研究優先か）も懸念されが，本研究科の応募状況を考えると，その質的なレベルの選択することは厳しいと思われた。本研究科は，文理美融合である。理系に関しては，東北の国公立大の状況からも，学部生の進学率が 50％を超える大学も多く，社会人より学部生にアピールすることが有効と考えられる。その一方で文系は，社会人を経験しての進学は 90％を超えている。よって，領域ごとにターゲットが明確に異なるため，領域ごとに大胆な運用方針を検討し，それらを院生募集でアピールすることが有効であると結論付けられた。しかし，経験年数とサンプル数が少なく確信的な結論とは言えず，広報してみないと成果はわからない。しかしながら，本研究科の大学院進学者数は，東北の国公立ではワースト 1 と評されるため，できることは挑戦する姿勢が大切と考えられた。

＜ソーシャルデザイン領域＞

大学院入試の各区分で入学した学生の特性を把握するために，大学院生を受け持つ教員から，①学生の特質があるか，あるいは②指導方法（遠隔・対面など）に違いがあるかどうかについて情報提供を受け，教員間での共有を図った。特に，本領域で最も数が多い，社会人枠で入学した大学院生についての情報が多く得られた。例えば①については，熱心である

こと、経験値が高いことなど、ポジティブな意見が大半であった。出自の大学が違うため、本学の学生に比べて学力が不足している分野もあるが、それはその都度教員が伴走することで解決できる。一方、論文の執筆能力は個人差が大きく、なるべく早い段階でその能力の把握と指導をおこなう必要がある、との意見が挙がった。②については、日頃の時間調整が難しいこともあり、遠隔での授業は概ね好意的かつ効果的に利用できたケースが多かった。今後も対面と遠隔をうまく併用することを推進していくべきとの見解で一致した。ただし、遠隔が合わなかった学生も報告されたので、いずれにしても各学生の特性に合わせて指導方法を選択する必要がある。このほか、留学生枠での大学院生については友人を作ることに苦慮していた学生の例が報告され、留学生は孤立し、私生活の問題が起こり得ることなどの情報を共有することができた。

＜空間デザイン領域＞

●留学志望の学生のニーズ，留学生の現状

- 留学生の実態として、日本語能力が低い。書く練習、読む練習の時間を別途割く必要が生じている。
- 留学を志望する中国人はポートフォリオの完成度が高く、応募時には日本人よりも優秀に見えてしまう傾向がある。
- 研究生の事前面談の書類は届いたものの、辞退した留学生がいた。
- ABE イニシアティブの時に、英語で講義をすることを前提に入学させたように、英語での講義が語学力問題の解決策になるのではないか。

●内部進学者を中心とした学生の学力の現状

- 内部進学者の学力（特に読解力）が低い。他領域の学生ではそのように感じない。
- 内部進学者は、他大学の大学院生に比べると、専門領域に対する興味関心の強さが相当低く、学群の段階で底上げしておく必要がある。
- 大学院が建築士予備校化しつつある。受験勉強は基礎学力の底上げにはつながるので、これを逆手に取る手も考えられる。
- 社会人に対しては、学群の基礎的な内容を重複して指導する必要が生じている。ただし、それぞれがフィールドを持っていることが強みとなり、結果的には高度な研究成果につながっている。
- 社会人の学び直しに際しては、導入書を用いるなどして、枝葉を落として要点のみ教育してもよいのではないか。

＜情報デザイン領域＞

本領域では基礎学力の話題に絞って議論を行った。

最初に、参加者からは履修生間の基礎学力の差が存在することが経験されており、授業計画や運営の上で制約になっていることが報告された。また、その要因として、FD 全体説明

でも挙がった研究科生の構成が多様なものになっていることに加え，カリキュラムや時間割自体にも内在する課題があるのではないかと言うことが指摘された。

対応としてまずは入試によるセレクションがさらに機能するよう，端的に言えば倍率を上げる努力が継続して必要であることが確認された。

また，「事業構想学」として求められる学際性とそれを構成する各領域の専門性のバランスをとりながらカリキュラムの不断のバージョンアップを図りつつ，例えば来校日を絞りたい社会人学生が単に同じ曜日だからというだけで他領域の授業を履修するような本質的でない科目選択が起こらないような履修上の便宜や枠組みの整備も必要であろうということが指摘された。

さらに，特に開発や実験等につながる専門的な知識と技術については究極的にはやはりどうしても補講が必要になり，履修の便宜と併せて考えると何らかのオンライン講義やそれらのアーカイブの充実が一つの手立てになるのではないかということも挙がった。自前のコンテンツを充実させると同時に，MOOCS 等の外部の有償無償のコンテンツも活用できる可能性がある。また，昨年度より行われている大学院特別講義の Web コンテンツ化は今後も何らかの形で継続したいということが確認された。

以上

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　岩井　孝尚

主催者（組織）	食産業学研究科教務委員会
タイトル	「研究科における研究指導と学生の質保証について」
実施の趣旨	文科省の教育研究審議会等では今後の大学院教育について様々な議論がなされています。最近では毎年大学院改革のアンケートが実施されると共に、学群同様に学生の質保証が求められようになってきた。本 FD では、食産業学研究科博士前期課程の学生の修士論文研究への取組状況、自然科学系、社会科学系等の異なる分野における指導方法等について教員間の情報共有を行うと共に、今後の大学院教育における研究指導について議論を深める。
参加者	食産業学研究科所属教員
日　時	令和 4 年 1 月 12 日（水）16:10～17:40
場　所	食産業学群管理棟大会議室を起点として遠隔会議
プログラム構成	趣旨説明：岩井 １：修士学生をご担当の先生から、研究指導の現状について ・笠原先生　　・日渡先生 ・須田先生　　・川村先生 ２：研究指導におけるハラスメント関連について ・森本先生（人権侵害相談員）
招聘講師	無し

【内容】

本 FD では、今後の食産業学研究科博士前期課程における修士論文研究のあり方を検討していくため、始めに趣旨説明を行い、続いて博士前期課程学生の指導教員（自然科学系 3 名、社会科学系 1 名）から学生の修士論文研究への取組状況、指導方法等についてご報告頂いた。更に、最近では研究指導等の場面でもハラスメントが問題となることがあることから、人権侵害相談員になられている森本先生から、学生から寄せられる相談事例についてお話し頂いた。

趣旨説明：中央教育審議会大学分科会が 2019 年にまとめた「2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿」にあるように、社会を先導する人材の育成に向けた大学院教育の改善が議論されています。食産業学研究科においても、博士前期課程（修士）の学生は、学生の気質の変化、コロナ禍の影響等により学生は以前ほど真剣に修士論文研究等に取り組まなく、あるいは取り組めなくなってきた様に思われます。研究科のディプロマポリシーに沿った学生を育てていくため、本 FD では、教員間での学生の目的意識、修士論文研究への取組状

況、教員の指導方法等の現状を共有することを主目的とし、今後の問題点の洗い出し、改善策の検討へとつなげる。

研究指導の現状について：
（笠原先生）これまで多くの学生を指導してきたが、学生の大学院への進学目的も様々であると共に、学生の個性も様々であった。深い学びを求めて進学する学生がいる一方で、就職活動のための時間確保が主目的で深い学びを求めていない学生もいる。深い学びを求めていない学生は、修士論文研究にも身が入らず、指導に苦労する場面もあった。また、学生の個性によりストレスがかかるとしばらく大学に来られない場合があるなど、研究指導に慎重さが求められる場面もあった。

（須田先生）研究指導においては、学生の学会への参加や企業等との協業へ関わらせること、研究室内での先輩が後輩の面倒を見ること等で学生の成長を促すこと、研究論文や資料等を元に実験を行わせることで研究力を高める試みを行っている。これらの取り組みで、ストレスにさらされると大学に来られなくなった学生も次第に生き生きとして研究に取り組むようになった事例もあった。

（日渡先生）自身の学生時代の研究室生活から、学生が自主的に研究を行い、学生間で議論するような研究室を目指している。学生の研究に対する興味関心を深めるために、学生には積極的に研究集会や学会等で発表させている。問題点としては、修士論文研究で行う遺伝子関連分野の研究はもともと実験にかかる費用が高額であるが、研究初心者の学生は失敗等も多く、成熟した研究者の数倍の費用がかかることが挙げられる。研究科においては、分野によっては修士論文研究にかかる学生 1 人当たりの教育費等について考慮が必要かもしれない。

（川村先生）社会科学系における修士論文研究の進め方は自然科学系とは異なっていた。大きな違いは、研究テーマの設定の部分で、自然科学系では担当教員の行っている研究の範囲内でテーマ設定をすることが多いが、社会科学系では学生個人が明確な問題意識を持ち、自分の研究テーマを設定し、基礎となる経済学や計量経済学の分析手法等を使って研究を進めることであった。学生の問題意識の強さもあってか、これまで担当した学生は積極的な学生が多かった。問題点としては、基礎となる学問を教える講義で、様々な分野の院生が受講するため、内容やレベルを調整する必要が生じてしまうことである。結果として院生に教えたいことと、実際教えることにギャップを生じる場合がある。

（森本先生）人権侵害相談員である森本先生の元には学生からの相談も多く寄せられている。大学院の研究指導関連では、研究室の後輩の面倒を見るのが重荷で自分の研究に支障が

ある、資料等を渡されて実験を行うように指導されても分からない部分が多くて大変等、指導教員の考えと学生の間にギャップを生じている場合がある。この辺は、今の学生の気質が教員の考えとずいぶん異なっているのかもしれない。
以上、修士論文研究について現状について教員間で情報共有した。今後は、現在の学生の考え、要望等も聞きながら修士論文研究のあり方について議論を深めていく。

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：企画・入試課　小林

主催者（組織）	アドミッションセンター・高大連携推進室
タイトル	高等学校学習指導要領の改訂について
実施の趣旨	・全国の教育水準を一定に保つため文部科学省が定める学習の基準「学習指導要領」については，社会経済情勢の変化を踏まえ約１０年のサイクルで改訂が繰り返されており，令和４年度から高等学校においては新たな学習指導要領が導入される。 ・高等学校から多くの人材を受け入れる大学にとって，高等学校での教育の内容，深度や到達点等の把握は，カリキュラムや授業設計，入学者選抜問題作成において重要と考えられる。 ・このことから，新たな学習指導要領について，改訂のポイントや背景・目的を共有する。
参加者	アドミッションセンター委員及び高大連携推進室員のほか，基盤教育群を中心とした本学教員及び職員　計３１人
日　時	令和３年８月２５日（水）午後１時１０分 ～ 午後２時３０分
場　所	Zoom ライブオンライン
プログラム構成	１　開会・講師紹介（１０分） ２　講演（６０分） 総則を中心に，新学習指導要領の改訂のポイントや背景・目的，高大接続の観点から高校現場からの要望等について。 ３　意見交換（１０分程度） ４　閉会
招聘講師	宮城県教育庁高校教育課教育指導班 主幹 上園知明 氏

【内容】

○平成２４年の中央教育審議会に高大接続特別部会が設置され，高校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的な改革について，議論が始まった。

○この高大接続改革における高校教育改革の大きな方向性は，教育内容の見直し，学習・指導方法の改善と教員の指導力向上，多面的な評価の推進である。

○その中で学習指導要領の改訂，新しい時代に必要となる資質 能力の育成の視点による教科・科目の見直しが実施された。

○平成３０年３月３０日，学校教育法施行規則の一部を改正する省令を公布するとともに，新しい高等学校学習指導要領が公示され，令和４年度から高等学校においても新たな学習指導要領が導入される。

○今回の改訂は，およそ１０年ぶりの全面改訂となる。

○総合的・俯瞰的に物事を把握したうえで，探究的な学習（主体的で，対話的で，深い学び）を進め，そしてそれらを自分の言葉でまとめて説明できる，記述することができる生徒を育成するという方針がある。

○新課程変更について

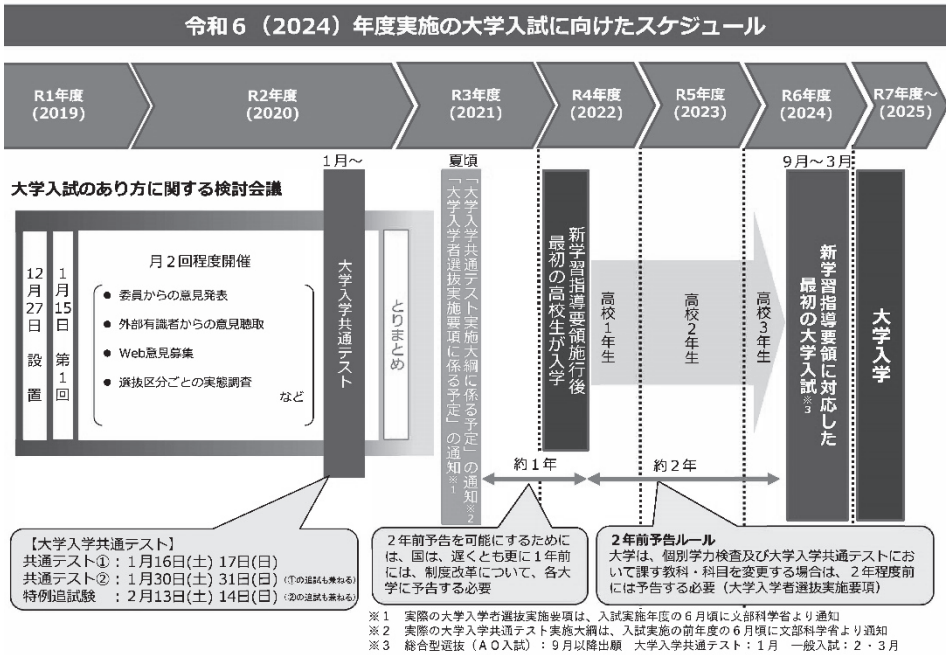
・文系科目の再編。特に地歴・公民科目の変更（地理総合の必修化，歴史総合や公共の新設必修化）

・数学Ｃの新設

・情報Ⅰの共通必履修科目化

・総合的な探究の時間と別に，古典探究，地理探究，日本史探究，世界史探究，理数探究を新設（探究学習の増加）

○スケジュールについて



文部科学省主催　大学入試のあり方に関する検討会議（第１回）配布資料より

○実施の成果について

ＦＤ終了後にアンケートを徴収し，２５人から回答が得られた。そのうち８割の参加者から，「満足」または「やや満足」であり，新たな学習指導要領の内容について「理解が深まった」旨の回答があった。また，新学習指導要領導入により，大学でも対応が必要であると思われる事項について，「入試問題作題設計」「入試制度設計」「カリキュラム設計」「授業内容設計」があげられており，本ＦＤの実施の趣旨にある「新たな学習指導要領について，改訂のポイントや背景・目的の共有」が図られ，それらが大学運営にどうのように影響するかを意識付けできるものとなったと思われる。

ただし，多くの参加者から「教科目単位の内容を，より取り上げて欲しかった」旨の回

答もあり，大勢の部分に続いて，より局所的な部分（各科目のより詳細の変更点）の共有も図られる必要があると考えられる。

以上

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：カリキュラムセンター　齊藤奈緒

主催者（組織）	カリキュラムセンター
タイトル	宮城大学の教育・学修効果の向上に向けた教育データの利活用 ～宮城大学アセスメントプラン策定に向けて～
実施の趣旨	本学は、2022（令和 4）年度からの新カリキュラム開始を控え、2017（平成 29）年度からの現カリキュラムにおける教育・学修成果を評価する時期にある。本学の内部質保証システムでは、2018 年度卒業生から開始した「卒業時学習評価」、各期の「授業評価アンケート」データが蓄積され、「社会での活躍状況等の測定」計画が必要となっている。しかし、現時点では、各期、各調査内での分析に留まり、横断的・縦断的な統合評価に至っていない。そこで、IR の全体像を俯瞰しながら、カリキュラムセンターが所管する教育データを本学の質保証に利活用できる統合分析する方略や視点を具体的に検討した上で、宮城大学アセスメントプラン策定に向けた示唆を得る。
参加者	宮城大学教職員　49 名
日　時	2021 年 9 月 2 日（木）　9：00～12：00
場　所	Zoom ミーティング（大会議室）
プログラム構成	1.基調講演：　「大学における IR の活用と課題」 2.グループディスカッション テーマ『本学の教学データの統合分析の方向性と教学 IR の課題』 1）導入＆データ提示 2018～2020 年度卒業時学習評価分析、アセスメントプラン試案 アセスメントプラン＆成果測定担当：森田明 副センター長 2）グループディスカッション 3）全体意見交換（コメンテーター:児美川講師、蒔苗 センター長） 司会・進行：FD/SD 担当　齊藤奈緒 副センター長
招聘講師	児美川　孝一郎氏（法政大学キャリアデザイン学部　教授）

【内容】

1. 基調講演：大学における IR の活用と課題

児美川孝一郎講師より、大学評価室長や学習環境支援センター長等の職務上のご経験から、以下の 4 点について講演いただいた。①「大学における IR とは何か」では、日本の IR の登場背景や文科省や私立大学連盟の調査から IR 導入の実態について説明された。②「教学 IR には何ができるか？」では、大学意思決定、現状分析と方針策定、実施後点検に、IR

がどのように関与し、仮説検証型、仮説発見型の 2 つのアプローチがあることが説明され、IR は万能なものではなく、それゆえ、分析結果を「どう生かすか」はまた別の問題であることが述べられた。③「教学 IR の発展に立ちはばかるもの」では、講師のご経験や種々の報告を基に、人材や予算などの組織化、個人情報程等データ活用ルールづくり、学内合意等の壁や、分析実施するまでおよび実施後の難問として、教学 IR の課題について具体的に説明された。最後に、④「教学 IR を使いこなす」について、教学 IR の特徴と課題を理解した上で、各大学で目的を明確にして活用すること、合意形成の重要性等の“8 つの考え方と Tips”をご示唆頂き、「データを尊重しつつ、議論し、が合意形成していく文化の醸成」が最も重要であるというメッセージを頂いた。

2.グループワーク・全体共有

まず始めに、情報提供として、カリキュラムセンター　アセスメントプラン、学修成果測定担当の森田明教授から、アセスメントポリシー中間的試案、および卒業時の学修成果の可視化の検討（2018～2020 年度測定結果に関する、教員と学生評価の比較、学類間比較、時系列比較）について説明した。本情報提供および基調講演を基に、参加者をランダムにブレイクアウトルームに割付け、5 名程度のグループで自由に意見交換（30 分）を行った。グループでは、①学生と教員の評価の差の背景、②今後学生の学修の質を評価できる指標は何なのか、③学生へのフィードバックをどうすればよいか、④IR における全体評価と個人評価の視点について意見交換したことが全体共有された。その後、児美川講師から、①宮城大学の DP 評価の特徴として、非認知的な要素も含む学群共通の 5 要素があるメリットがあることに加え、各学群の専門性の評価をもっと生かすことができる可能性があること、②学生と教員の評価の差においては、ルーブリックのような 4 段階の評価基準づくりも一案であること、③DP と各科目との紐づけ・重みづけがあれば、各授業の点検、評価につなげられるため、今回の卒業時学修成果の測定結果を活用できることの示唆、④学生の質評価は、量的データのみならず質的データの活用もできること（卒業生調査等）の示唆、⑤時系列分析と経年変化、総括評価と個人評価、いずれも重要であるが、何のために何を評価し、学生に何をどのようにフィードバックして個別の学生支援を行うか、これらについて合意を得て実施することの重要性、等についてコメントいただいた。

その後、蒔苗耕司カリキュラムセンター長から、コメントおよび挨拶の上、終了した。

3.まとめ

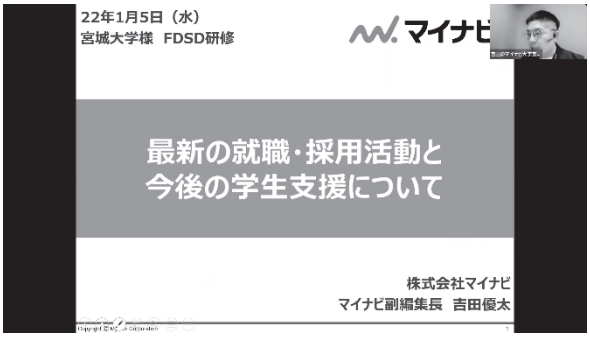
事後アンケートは行っていないが、教学 IR 室メンバー等、カリキュラムセンターメンバー以外の関心の高い教職員の参加があり、自由で活発な意見交換ができていたこと、招聘講師から非常に明瞭で具体的な示唆を頂けたことなどの感想を頂いている。今後、カリキュラムセンターでは、教育の質保証のために、学修成果測定結果に基づく各学群での教育の見直し、およびアセスメントプラン策定に向けて、今回の内容を活かし、検討を重ねる。

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　曾根　洋明

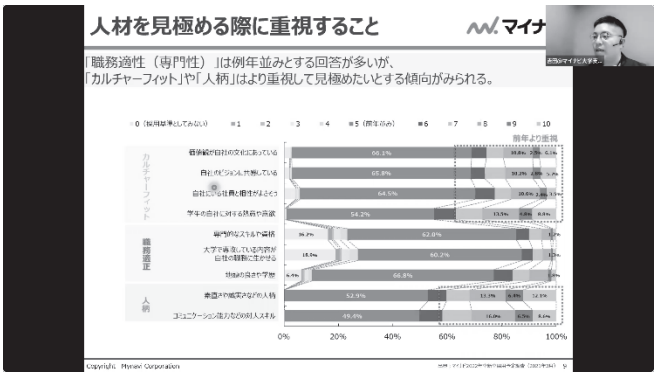
主催者（組織）	キャリア・インターンシップセンター
タイトル	最新の就職・採用活動と今後の学生支援について
実施の趣旨	コロナ禍で Web 就職活動が大きな割合を占めるようになった昨今。学生への就活指導のポイント・背景を学ぶ機会とする。
参加者	CIC12 人，CIC 外 14 人
日　時	令和 4 年 1 月 5 日 15:15-16:45
場　所	Zoom 上にて
プログラム構成	吉田優太氏による就職活動の現状・分析の解説
招聘講師	吉田優太氏（(株）マイナビ大学支援推進部）

【内容】



コロナが猛威を振るう中，就職活動は大きく変わってきた。企業は対面で学生と接触し欲しい人財を得たいと願っていたが，ままならず Web を通した接触に大きく舵を切ってきた。一方，Web による対応もデメリットのみでなくメリットもあり，コロナ禍が収まってからも Web 接触も併存していくというのが業界の見方だ。今回は（株）マイナビの大学支援推進部より吉田優太先生をお招きし「最新の就職・採用活動と今後の学生支援について」というテーマで Web による就職活動が多くなった環境について講演を頂いた。以下，内容をまとめる。

Web での説明会，面接等が多くなった分，学生は多くの企業と容易に接触が可能となった。対面であれば交通費をかけて遠方へ移動が必要だったが，それが必要でなくなり全国の企業を受験しやすくなった。しかし，それにより各社の倍率はアップした。また学生には情報が過多となり，応募のしやすさも相まって「とりあえず」受験する学生が増加した。結果として辞退者も増加した。キャンパスでの情報交換の機会が減ったためか，就活での孤独感・不安感を訴える学生が多いという。企業側からは，Web による接触は，学生を強く掴むことが難しく「グリップ不足」により学生個人をよく見ることが出来ないとの不満が出ている。しかし，背に腹は代えられず，特に上場企業などは Web メインの募集が半数にも上っているのが現状だ。都市部の学生のほうがオンライン就活に抵抗感がないというデータも出てきており，競争に勝ち抜くためにも，地方から上場企業を目指す場合，Web リテラシーの向上は必須である。



企業が最近強く重視するのが「カルチャーフィット」。企業風土，企業体質に合った従業員を集めるということだ。企業風土にあった従業員を取るためには，実際に一緒に過ごしてみるのが一番であるということで，企業側はインターンシップを重要視している。また学生側としてみれば，自分がその企業とやっていけるか身をもって体験できる良い機会であり積極的に参加してほしい。それでなくとも Web 就活が多い中で自分が会社風土に合っているか不安を抱く学生が増えているのが現状である。

当日は講演が終了した後も活発な質問，討議が続き教職員の興味の高さが感じられた。

以上

第３部

ミクロレベルＦＤ・ＳＤ

第３部　ミクロレベルＦＤ・ＳＤ

１．看護学類　・・・９８

２．地域創生学類　・・１００

３．食資源開発学類　・・１０２

４．フードマネジメント学類　・・１０４

５．事務局　・・１０８

６．事務局学務課　・・１１０

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：萩原 潤

主催者（組織）	看護学群 学術・情報システム WG 桂 晶子、および萩原 潤（FD 企画担当者）
タイトル	効率的な講義運営のための webclass 演習
実施の趣旨	本学の ICT 環境が充実しつつあり，教職員が効率的な講義運営を行うために，本学で導入されているラーニングシステムである webclass の演習を行う。
参加者	看護学群教員，事務局職員あわせて 18 人
日　時	2021 年 8 月 27 日，2021 年 9 月 10 日
場　所	301 講義室
プログラム構成	ログイン，出席チェック，資料作成，課題の作成と提出，課題のチェックと採点
招聘講師	日本データパシフィック株式会社 平　治彦氏

【内容】

看護学群のカリキュラムは必修科目が多く，一つの講義の履修者数は 100 名前後となることが多い。この 100 名を対象とした講義運営にかかる負担は大きく，例えば出席のチェックをするだけでも多くの時間やマンパワーが必要となっていた。講義に関するリアクションや質問を書かせるような場合も多く，その場合は学生からの手書き文章を改めてワープロで入力して編とする講義もあり，その場合のコストは計り知れない。講義資料の作成においても講義によっては数十ページの資料を人数分印刷する必要もあり，印刷の負担も大きく，印刷機の稼働状況も加味すると 1 日のかなりの割合を割く必要があった。

本学では 2021 年度から E-Learning システムである「WebClass」を導入し，これら履修者数が多くなることで発生する煩雑な講義管理の一部を省力化することが期待されるが，その一方でこれまでに触れたことのないシステムを講義ですぐに活用するに躊躇する教員もいる。本 FD はこのような課題を解決するために「WebClass」開発元の日本データパシフィック株式会社平治彦氏を招き，演習を通して「WebClass」の活用を促進する目的で行われた。後期が始まる前の 8 月の末と 9 月初旬に研修を行うことで，後期の講義で教員が活用できることを期待した。

8 月末から 9 月初旬にかけて看護学群では実習が行われており，1 日だけの開催では参加者が少ないことが予測されたため，同じ内容で 2 回研修を行った。E-Learning システムは教員側と学生側とで見る画面が異なり，学生側の操作がどのような形で教員側に反映されるのかがわかりにくいといった特徴があるため，事務局職員が学生の役割として教員が設定した資料の閲覧や出席などで参加した。すでに設定されている実際に行われる講義科目

を用いた研修では履修学生からも見えてしまうため，架空の講義科目を設定してもらい，その科目での研修とした。

2 日間に行われた FD に 14 名の教員と 3 名の事務職員が参加した。あらかじめ事務職員によって準備された WebClass 上の「コース」上に講師の指示にしたがって資料配布，出席確認，学生とのやりとりなどの方法を実践した。事務職員は学生役となり，教員が設定したチャットに書き込む，資料にアクセスするなどコース上で学生が行うことが期待される活動を行った。教員側はこれらを確認することで，コース上に設定したさまざまな取り組みに対する学生の反応を確認することができた。思うように進行することができず戸惑う教員もいたが，周辺の教員のフォローによって極端に進行が遅れることなく進行することができた。

9 月 10 日の研修では事務職員は遠隔地からの参加であったが，教員が設定したチャットに返答するなどして，教員は学生からの反応を想定することができた。

今後後期に向けて新たに WebClass を活用した効率的，効果的な講義運営が期待されるとともに，利用していた教員から新たな利用方法や機能に対する要望が出てくることが予測される。その場合は WebClass の開発元に情報を提供するとともに，後期が終わった段階でさらなる利用方法に対する研修も検討する必要がある。

以上

図　研修の様子

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　高橋　信人

主催者（組織）	事業構想学群地域創生学類主担当の教員
タイトル	地域創生学類におけるエンロール・マネジメントの実施に向けた課題共有 事業構想学群地域創生学類の令和２年度卒業生を事例に
実施の趣旨	現行あるいは将来のカリキュラムや入試制度を評価・策定・改変するために、意思決定のための基礎情報、エビデンスとなるエンロール・マネジメントの必要性が近年ますます高まっている。本 FD では、実際にエンロール・マネジメントを実施するために必要な情報は何か、情報入手に係る課題は何かを学類教員で共有することを目標におく。
参加者	石田祐　藤澤由和　舟引敏明　石内鉄平　高橋信人
日　時	2021 年 7 月 15 日（木）14:30〜16:00
場　所	大和キャンパス４０２会議室
プログラム構成	１．FDの趣旨説明 ２．令和２年度卒業生にかかる情報の共有（進路情報、ゼミでの活動状況等） ３．全体議論（必要情報と課題の確認） ４．まとめ
招聘講師	なし

【内容】

はじめに、今後の入試改革やカリキュラム改善のスケジュールを見据え、指針策定のための基礎情報、エビデンスとなるエンロール・マネジメントの重要性を学類主担当の教員間で共有した。次に、過去の教授会資料や教務グループなどに依頼して取得した、令和２年度卒業生に関する情報（１年終了時（学類選択時）の累計 GPA、学類選択の希望順、４年卒業時の累計 GPA、就職先の情報など）を各教員で確認し、それらから読み取れそうなこと、気づいたことについて意見交換した。その主な内容や課題をまとめると、以下のようになる。

１．AO 入学者について

令和２年度卒業生のうち、入試区分が AO の学生の多くは、卒業時の累計 GPA の評点が上位であった（上位 6 名のうち 4 名を占めていた）。しかし、各教員の見解を集約すると、AO 入学者の活動や学習の意欲には年によって大きな違いがあるようである。活動や評点の面でも評価が高かった令和 2 年度卒業生の AO 入学者のような学生をどのようにして集めるかが大きな課題であろう。そのヒントを得るためにも AO 入学者の学生像の詳細な分析を実施する必要がある。また、AO 入学者の学習意欲を持続させるために、もう少し１年時に AO 入学者が参加できる学習・活動の機会を設ける必要がある。

２．不本意進学者について

不本意進学者（第 2 希望および第 3 希望で地域創生学類に進学した学生）は、学類選択時の累計 GPA よりも卒業時の累計 GPA の方が低くなる傾向が認められた。不本意進学者を特に 2 年時、３年時にどのようにモチベートしていくかについても学類にとっての大きな課題であることが確認された。

３．就職情報の利活用について

就職情報を概観すると、地域政策コースと地域科学コースで、業種の割合に大きな違いは認められなかった。公務員や公共サービスに就職する学生の割合、県内・県外就職割合など、学類の特徴を見出すためには、当然のことながら学群全体の情報に基づいた相対的評価が必要になる。そのような学群全体のデータをいかにして取得するかも課題である。また、就職情報から業種の別以外の情報をどのようにみていくか（そもそも就職先の良し悪し等を評価できるのか）が難しい。卒業時にアンケートで希望通りの就職ができたか（就職満足度）を聞くのも一つであるが、それも学生各人で希望・満足の基準が異なる。このような就職情報をどのように利活用できるかについても、引き続き検討していく必要がある。

今回の学類 FD では、現時点で入手できる範囲でのデータに基づき、分析できそうなことが無いかを検討し、今後分析に必要となるデータ項目を挙げていくことをひとまずの目標としていたが、その過程でデータを概観することによって学類運営におけるいくつかの課題を見出すことができた。これらの課題にどのように対応するか、さらなる詳細な分析、そして今回注目した属性以外の属性（例えば、その他の入試区分、不本意入学、ドロップアウトした学生など）に注目した分析などについては今後の課題としたい。今後も引き続き、学類 FD などの機会を利用して学生の実態調査の場を設けていくことを教員間で確認した。

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　三上　浩司

主催者（組織）	食産業学群食資源開発学類
タイトル	神経発達症と教育的配慮の実際と工夫
実施の趣旨	診断はないが神経発達症が疑われる学生への対処方法の理解を促す
参加者	21 名
日　時	令和 3 年 12 月 8 日　17：00～18：30
場　所	太白キャンパス　講義棟 206 講義室
プログラム構成	講演　1 時間 10 分、質疑 20 分
招聘講師	看護学群　准教授　平泉拓

【内容】

高等教育では、心身に疾患を有する学生に対して、本人・保護者から配慮の申し出がある場合に、必要な変更と調整を提供すること（「合理的配慮」）が義務付けられている（法的な根拠として「障害者差別解消法」2016 年施行がある）。このような試みにおいては神経発達症（自閉スペクトラム症、限局性学習症、社会的コミュニケーション症等）と注意欠陥・多動症に対して注目が集まっているが、最近ではいわゆるグレーゾーンと云われる、診断はないが特性のある学生に対してどのような対応をするかが重要な課題となっている。というのも、合理的配慮を提供する根拠は、医師による診断書等と本人・保護者の申し出である。グレーゾーンの学生の場合は、配慮提供の根拠がないからである。ところが、教職員の立場としては、診断的な目眼差しを慎まなくてはならないし、かといって現実的にどのようなサポートを提供すればいいかも不明瞭であり、グレーゾーン学生への対処は極めて困難なものとなっている。このような現状では、そのような学生との関わり方に逡巡し、教職員にとっては負担感が、学生にとっては不全感が蓄積することになる。

そこで、本 FD では、神経発達症の専門家である看護学群・平泉准教授をお招きし、合理的配慮の枠組みが適合しないグレーゾーンの学生の特徴や、合理的配慮とは異なった形で安心・安全を提供する枠組み（「教育的配慮」）に関するお話をいただいた。これを通して学生支援を専門としない教職員が日常的にできる成長促進的な関わりとしての権利や利益の擁護（「アドボカシー」）、危機と成長（「発達」）、精神的な回復力（「レジリエンス」）、建設的な対話、説明と同意の教育的活用、限界設定の仕方を学び、グレーゾーンの学生への基礎的な対応力を高めるための情報を共有した。なお、本講演は食産業学類 FD であったが、フードマネジメント学類の教員や保健室職員も参加して開催された。

本 FD は教授会後に設定されていたが、それが長引いたため予定より 1 時間遅れて開始された。このように遅い時間での FD となったが、平泉先生の丁寧かつ具体的なわかりやすい解説を受け、質疑も複数あり、充実した勉強会となった。また、講演修了後も数名の教員

が平泉先生を取り囲みより深い議論がなされたことは、本 FD の関心の高さを示していた。

講演中の平泉先生

聴講の様子

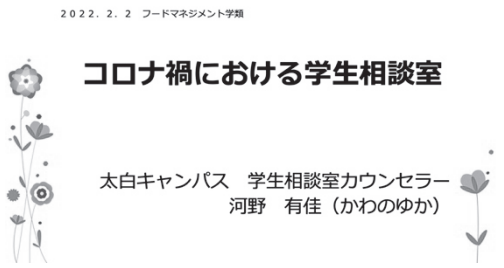
令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　石川　伸一

主催者（組織）	食産業学群　フードマネジメント学類
タイトル	コロナ禍における学生相談室および保健室での相談の動向について
実施の趣旨	内容：学生相談室の河野先生と保健室の米谷先生から，ここ１年で学生からどのような相談が増え，どのような傾向が見られるか，また，学生だけでなく，教職員の相談はどのような傾向が出ているかなどについて具体的な事例を併せて報告頂く。各教員が現状の学生動向を把握し，今後の学生教育の質を考える機会とすることをこのミクロ FD の目的とする。
参加者	西川，笠原，金内，川村，作田，白川，三石，毛利，森田，島津，庄子，都，堀田，赤澤，元木，滝口，石田，石川
日時	令和 4 年 2 月 2 日（水）16:10～17:10
場所	team によりオンラインで実施
プログラム構成	16:10～16:15　FD の趣旨説明（三石先生） 16:15～16:35　河野先生のご講演 16:35～16:55　米谷先生のご講演 16:55～17:10　質疑応答
講師	太白キャンパス 学生相談室 河野有佳 先生 太白キャンパス 保健室 米谷麻衣 先生

【内容】

〇学生相談室 河野先生 講演内容（抜粋）



- 太白キャンパス学生相談室の現状として，学生相談数が昨年度に比べて 1.8 倍に増えている（例年よりも多い）。相談内容の内訳は「心身健康」の相談が増加している。
- 「心身健康」の具体的な内容として，『気分が落ち込む』『気分の浮き沈みが大きい』などが挙げられており，原因はいろいろ考えられるが，直接的な原因としてコロナをあげる人はほとんどいない。背景のひとつとして，コロナ禍の生活変化やストレスがきっかけになったり，もともとの症状が悪化したりするケースも考えられる。

- 「授業・進路関係」の学生コメントとして，『課題が多くて余裕がない』『課題や小テスト，プレゼン準備等で授業後や土日も気が休まらない』などがあった。
- 「対人関係・心理」のコメントとして，『大学には来ているけれども友達との関わりが浅い』などがあった。コミュニケーションを活発に行っている学生とコロナ禍で周囲の学生との関わりをうまく作れていないと感じている学生との差がある。
- コロナ禍が人々に与える影響は大規模災害に匹敵するという指摘もあり，長期化によって影響や問題は個別化し，格差が広がっていくこと，ますます周りからは見えにくくなっていくことが懸念である。気になる学生のためにできることとして，困っている学生に気づき，支援のネットワークの中で見守っていく必要がある。学業上のサイン，身体的サイン，心理的・行動的サインを見逃さないようにする。

〇保健室 米谷先生 講演内容（抜粋）

- 宮城大学における新型コロナウイルス感染症の対応として， ウェブサイト上のチャットボットでの問い合わせや手続きフローが整備されている。
- 保健室利用状況として，利用学生数は増加しており，特に健康相談（身体・健康），生活・進路相談，健康診断事後指導が増加している。
- コロナ禍に関連して学生から寄せられた声として，令和 2 年度新入生では，「友人はできたが，コロナにより交流が浅く，授業で出された課題や，期末試験など協力し合える関係性ではない」や「サークルの活動が無くなり，思い描いていたキャンパスライフではない」などがあり，その他の学年では「先生が忙しい様子で，学業や研究について十分に相談できない」などがあった。

〇質疑応答での内容（抜粋）

- 心身面の相談はいつ頃が多いか？→ 試験期間やレポート提出が多い時期だけでなく，学期始まりなども多い。12 月頃が年間で一番のピークである。
- 学年によって相談件数に違いがあるか？→ 新しい環境に慣れていない 1 年生と就活と卒論が忙しい 4 年生のストレスが多い傾向が見られる。
- 食産業学群の学生は他の大学，他の学群との違いはあるのか？→ 宮城大学のコース選択・進級への評価基準の影響があるかもしれない。食産業学群の特徴としては，実験・実習のレポートが多いことが，心理的負担の要因の一つかもしれない。本学の欠席回数が厳しいことに敏感な学生もおり，教員にきちんと相談するようにと伝えている。
- 不調の要因が複合的である（コロナだけではない）場合，何か参考になることはないか？ → 学生から情報を聞いて，情報を共有することが大事。自律神経失調症の学生は，

感染症なのかどうかわからないので，個人で判断させるのではなく，いろいろ複数の人と相談することが大事なのではないか。学生にとってもいろいろ相談相手が複数いることが大事である。

以上

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：事務局総務課総務グループ 神山　友樹

主催者（組織）	事務局
タイトル	令和３年度新規採用職員合同研修
実施の趣旨	大学の生存競争が激化している厳しい経営環境において，社会における本学の存在意義を確立していくためには，資源の選択と集中を鑑みながら大学経営の最適化，施策の具体化・実現化を担う人材である「経営参画型職員」の養成を組織的に進める必要がある。 本研修では，新規採用職員が大学を取り巻く環境や教育の法体系，運営体系などを学ぶことにより，この「経営参画型職員」となる礎の享受を図る。また，講師となる職員についても，根拠の再確認による知識の精緻化，業務棚卸しによる改善への意識付けの機会とし，職員全体の能力の底上げを図る。
参加者	令和２年度，令和３年度新規採用職員等　４名
日　時	令和３年６月 18 日，９月２日，11 月 11 日，11 月 30 日， 令和４年１月 24 日
場　所	宮城大学大和キャンパス，オンライン
プログラム構成	1.　大学入学者選抜制度の概要，高大連携と高大接続 2.　単位制度と教務・教育支援業務 3.　公立大学法人会計と収入，財務・会計制度 4.　大学の研究支援業務・大学の地域連携 5.　公立大学法人制度、大学の評価制度
招聘講師	各業務担当職員

【内容】

＜実施方法＞

上記プログラム構成１．～ ５．の題材について，業務担当職員の指定した研修資料を使用し，１回６０分座学形式（遠隔含む）により，業務を所管する部門の先輩職員からのレクチャーを実施。参加者は研修担当職員が課した課題に取り組んだ後に当日の研修に取り組む。

＜概評＞

本研修では新規採用職員にターゲットを絞り，経営参画型職員となる礎の享受を図り且つ，自身のキャリアビジョン構築の一助とすることを目的に，「大学運営の全体像の把握」「他業務への理解と興味の創出」に重きをおき実施した。ガイドブックや講師による個別課題を用いた積極的な事前学習，講師となった先輩職員の丁寧な説明と資料提供もあり，１年を通して大学業務の多岐にわたる内容を理解する一助となったと考えられる。

令和３年度からは実施主体を総務グループへ移譲し，事務局職員の正規の研修プログラ

ムと位置づけ前年を踏襲しつつ取り組みを行った。

参加者からは，「早い段階で部署ごとの業務を知ることができ，現在の業務への取り組みの目線が変わった。」「他の業務を知ることで，他の課・業務との関わりを考えて仕事ができるようになったため，視野を広くすることができる良いきっかけになった。」「部署の担当の方の仕事に対する考え方やこれまでの経歴等，その部署，その人でないと聞けない話を聞く良い機会をいただいた。今後『自分ならどう説明するか，どう説明したらわかってもらえるか』も考えながら仕事に取り組んでいきたい。」などの前向きな声がきけた。

以上参加者の声から本研修において大学運営の全体像の把握と他業務への理解と興味の創出を得る目的を一定程度達成することができたと考えられる。

今後は，大学運営特有の事項にかかる概要研修の定着を図るとともに，時代に即した内容を取り入れた研修を題材とするなど，大学職員として求められる能力を身につけるべく研修内容の見直しを適宜行い，よりよい研修へと発展させていきたい。

以上

令和３年度ＦＤ・ＳＤ実施報告書

記入者：　事務局学務課教務第１グループ　山﨑　拓哉

主催者（組織）	事務局学務課
タイトル	20 代・30 代からのキャリア
実施の趣旨	学務課所属の 20 代・30 代の職員に向け，仕事の仕方にまつわる職員研修（事務研修）とは別の，自らの人生や生き方を講師と参加者が一緒に考える「キャリア研修」を全 4 回計 100 分で実施し，若手職員一人ひとりがキャリアの考え方を正しく理解し，各自がそれぞれの仕事において主人公となり，成長していくための契機とする。
参加者	学務課の職員 9 名 和田尚　主任主査　関野純子　主任主査　菅野司　主査 塚田元子　主事　塩和海　主事　三浦　真優　主事 水戸みなみ　主事　太田なぎさ　主事　山﨑拓哉　主事
日　時	第 1 回　6 月 3 日（木）11 時 25 分～11 時 50 分 第 2 回　6 月 10 日（木）11 時 25 分～11 時 50 分 第 3 回　6 月 24 日（木）11 時 25 分～11 時 50 分 第 4 回　7 月 1 日（木）11 時 25 分～11 時 50 分
場　所	事務局会議室
プログラム構成	各回，講師（学務課　阿部主査）が 10 分以内で話せる話題（テーマ）を複数用意し，質問等を受ける形式 第 1 回　「カウンセラーの基本的態度」「キャリアとは何か」 「人が育つとはどういうことか」「対話について」 「ライフサイクルについて」 第 2 回　「ナラティヴ」「アサーションとアサーティヴ」 「アサーティヴの実践」「新しい関係性の構築」 「(以上述べてきたことで）まちがえてはいけないこと」 「若いときに豊かな人脈を築くこと」 第 3 回　「転機について」「ハラスメントについて」 第 4 回　「2020 年代宮城大学がめざすべき方向は？」 「教職協働について」「若手の皆さんへの伝言」 「アサーティヴであるために」
招聘講師	学務課　阿部成雄　主査 （2019 年 1 月　国家資格「キャリアコンサルタント」取得）

【内容】

講師の阿部主査は，平成３１年１月に，国家資格「キャリアコンサルタント」を取得された。実務に必要な知識やスキルを基に，毎回数分で話せるテーマをいくつかご用意いただき，講義後に質疑応答，意見交換する流れであった。阿部主査からは，テーマ１つ１つに対し，丁寧にポイントを抑えながらお話しいただいたが，何より「キャリア」の定義にとどまらず，阿部主査のプライベートを含んだ実体験や自身の意見を織り交ぜながらお話しいただいたことが，今後の仕事でのキャリア，プライベートを含む生き方や人間関係について考える良い機会となった。

第１回「カウンセラーの基本的態度」については，カウンセラーのみならず，日常生活での人間関係において基本的なこと，有効であると考え，以下に記す。

①簡単な受容：相槌により，相談者の発言に評価を加えず，無条件に受け取る
　→決めつけや否定をしない，さらに傷つけるとセカンドハラスメントにつながる
②繰り返し：相談者の言葉をそのまま繰り返す
③感情の反射：相談者が「今，ここ」で表出している感情を，「鏡」のように映し出す
④明確化：相談者がうまく表現できない内容や感情を，適切な言葉や表現で言い表す
　→主観や同情がはいってはいけない
⑤要約：相談者が語った内容を要約する

最後の質疑応答，意見交換で挙がった内容の一部を以下に記す。

Ｑ：「相手が感情的になったとき，どう対応すればよいか？」
Ａ：組織対組織の構図にして解決に持って行く
Ａ（ＮＧ例）「そんなんだと友だちなくすよ」と言ってあげる

Ｑ：「どうせわかってもらえないと，あきらめてしまう」
Ａ：「対話」をすること。このとき「相手の立場で考える」「相手への思いやり」が大切であるが，おもねりや迎合とは異なるので注意。必ず自分の意見を伝えること。

以上

令和３年度宮城大学 FD・SD 実施報告書

発行：令和４年３月

発行者：宮城大学カリキュラムセンター

TEL: 022-377-8318　　FAX: 022-377-8282

WEB: http://www.myu.ac.jp

E-mail: kyoumu1@myu.ac.jp

宮城大学
MIYAGI UNIVERSITY